

日本語フィラーの音声形式とその特徴について

—聞き手とのインタラクションの程度を指標として—

川田 拓也

2010 年

謝辞

筆者は本論文を執筆するにあたって、多くの人に支えられ、助けられた。この場を借りて感謝したい。

まず、指導教授である京都大学大学院文学研究科言語学講座の田窪行則先生にお礼申し上げたい。筆者は修士論文において会話に現れる間やポーズといった沈黙について取り上げた。その発展として、フィラーも見てみたらどうかと勧めてくださったのが田窪先生だった。田窪先生のこの言葉がなければ、フィラーのおもしろさに気づくことはなかったように思う。長きにわたり、厳しくかつ真剣に指導をしてくださった田窪先生に感謝申し上げます。

同言語学講座の吉田和彦先生、吉田豊先生にもお礼申し上げたい。先生方には大学院演習を通じて貴重なコメントをいただいた。2006年に京都大学を退官された庄垣内正弘先生にも修士課程、博士課程を通じて大変お世話になった。感謝申し上げます。

筆者は2008年から独立行政法人情報通信研究機構(NICT)知識処理グループにおいて黒橋禎夫先生(京都大学)を中心とするプロジェクトに参加している。黒橋先生は折に触れ筆者の博士論文の進捗を気にかけて、叱咤激励してくださった。黒橋先生が背中を押してくださったからこそ博士論文を書き始める決心がついた。筆者の上司である木俣豊氏には筆者の博士論文執筆にあたって多大なご理解とご協力をいただいた。この場を借りて両氏に感謝申し上げます。また、乾健太郎先生(東北大学)をはじめプロジェクトメンバーの皆様からは筆者の研究内容を紹介する機会を設けていただき、ご意見もいただいた。工学的な言語処理を専門とする研究者からの意見を得る機会は大変ありがたかつ

た。感謝申し上げたい。

本論文に用いた Billboard corpus は文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「情報爆発時代に向けた新しい IT 基盤技術の研究」による。河原達也先生（京都大学）、および高梨克也氏（京都大学）は快く Billboard corpus の利用を許可してくださった。高梨氏は Billboard corpus を利用した研究成果の発表を後押ししてくださった。感謝申し上げます。

本論文は京都大学大学院言語学研究室の大学院生諸氏との議論によるところも大きい。大学院生諸氏には公私を通じてお世話になった。これまでめげずに研究を続けられたのはひとえに研究室の友人たちのおかげである。本当にありがたかった。これからもお互い励まし合いながらやっていければと思う。

最後に筆者の生き方を尊重し、励まし続けてくれた両親に感謝したい。

なお、本論文における不備、誤り等の責は全て筆者にある。

目次

表目次	vii
図目次	ix
第1章 序論	1
第2章 背景	7
2.1 はじめに	7
2.2 名称について	7
2.3 間投詞の品詞論的位置づけ	8
2.4 間投詞の意味に関する議論	11
2.4.1 間投詞の概念的な意味	12
2.4.2 間投詞の手続き的意味	14
2.5 フィラーの言語心理学／認知科学的考察	20
2.5.1 フィラー	20
2.5.2 フィラーとコミュニケーション	22
2.5.3 フィラーと文産出	25
2.6 フィラーの目的指向的分析	29
2.7 要約	32
第3章 談話の形態とフィラー	35
3.1 はじめに	35
3.2 「聞き手との関わり」と談話の形態	36

3.2.1	使用データ	38
3.2.2	CSJ	38
3.2.3	Billboard Corpus	40
3.3	談話形態ごとのフィラーの分布	44
3.3.1	CSJ 独話資料におけるフィラー	44
3.3.2	Billboard Corpus におけるフィラー	48
3.3.3	CSJ 対話資料におけるフィラー	49
3.4	三種類のフィラーと談話形態間における比較	52
3.4.1	三種類のフィラー	52
3.4.2	方法	53
3.4.3	考察: 「聞き手との関わり」とフィラー	55
3.5	要約	57
第4章	フィラーと視線の同期について	59
4.1	はじめに	59
4.2	議論の背景	61
4.2.1	フィラーの自己指向性と他者指向性	61
4.2.2	「え」型フィラーと指示詞型フィラー	63
4.2.3	視線とフィラー	64
4.2.4	先行研究の課題	65
4.3	ラベル付与	66
4.3.1	視線	67
4.3.2	フィラーラベル	69
4.4	フィラーと視線の同期	71
4.4.1	同期区間	71
4.4.2	調査対象	72

4.5	調査結果と考察	73
4.5.1	調査結果	73
4.5.2	考察	75
4.6	談話状況の差異	77
4.7	「ま」型フィラーと視線	79
4.8	要約	80
第5章	「まあ」の分析	83
5.1	はじめに	83
5.2	スケールに作用する表現としての「まあ」	83
5.2.1	「まあ」の分布とカテゴリー	84
5.2.2	「まあ」に関する先行研究	87
5.2.3	Scalar implicature と「まあ」	90
5.2.4	発話行為緩和表現としての「まあ」	95
5.2.5	「まあ」による発話行為への作用	96
5.2.6	「ちょっと」と「まあ」の差異	98
5.2.7	応答表現としての「まあ」	99
5.2.8	副詞的な「まあ」の性質	100
5.3	「まあ」の談話中における役割	100
5.3.1	「まあ」と文末形式との共起	101
5.3.2	話し手の情報状態と「まあ」	106
5.4	「まあ」と「ま」型フィラー	106
5.4.1	ケド節と「ま」型フィラー	106
5.4.2	対話の種類と「ま」型フィラー	111
5.4.3	聞き手と「ま」型フィラー	115
5.4.4	英語のフィラーと「ま」型フィラー	116

5.5 要約	119
第6章 結論	121
用例出典	127
参考文献	137

表目次

3.1	Settings of language use (Clark 1996: 8)	36
3.2	CSJ 収録データの概要 (前川 (2004: 4) より)	38
3.3	Billboard Corpus の概要	42
3.4	各資料の概要	43
3.5	各資料におけるフィラーの頻度 (上位 20 種)	46
3.6	CSJ: 対話資料におけるフィラー	50
3.7	談話形態とフィラーの関係 (平均比率)	54
4.1	視線同期時間 (秒)	74
4.2	視線同期回数 (回)	74
4.3	各フィラーの平均長 (秒)	76
4.4	プレゼン時と質疑応答時の視線とフィラー分布	77
4.5	プレゼン時と質疑応答時の視線同期時間 (秒)・回数 (回)	78
5.1	「まあ」とケド節との共起 (個数)	111
5.2	CSJ: 対話資料におけるフィラー (表 3.6 再掲)	112

目次

2.1	Levelt(1989:9)による文産出モデル	26
3.1	Billboard Corpusの撮影状況	41
4.1	ELANによるアノテーション作業画面	66
4.2	Billboard Corpusの撮影状況(図3.1再掲)	67
4.3	視線区間	68
4.4	視線ラベル付ファイルのフォーマット	68
4.5	フィルター区間	69
4.6	フィルターラベル付ファイルのフォーマット	70
4.7	同期区間	71
4.8	各フィルターと視線の同期率	75
4.9	070423_13における各フィルターと視線の同期率	78
4.10	「え」型フィルターと「ま」型フィルターにおける視線の同期率	80
5.1	「まあ」と接続助詞との共起(平均比率)	111
5.2	各対話形式の参加者の発話時間	113
5.3	CSJ対話資料における話者ごとの「ま」型フィルター/「え」型フィルター の生起数	114

第1章 序論

自然発話において、話し手は常に流暢な発話を行うとは限らない。発話の途中では、発話の内容とは直接関係のない「あのー」や「えーと」のような言い淀みや、発話の繰り返し (Brown 1977)、つっかえ (定延・中川 2005) といった現象がしばしば見られる。このような流暢な発話を妨げる現象は「非流暢性 (disfluencies)」と呼ばれることがある (Shriberg 2002, 伝・渡辺 2009)。非流暢性は通常、文字言語では現れず、音声言語の特徴の一つとして挙げられる (田窪 1995: 1020)。特に「あのー」や「えーと」のような言語的な言い淀みは、一般に「フィラー」と呼ばれる。そして、フィラーとみなされる音声形式は日本語においては「間投詞」に分類される (森山 (1996), 田窪・金水 (1997) など)*¹。本論文はフィラーの音声形式ごとの振る舞いの違いを記述することを目的とし、話し言葉が使用される場における話し手と聞き手とのインタラクションの程度の違いが現れるフィラーの形式の違いに影響を与えることを示す。

フィラーは近年、言語学だけではなくコミュニケーション論や認知科学および工学的領域からの研究が盛んになってきている。例えばフィラーを観察することによって話し手が現在、何を考えているのか、どういう発話を組み立てようとしているのかといった、心内の状態がある程度予測できるとする見方がある (Levelt (1983), 定延・田窪 (1993), Clark and Fox Tree (2002), Watanabe (2009) など)。すなわち、言語産出過程の解明に関してフィラーの観察が有用である可能性が指摘されている (伝・渡辺 2009)。一方で、フィラーは話し手が相手との

*¹ 本論文では厳密に名称としての「感動詞」と「間投詞」の区別はせず、「間投詞」の名称で統一している。名称に関しては 2.2 で後述する。

円滑なコミュニケーションを遂行するための方略として位置づける見方もある (Brown (1977), Goodwin (1987), 西坂 (1999), 串田 (2002) など)。さらに工学的な観点からは、会話中のフィラーを自動的に認識することによる自然な応答システムの構築が提案されている (Goto et al. 1999, 伊藤他 1999)。このようにフィラーをはじめとする音声言語特有の現象を研究対象とすることによって、書き言葉を中心とした言語記述からは見ることのできなかつた側面が明らかになる可能性がある。しかしながら、こうした非流暢性の振る舞いを観察するためには、様々な分野の知見を総合する必要がある、さらに均質で、ある程度の量がある実際の自然発話を基にしたデータを用意する必要がある。こうした課題があるために、フィラーを含めた非流暢性の研究は現状では発展途上の段階である。

本論文は、フィラーが発せられる談話の状況や非言語情報（話し手の視線）などに着目し、フィラーの音声形式ごとに現れやすい環境条件が異なることを明らかにする。日本語のフィラーの音声形式はいくつかのバリエーションがある。次の(1)を見てほしい。

(1) 方言共通語の使い分けの問題といったようなことを考える材料を得る

と **ま** そういう仕事をしております **えー** 調査に出掛けますと **あのー** 飛び込みの調査が多いんですけども **えー** 門のインターホンぴんぽんと鳴らすと **まー** 早く開けてくださる方半分までいらっしやらないんですね **えー** 調査間に合ってますとかですね **え** これ実際本当に言われたことがあるんです (中略) ということで誰何されたりですね **ま** そういう **うー** **あのー** 色んな経験をしながら **あのー** **うー** 仕事をしております

(A03M0175)

(1) は「日本語話し言葉コーパス (国立国語研究所 2004)」に収録された講演音声の一部である。太字で示した部分がフィラーとして認定された表現で、「え

(一)」、「ま」、「うー」、「あの(一)」などが観察される。このように日本語のフィラーはほぼ母音のみで構成されるもの(「あー」「えー」「うー」「おー」など)、指示詞と同形のもの(「あの(一)」「その(一)」)、副詞と同形のものなど(「まあ」など)が見られ、さらに終助詞や判定詞の後接が許される場合がある(「あの一ですね」など)ため、実際に会話で現れる音声形式は多様である*2。本論文ではこうした日本語のフィラーに注目し、その形式間の差異を、自然会話を収録したコーパスを用いて検討することを目的とする。特に自然会話で頻出していた「え」を初頭音に持つフィラー、指示詞と同形のフィラー、副詞「まあ」と同形のフィラーの三種類のフィラーに注目する。

これまでフィラーは「言い淀み」や非流ちょう性の一部として扱われ、形式間の違いについてはあまり顧みられていなかった。少数ながらフィラーの形式の違いについて論じられたものについても、定量的な側面も含めて研究された例はそれほど多くない。本論文は定量的、定性的観察の両面からフィラーの生起環境や条件を考察し、フィラーの形式ごとに好まれる生起環境や条件が異なることを示す。特に話し言葉が使用される場における話し手と聞き手とのインタラクションの度合いに応じて、話し手が発するフィラーの音声形式の傾向に差が生じることを示す。

本論文の構成と要約は次の通りである。次章は、本論文の背景情報の紹介と位置づけ、フィラーを含めた間投詞一般についての先行研究を概観する。まず間投詞の国語学、言語学的見地からの議論をまとめ、品詞論的にどのように扱われてきたのか、また、間投詞の意味についてはどのように考えられてきたの

*2 「フィラーに終助詞や判定詞が後接される」という書き方には語弊がある。形式的にどの範囲までをフィラーとみなすかについては曖昧性が残ると思われる。例えば、「あの一ですね」の場合、「フィラー+終助詞」とみなすのか、「あの一ですね」をひとまとまりでフィラーとみなすのかは、自明に決まるものではない。本論文では、後者の立場をとり、後接された判定詞や終助詞も含めて一つのフィラーであるとみなしている。なお、本論文では、2.3節において、間投詞の特徴の一つとして、通常統語的な依存関係を持たないで用いられることを挙げている。従って通常独立して用いられることがない間投助詞や終助詞自体は、議論の対象外としている。

か、様々な立場からの議論をまとめる。フィラーについては言語学だけではなく、コミュニケーション論や認知科学的観点からの研究も多い。これらの知見もふまえ、コミュニケーションにおける役割などフィラーの対他的な側面に指向した研究と、話し手自身の文産出に関わる役割など対自的な側面に注目した研究の両面から紹介する。

3章では、日本語の話し言葉が収録されたコーパスをもとに、日本語のフィラーの実態を定量的に観察する。特に談話の形態によるフィラーの分布の差異に注目する。本論文で扱った談話の形態は、講演を中心とする不特定多数を聞き手とする談話形態と、インタビューなど一対一の対話形態、さらに、「聞き手との関わり」の観点から講演と対話の中間的な位置づけとなる、ポスター発表形態の三つから構成される。いずれの形態においても「え（ー）」、「えーと（ー）」など「え」を初頭に持つフィラー、「あの／その」のような指示詞と形態を同じくするフィラー、副詞「ま（あ）」と形態を同じくするフィラーの三種類が大部分を占めていた。ただし、談話形態により三種類のフィラーの分布は異なっており、「えー」のようなフィラーは対話で少なく、「まあ」のようなフィラーはポスター発表形式の談話に多く見られる結果となった。すなわちフィラーはその形態ごとに現れやすい環境が異なるといえる。

4章では、音声だけではなく映像も収録されているポスター発表形式の会話コーパスをもとに、フィラーと視線の関係について観察する。その結果、「えー」を発する話し手はその間、聞き手から目をそらしやすい傾向が見られた。前章の結果もふまえれば、「えー」は聞き手よりは、話し手自身に指向されたフィラーであることが示唆される。「まあ」についても「えー」と同じように聞き手に視線が向けられない傾向が見られた。

5章では「まあ」について分析を行う。まず、副詞として振る舞う「まあ」の記述を語用論的な観点から行い、「まあ」が派生的に緩和表現として振る舞うこ

とを述べる。それとともに「まあ」は談話中で、話し手が聞き手に対して未知の情報を提供する際に現れることを示す。対話データからフィラーとして振る舞う「まあ」の場合も同様の結果が観察された。3, 4章より、「まあ」は、「え」型フィラーと同じく話し手に指向した傾向を持つ一方で、眼前に特定の聞き手がおり、聞き手の知識状態を勘案しながら談話を進める必要がある状況が「まあ」の生起に適した環境であることを提案する。

6章で全体の議論をまとめ、今後の展望について述べる。

第2章 背景

2.1 はじめに

本節では、これまでの間投詞およびフィラーに関する諸研究を概観する。フィラーとは、いわゆる言い淀みや場つなぎ語で、「えー(と)」や「あの(ー)」 「ま(あ/ー)」といった音声形式が相当する。本論文は品詞としてはフィラーを間投詞の一部とみなす立場(森山(1996), 田窪・金水(1997)など)をとり、まずフィラーの上位概念である間投詞一般に関する国語学、言語学(語用論)的見地からの議論をまとめておく。フィラーに関しては言語学的見地だけでなく、心理言語学、認知科学および会話分析に代表されるコミュニケーション研究からのアプローチも盛んである。そのためフィラーの定義や特徴に関しては、心理言語学、認知科学的分野からの知見が不可欠であるため、2.5節において改めて議論する。

2.2 名称について

まず、「間投詞」という名称の整理をしておく。本論文では名称としての「感動詞」と「間投詞」の区別をしない。先行研究で「感動詞」と呼ばれている表現(例えば鈴木(1973), 森山(1996), 定延・田窪(1995)など)は本論文では全て「間投詞」と同一か、もしくは間投詞に含まれるものとして扱う。混乱を避けるため、引用を除き、「間投詞」と統一的に表記することとする。

また、間投詞は「談話標識(discourse marker)」という名称で呼ばれることもある。例えば富樫(2004)は間投詞を「談話標識」という名称で用い、Schiffrin(1987)は、英語の間投詞的表現である *well* や *I mean* などについて“discourse marker”という名称を用いている。しかし「談話標識」としてみなされる言語形式の範囲

は間投詞よりも広い。例えば Blakemore (2004) における談話標識は非真理条件的性質 (non-truth conditionality) と発話や文をつなげ、談話の一貫性 (coherence) をもたらす性質を持つ形式が相当する。そのため日本語では接続副詞相当の *but* なども談話標識とみなされる。本論文は接続副詞については議論の対象外である。そのため、本論文では「談話標識」という用語自体は用いない。ただし、先行研究において間投詞相当の形式が扱われている場合は、先行研究での名称に関わらず、「間投詞に関する研究」として扱い、断りのない限り「間投詞」と呼称することとする。なお、「フィラー」など、間投詞の下位範疇に属する名称については、「間投詞」とは呼ばず、その名称を用いる。

2.3 間投詞の品詞論的位置づけ

間投詞が品詞的な側面から議論される時、焦点となる点が二点ある。まず、間投詞の品詞としての独立性が議論される。もう一点目は他品詞にはない統語的な独立性の扱いが議論される。

まず第一点目に関しては、例えば、ギリシャ語の文法研究の間では interjection (間投詞) は副詞として位置づけられていたことが指摘されている (Ameka 1992: 102)。国語学的な伝統においても山田 (1908) のように間投詞を副詞 (助詞) の一部としてみなす議論が展開されている*1。また、そもそも間投詞を品詞として認めることに消極的な議論 (安田 1928: 58) もみられるが、多くの場合、間投詞は独立した品詞として扱われている*2。日本語の間投詞は形式のバリエーションが豊富で、かつ、その表層的な形式が他の品詞と共通する場合も多い。

*1 山田 (1908) は次のように述べている。

之を (間投詞) を獨立語といふ説もあれど、其は必或思想の前行をなすものにして、若し、単独に用ゐるとせば、其は一の完全思想を發表してこの一語に寓したるものなり。かかる用法は所謂副詞にも動詞形容詞にも存在するなり。之を以て見れば、これらの語を総して間投詞又は感動詞といふ西洋文典の名目を以て一括し去ることは到底能はざるなり (山田 1908: 132)。

その上で、山田 (1908) では「あら／あな／あはれ」などの感動を表す語は感応副詞として取り扱われる。

*2 安田 (1928: 58) は「厳密に言へば一語即一文を本質とする感動詞は品詞ではなく従つて單語でもない。」とした上で、感動詞も語法上それ以上分析できない単位であることを挙げ「單語といふ外ない (p.58)」とする。

例えば指示詞としても振る舞う「あの」や「その」は、会話の中で以下のような環境で現れれば、間投詞とみなされる。また、話し手の悔しさの感情と共に発せられる(2b)のような場合は名詞である「畜生」と同形式である。

(2) a. (講演で)私があの一小学生だった頃はですね…

b. 畜生何するものぞ(三浦 1932: 437)

このような点から、同形式の他品詞とのつながりが議論されることもある(三浦 1932)。鈴木(1973: 138)が間投詞を「日本語の品詞論の中での的確な地位が与えられず、かつ、その品詞名の下に所属されるべき語の浮動しているもの」と指摘するように、間投詞を他の品詞を区別するための明確な線引きを設けることは難しい。

もう一点目は間投詞が統語的な依存関係を持たない独立した要素であるかどうかという議論がある。この点に関しては、間投詞は単体で、一文とみなすべきかという議論にしばしば置き換えられる。鈴木(1973)によれば国語学史上で最初に間投詞が単体で文であることを明示的に述べたのは和田(1905)で、「(間投詞は) 獨立して殆ど一文を成す」(和田 1905: 87)と述べられている。保科(1911)、時枝(1950)なども同様に間投詞が単独で一文を成すと主張しており、「感動詞は、それだけで具體的な完結した表現と認めることが出来るから、一の文と見なすことが出来るのである」(時枝 1950: 179)と述べられているとおりである。鈴木(1973: 169)は間投詞を文とみなす考え方を踏襲し、以下の点を指摘している。

- (3)
- 感動詞は事柄の表現ではない。
 - 助詞、助動詞のように事柄と事柄の関係を表したり、事柄に限定を加えたり、事柄についての判断を示している表現でもない。

この点を踏まえ、鈴木(1973)は間投詞は『「詞」と「辞」が融合した表現』として位置づけている。例えば、「海よ」は「詞」である「海」と、「辞」である「よ」が明確に分化しているが、海を見て「おお」と声を上げたとき、事柄とそれに対する話し手の判断が融合しているとみなしている。鈴木(1973)はいわゆる句を「詞」と「辞」が結合したものとみなしており、「梅の」や「梅だ」などが含まれるが、「だ」のような完結形式をとった句を「文」と規定している。従って間投詞は「詞」と「辞」が融合しているので『「語」ではなくて「句」である』(鈴木1973: 169)。さらに『形式上完結体であるから「文」でもある』(鈴木1973: 169)ということになる。

間投詞の統語的な独立性については言語学および認知科学的な研究においても広く指摘されている。

本論文でも、間投詞の品詞としての位置づけの曖昧性と、統語的な独立性に関してはこれ以上の議論はせず、受け入れる立場をとる。ただし、これまで議論の中心となってきた間投詞の種類に関しては偏りが見られると考える。国語学的伝統において「感動詞」の名称が広く使われるように、広い意味での「感動」を表す言語形式の記述に重点がおかれてきた。例えば鈴木(1973)における感動詞の分類は次の2種である。

(4) a. 感情（驚き・詠嘆など）の表現

- あっ、大変だ。／おやっ、へんだぞ／ああ、苦しい。／おっと、あぶない。

b. 意志（呼びかけ・応答など）の表現

- おい、君。／こら、待て／もしもし。／はい、そうです

前者は話し手自身の外的ないしは内的感情変化が言語化された表現といえ、後者は聞き手の存在が前提となる、他者に向けた感情（応答）表現である。森

山 (1996: 52) は内的情動表出と対他的情動表出の二種の観点をもとに、間投詞を以下のように細分化している。

(5) a. 対他的でない

1. 情動的感動詞: わあ、おお、まあ、げっ、ああ

2. 掛け声: よっこらしよっと、どっこいしょ

b. 対他的

1. 挨拶・呼びかけ: おはよう、よっ、ねえ、おおい

2. 応答詞: はい、へえ、いいえ

3. いい淀み感動詞: あああ、ええ、ううん

特に、本論文で議論の中心となるのが森山 (1996) における「いい淀み感動詞」と分類されている対象で、いわゆる「フィラー」と呼ばれる言語形式である。このフィラーは間投詞研究史においても「語句のつながりに発する「エーソノウー」など遊びことばの間投声も含めて考えるべきか、問題点が多い」(森田 1973: 182) と述べられているとおり、間投詞に含まれるかどうかという点でも揺れている。鈴木 (1973) のように議論の対象外とされることも多かった。ただし、2.5 節でも述べるが、本論文では、森山 (1996) の分類のようにフィラーが「対他的」であるという前提は持たない。この点に関しては、間投詞における言語学的もしくは認知科学的研究を概観しておく必要がある。次節ではこれまでの言語学、言語心理学、認知科学的研究における間投詞およびフィラーに関する議論をまとめる。

2.4 間投詞の意味に関する議論

本節では主に言語学（語用論）的立場からの間投詞研究を概観する。特にここでは「間投詞の意味」に関して言語学、特に語用論的な立場からの主張を見ていく。

2.4.1 間投詞の概念的な意味

語用論・意味論的なアプローチにおいて、間投詞の概念的な意味の有無が議論の対象となることがある。特に強い考え方としては、間投詞が命題的内容に還元できると考える立場 (Wilkins 1992, Wierzbicka 1992) がある。このような立場は Wharton (2003) では、“conceptualist” と呼ばれている。例えば Wilkins (1992: 119) は “Interjections have ‘real’ semantic (i.e., propositional/conceptual) content” と述べており、さらに全ての間投詞は基本的に直示的要素 (deictic elements) とみなせる (Wilkins 1992: 119) と主張している。Wierzbicka (1992) は間投詞を命題的要素に還元することで諸言語の間投詞の記述を行っている。さらに、同じ感情を表す間投詞の「意味」が言語間で僅かながら異なることを、命題的要素に還元することで説明しようとしている。例えば、ポーランド語の *fu* と英語の *yuk* は共に「嫌悪 (disgust)」の感情状態時に発せられる表現である。Wierzbicka (1992: 166) は *fu* が発せられる状況が「嫌な臭い」や「嫌な味」といった身体的に感じるネガティブな感情状態時に制限されることに注目し、それぞれ以下のよう記述している。

(6) *fi* (Polish)

I now know something about something in this place

I feel something bad in my body because of that

I feel like someone who thinks: I don't want this thing to come to be in my nose or in my mouth

I think that other people would feel the same

(7) *yuk*

I now know/imagine something

I think: this is bad

I feel something bad because of that

I think other people would feel the same

I feel like someone who thinks:

I don't want to be in the same place as this

間投詞に限らず、一般的に語の意味を命題的要素に分解 (decompose) して記述しようとしても、必要十分な記述は難しく、常に反例が生じることは Fodor (1981) の主張に基づく Wharton (2003: 45) の指摘の通りである。その他に間投詞が聞き手に対してどういう役割を果たしているのか説明されていないという点などが指摘されているが、本論文において重要な Wharton (2003) の指摘として、さらに二点挙げる。まず、多くの研究で言及されているが、間投詞はそれ自体で真理条件を問えない (Schourup (1985), Blakemore (1987), Wharton (2003) など)。例えば (8) の B の発話に対して「あなたの『ぎゃあ』という発話は偽だ」ということは不可能であり、真偽が問えるのは「骨が折れた」という発話のみである。

(8) A (整体師) : それでは首をひねりますよ。

B (患者) : ぎゃあ！！骨が折れた！

A: いや、折れてないですから。

従って、真理条件がないはずの間投詞を真偽が問える命題形式に還元することは難しい。前節で言及した間投詞は文と同等であると主張する鈴木 (1973) などのような見方も同様の問題をはらむ。事柄を表す「詞」と話し手の態度や判断を表す「辞」が融合しているという指摘は否定するものではないが、間投詞が「真理条件的な意味を持つ文」と同等であるみなすことはできない。

もうひとつ重要な指摘として、(6)や(7)のような記述は、間投詞がしばしばジェスチャーを含む身体的動作を伴うことを無視しているという点が挙げられている(Wharton 2003: 49)。

以上のように間投詞に概念的な意味を認めることは難しいと思われる。次節では間投詞に概念的な意味を認めない立場を整理する。

2.4.2 間投詞の手続き的意味

間投詞に概念的な意味がないという主張は必ずしも、間投詞には意味が無いという主張と等価ではない。我々は経験的に、話し手から発せられた間投詞から話し手の広い意味での気持ちや感情といった、いわゆる話し手の心的状態を推測することが出来る。たとえ真理条件的な意味記述ができなくても、間投詞は聞き手によって何らかの形で解釈され、会話の中で一定の役割は果たしていると考えerことは不自然ではない。このような想定のもとで、会話のようなコミュニケーションにおける間投詞の位置づけを記述するアプローチがある。この時、間投詞は話し手が聞き手とのコミュニケーションを行う上で意図的に(何かを伝えるために)発せられるものなのか、という話し手の意図性を前提とするかどうかで議論が分かれるが、本節では特に話し手の意図性を前提とする関連性理論を土台とした手続き的意味論(Blakemore 1987, 2004)からのアプローチについて述べる。

関連性理論(Sperber and Wilson 1995)では、コミュニケーションが常に意図的に行われると仮定している。関連性理論において、コミュニケーションの成立は話し手が何かを伝えたいという意図(情報意図)があることを聞き手に気づかせることに成功して初めて認められる。つまり、コミュニケーションは常に意図的に行われるというのが関連性理論の主張となる。すなわち、関連性理論において間投詞が扱われる時、話し手は聞き手に何かを伝えるという意図をもって間投詞を発話することが前提となる。さらに聞き手は間投詞を発した話

し手の意図を理解することによって間投詞によるコミュニケーションの成立を認めることになる。

そこで関連性理論では間投詞が聞き手に伝える「意味」は何かという点が問題となる。前節で述べたとおり、間投詞に概念的な意味を持たせることは難しい。関連性理論では聞き手（読み手）が与えられた言語（発話）に対して推論を行い、解釈を導き出すために使われる情報には二種類あると仮定している。一つは概念的情報 (conceptual information) で、もう一つが手続き的情報 (procedural information) (Blakemore 1987) と呼ばれるものである。

手続き的情報はもともと、それ自体で概念的な意味を持たない *so* や *after all* といった談話連結子 (discourse connectives) の意味を記述するために Blakemore (1987, 2002) が関連性理論の枠組みを応用して、導入した概念である。

例えば、次の2文は真理条件的に等しい。すなわち、それぞれ命題を連結する形式は異なるものの、*so* も *after all* も連言形式であることには変わらない。

(9) a. Tom can open Ben' s safe, *so* he knows the combination.

(Blakemore 2002: 79 (38))

b. Tom can open Ben' s safe, *after all* he knows the combination.

(Blakemore 2002: 79 (39))

しかしそれぞれの解釈は異なるとされる。(9a) は前件である「トムがベンの金庫を開けられる」ことが後件である「トムが暗証番号を知っている」という結論を導くための前提として解釈される。一方で、(9b) では、前件が結論であり、その証拠として後件が提出されている。

so と *after all* はそれ自体は概念的な意味を持たず、文の真理条件に影響を与えることはない。しかし、これらの表現は読み手の命題間の関係解釈に制約を与える。真理条件的な意味に影響を与えず、文の意味解釈に制約を与える情報

を「手続き的情報」と呼び、*so* や *after all* のような言語表現は手続き的情報をコード化する表現としてみなされる。すなわち、*so* は前件が後件の前提となる解釈を聞き手に促し、*after all* は後続命題が前件が真であることの証拠として解釈されるよう聞き手を導く表現であると記述される。

Wilson and Sperber (1993: 24) は手続き的情報をもつ言語形式として、談話連結子だけではなく、代名詞の他、宣言や疑問／命令を表す表現および語順のような発語内の力を示す標識 (illocutionary force indicators) 全般も聞き手の推論構築に制約を与える手続き的情報をコード化している。Wharton (2003: 59) は代名詞など談話連結子以外の表現を手続き的表現として扱うためには、手続き的情報を「聞き手に対して一定の解釈を促す (providing computational instructions to the hearer)」ことに限定するのではなく、「ある種の文脈的想定や認知的な効果を活性化させること」が手続き的情報の内実だと主張している。例えば、代名詞は聞き手が選択すべき特定の指示対象を活性化させる表現であるという。

Wharton (2003: 60) は間投詞も談話連結子や代名詞と同様に手続き的情報をコード化する表現とみなし、間投詞がコード化する手続き的情報によって様々な “attitudinal concept” や “types of concepts” を活性化させるとする。例えば、*wow* は「歓喜」という概念を表示するのではなく、歓喜や驚き、興奮といった一連の態度を活性化するものであると述べている。

同じく関連性理論の枠組みで間投詞を考察した Schourup (2001) は *well* を対象としている。Schourup (2001) と Wharton (2003) の共通点は以下二点にまとめられる。

- 間投詞は話し手の心的態度を表す点でジェスチャーなど身体的動作と類似する
- ある種の間投詞は聞き手の高次表意 (higher-level explicatures) の構築を支援する

第一点目に関しては Ameka (1992: 106) が間投詞を “vocal gesture” と呼び、田窪・金水 (1997: 260) が間投詞は「身振り、手振りに現れるのと似た過程」を持つと指摘したとおり、間投詞がジェスチャーの一形態であるという見方には一定の支持がある。

第二点目に関してはまず関連性理論における「表意 (explicatures)」について簡単に説明をしておく必要がある。「表意」とは、聞き手が話し手の発話から曖昧性のみが除去され、指示対象が同定された段階で構築された明示的な内容を指す。「表意」は文脈的な前提を元に解釈される言外に意図される内容である「推意 (implicature)」と対立する概念である*3。

(10) Peter: Did John pay back the money he owed you?

Mary: No. He forgot to go to the bank.

Wilson and Sperber (2004: 16 (11))

例えば、上記の例で Peter が Mary の発話から構築すべき表意は *He* が指す指示対象が同定され、*bank* の意味に「土手」ではなく「銀行」が割り当てられた状態の Mary の発話自体を指す。すなわち「ジョンが銀行に行くのを忘れた」という内容が表意となる。「銀行に行ってお金をおろさない限りお金は返すことができない」といった暗黙の前提（推意的前提）をもとに推論される「ジョンはお金を返していない」という内容は関連性理論においては「推意（的結論）」と呼ばれる。

高次表意とは、話し手の発話から聞き手が構築した表意に随意的に組み込まれる発話行為的描写 (a speech-act description) や命題態度を指す (Wilson and Sperber 1993: 5)。聞き手に高次表意の構築を促す表現の典型例として話し手の

*3 関連性理論における「推意」はその他の（グライスの）語用論的文脈における「推意」とは必ずしも一致しない。前者は後者が意味する範囲と比べると狭い。

態度を表す文副詞が挙げられている。

- (11) a. (Mary の Peter に対する発話)

Mary: Seriously, I can't help you. (Wilson and Sperber 1993: 19 (18 a))

- b. (構築される表意)

Mary told Peter seriously that she couldn't help him.

(Wilson and Sperber 1993: 18 (19 a))

(11a) における *seriously* それ自体は真理条件的な意味を持たないが、*seriously* が伝える話し手の態度が命題内容に埋め込まれることによって表意レベルで話し手の態度が聞き手に解釈される分析をしている。

この分析をもとに Schourup (2001), Wharton (2003) は間投詞も、聞き手に高次表意の構築を促す標識であるとしている。例えば *well*, *huh* はそれぞれ (12b), (13b) のような高次表意が聞き手によって構築される*4。

- (12) a. Phil: Well, many people find Tom's manner abrasive.

- b. Phil is saying-with-consideration that many people find Tom's manner abrasive. (Schourup 2001: 1055 (69), (70))

- (13) a. Lily: Dentists are human, huh!

- b. It's ridiculous to think that dentists are human.

(Wharton 2003: 55 (25))

*4 Wharton (2003) によれば全ての間投詞が高次表意の構築を促すものではない。例えば (ia) は (ib) という高次表意が構築されない。この場合、*Wow* は命題に対してではなく、アイスクリーム (モノ) に対する態度であることに起因する (Wharton 2003: 56)。

(i) a. *Wow!* This ice cream is delicious

b. The speaker is delighted that the ice is delicious

話者の態度の対象が命題か、モノかの区別は、間投詞の形式ではなく、文脈によって決定される。話者の態度の対象の差異によって記述ができなくなるという点においても高次表意による分析は問題が残る。

ただし、関連性理論をベースとした分析では、間投詞だけではなく話し手の主観的態度に関わる言語表現は、概ね手続き的情報をコード化し、かつ聞き手に高次表意の構築させるよう解釈過程に制約をかける標識と分析される傾向にあり*5 「高次表意の構築標識」という分析だけでは、情報量のある記述とは必ずしも言えない。

Schourup (2001: 1056) は *well* は手続き的情報が言語的にコード化されるのではなく、その表現がもたらす効果 (effect) が手続き的であると主張している。すなわち、*well* によって言語的な意味が聞き手に伝えられることはない。ただし、‘effect’ とはどのようなものを指すのか Schourup (2001) は明示していない。おそらく、*well* によって「次発話を思考しながら発話している」という話者の心的な状態が、音形 (聞こえる形) として現れ、聞き手がそれを解釈可能な状態にするという効果が生じると理解できる。間投詞を「高次表意の構築標識」とみなして、‘it is ridiculous to.’ のような言語表現に還元する試みは間投詞の概念的な意味を認める立場との違いが不明確となる問題が残るが、*well* を含めて間投詞が何らかの形で、聞き手の解釈に影響を与え、その解釈の仕方に一定の制約を与える効果があることは理解できる。

以上のように、関連性理論においては間投詞が伝える情報は概念的な情報ではなく、命題的な意味表示に還元できないとする。間投詞は、概ね聞き手が構築する可能な解釈に一定の制約を与える表現として分析される。間投詞に聞き手の解釈に制約を与えるような機能を持たせる分析をすることによって、統語的依存関係を持たず、真理条件的な意味が欠如した、話し手の心的態度を反映する間投詞の特性を捉えることには成功しているように思われる。ただし、関連性理論は主として聞き手側 (the audience of communicative acts) の視点に立つ

*5 例えば、Matsui (2001) は日本語のダカラを、手続き的情報をコード化し、かつ、聞き手に高次表意を構築させる標識であると分析している。

た理論である (Sperber and Wilson 1995: 279)。関連性理論は話し手の発話を聞き手が解釈するモデルを提出したものであり、コミュニケーションの成立が認められる限りにおいて話し手の発話は意図明示的であることが前提となる。文副詞や接続詞のような場合であればそれで問題はないが、間投詞の場合、話し手は必ずしも意図明示的に間投詞を発するわけではなく、「無意識で反射的な音声単位 (田窪・金水 1997: 260)」である事も多い。次節では、話し手からの視点についても言及している言語心理学および認知科学的な観点からの間投詞、特にフィラーの分析を紹介する。

2.5 フィラーの言語心理学／認知科学的考察

間投詞は、その対人的な役割や、文産出の面から心理言語学や認知科学、および、会話分析を始めとする社会学的領域を含めた広義のコミュニケーション研究、さらに工学的観点からの考察も多く、その目的に応じて多分野にまたがっている。これらの分野において間投詞の中でも、特にフィラーを対象を限定した議論は多い。

本節ではこれまで述べてきた言語学的背景からのアプローチも踏まえ、上記分野における議論をまとめることで、改めてこれまで議論されてきたフィラーの振る舞いと特徴を整理する。

2.5.1 フィラー

Brown (1977: 108) は自然会話において話し手が発する *mm*, *um*, *er*, *erm* のような言い淀みや、それに続く *well*, *now*, *of course*, *obviously* のような語句、その他に発話の繰り返し (repetition) や言い換え (paraphrase) は話し手の沈黙を埋め、話し手が言いたいことを頭の中で整理している間、話し手の発言権が維持されるという共通した機能を持つとし、これらの音声的な現象を「フィラー (filler)」

と呼んだ*6。

最近では、「語の中断」や「語句の言い直し」、「語句の繰り返し」など、コミュニケーションの場面での音声的な「乱れ」とみなされる現象は総称して「非流暢性 (disfluency)」と呼ばれる事が多い (Clark and Wasow (1998), 伝・渡辺 (2009) など)。「えーと」や「あのー」のような音声形式としての言い淀みも当然「非流暢性」に含まれる。むしろ「フィラー」という用語はこのような音声形式に限定して用いられることが多いようである (Clark and Wasow (1998), 山根 (2003), Watanabe (2009), 伝・渡辺 (2009) など)。本論文でも「フィラー」は現象としての用語ではなく、主として音声形式を指す用語として用いることとしたい。

日本語におけるフィラーは (5) で紹介した森山 (1996) の分類に従えば、「言い淀み系感動詞」と呼ばれているものに相当する。すなわち、「えーと」や「あのー」、「まー」などが当てはまる。フィラーは他の間投詞とは異なり驚きや悲しみといった強い感情表出を伴わないものの、これまで議論してきた間投詞の性質を満たす。すなわち、それ自体が構造的に独立しており、概念的な意味も持ち得ない。また、フィラーを含めた間投詞は叫び声やうめき声、咳など、非随意的に発せられる非言語的音声と異なり、いわゆる恣意性を持つ言語記号と生理的発声の中間に位置する (田窪・金水 1997: 262)。また、ある種のフィラーは、ある音形式に対して、母音の長音化や初頭の無声化 (H化)、末尾の声門閉鎖 (促音化)、音調変化 (上がり調子／下がり調子) などの音声的なバリエーションが見られる場合がある (田窪・金水 1997: 263)。さらに、ある音形式に対して終助詞や終助詞＋判定詞が後接される場合もある。例えば「あのー」に対して「あのーですねー」と発話されることもあり得るため、フィラーは一つの音形式に対するバリエーションが多様である。

*6 Brown (1977) 以前のフィラーに関する研究としては Maclay and Osgood (1959) などがある。Maclay and Osgood (1959) は、本論文で言うフィラーを “filled pause” と呼び、フィラーが節境界で頻出することを観察している (Maclay and Osgood 1959: 33)

フィラーの性質を記述した研究は大きく二つの側面に分けられる。一つはフィラーのコミュニケーションにおける役割を記述したもので、もう一つはフィラーを発する話し手の心内の状態を記述しようとしたものである。

前者のコミュニケーションにおける役割に関しては、先に述べたとおり、**Brown (1977)**がフィラーを発することで自身の発言権が保持されるというフィラーの「ターン保持機能」を指摘している。現在でも日本語のフィラーに関して心理学的な側面から「ターン保持機能」について検証されている(**水上・山下 2007**)。さらに話し手が発するフィラーが聞き手の理解を促進するという見方もある(**Ferreira and Bailey 2004**)。これらはいずれもフィラーの「他者(聞き手)に指向された役割」に焦点を当てた研究といえる。

もう一つの観点として話し手自身の文産出に焦点を当てたものがある。フィラーは文産出上の障害といった様々な状態が反映された形式とする見方で**Goldman-Eisler (1968)**, **Levelt (1989)**, **Clark and Fox Tree (2002)**を始め、日本語においても**田窪 (1995)**, **定延・田窪 (1995)**などが「えーと」や「あのー」を発する話し手の心内の状態に関する記述を行っている。さらに実験的手法を用いて話し手の内的処理とフィラーの関係を考察した**山下・水上 (2007)**などがある。関連性理論による間投詞の分析では、間投詞を発する話し手の意図性が前提となっていたが、このような、話し手自身に指向されたフィラーの役割、すなわち「自己指向性」に関しては必ずしも話し手の意図性は前提とされない。

以下では、フィラーの他者指向的な側面と、自己指向的な役割に焦点を当てたものとに大別して、心理言語学および認知科学的な側面からの研究を概観する。

2.5.2 フィラーとコミュニケーション

フィラーは他の話し手自身の感情を表出する間投詞とは異なり、円滑なコミュニケーションを遂行するために話し手が利用できる一つの方略としての役

割があると主張されることがある。特に会話のやり取りの中で、話し手がフィラーを発することで、話し手の発話が継続することが示され、話し手のターン（発言権）が保持されるという Brown (1977) の指摘がしばしば言及されてきた。「フィラーのターン保持機能」を認めた上で議論が行われることも珍しくない。例えば串田 (1999) はフィラーがターン保持機能を持つことを前提に、会話中でフィラーのターン保持機能が働かなかった場合について観察している。また、水上・山下 (2007) は統計的に「フィラーのターン保持機能」が支持されることを示した上で、やはり傾向から外れたケース、すなわち、話し手のフィラーの直後に聞き手の発話が始まった例をとりあげ、議論している。

串田 (1999) はフィラーのターン保持機能が働かず、聞き手が話し手のフィラーの最中に割り込んで発言したにもかかわらず、コミュニケーションが円滑に行われた例として、聞き手の発言が話し手の言葉を探す行為に対する「助け船」として振る舞うケースを挙げている。

串田 (1999) はフィラーの最中には「むやみに話しかけないことが暗黙のルールとなっている」(串田 1999: 130) ことを前提としている。串田 (1999) の論点は話し手と聞き手の知識状態の差から次のことが分かる場合、すなわち、聞き手が助言できる立場で、話し手が聞き手からの助言を受けられる立場であることが双方で認識可能な状態であることが分かるときに、フィラーに対する割り込みが適切となるというものである。

また、水上・山下 (2007) は心理実験により、話し手のフィラー直後には聞き手の発話が行われない傾向があることを示している。ただし、水上・山下 (2007) も指摘するようにフィラー直後も話し手の発話が継続されたからといって「フィラーには話し手の発話権を保つ機能があるという証拠にはならない。なぜならば、発話途中で話し手が発話を中断した場合、異常を感じながらも通常聞き手は少しは待つわけで、フィラーがあったからこそ発話が継続できたとは、必ず

しも言えないからである (p.599)」。逆に統計的に少数ながら話し手のフィラーの直後に聞き手による発話があった事例として次のような例を挙げている。

(14) A じゃ全体見たらどんなかんじ?*⁷

B (0.46)*⁸ウーント ナンヤロー

A ティーとか

B あ ティーじゃない

(水上・山下 2007: 597(例 7))

上の例はBによる「ウーント ナンヤロー」に対するAの「ティーとか」という発話は、「話し手が返答に窮している様子が連続したフィラー使用に現れており、それを察した聞き手が助け船を出した例」(水上・山下 2007: 597)として挙げられている。すなわち、串田 (1999) が指摘した「聞き手による助け船」の事例であり、フィラーによるターン保持は失敗しているように見えるがコミュニケーションとしては成功している事例といえる。水上・山下 (2007) は以上を踏まえて、「発話を期待された話し手は、フィラーによって、発言権をうまく保持したり、場合によっては、聞き手の助け船を促して、その期待から生じる“義務”を遂行している」(水上・山下 2007: 601)としている。すなわち、話し手自身の発言権の継続および譲渡がフィラーをとおして適切に行われていることが述べられている。

串田 (1999), 水上・山下 (2007) もフィラーのターン (発言権) 保持機能は一応認めた上で、それが一見失敗したように見える事例も、コミュニケーションとしては十分に成立しており、結果的に、フィラー後の聞き手による割り込みが適切な行動だったことを示している。

串田 (1999), 水上・山下 (2007) の議論は Goodwin (1987) が観察した、フィラー

*⁷ (14) で行われている対話は、二者一組で行われており、一方が説明者役で、一方が説明を聞いて図形を再現する回答者役となって、会話によって図形を伝達し合うというものである (水上・山下 2007: 591)

*⁸ 0.46 秒のポーズを表す。

を発しながら聞き手に視線を向ける事例を基にしている。Goodwin (1987) は話し手がフィラーを発するなどして「言葉探し (word search)」をする際に、相手に対して視線を向けない場合と向ける場合によって、話し手の行為の意味が異なることを指摘している。相手に対して視線を向けずにフィラーが発せられる場合、話し手の行動は話し手自身に向けられている (“self-directed”(Goodwin 1987: 118)) のに対して、相手に視線を向けてフィラーを発する場合、その行為は “social activity”(Goodwin 1987: 118) となり、話し手が伝えようとする情報が不確かであることが聞き手に向けられ、聞き手が会話へ参与することを促す。ただし、Goodwin (1987) はフィラーの種類については特に述べていない。本論文では4章において、話し手の視線とフィラーの関係について改めて議論する。特にフィラーの形式間の差異と視線の関係について述べる。

Goodwin (1987), 串田 (1999), 水上・山下 (2007) の議論をまとめると、フィラーは会話の状況や、視線などフィラーに伴う非言語情報の有無などにより、話し手のターン保持や移譲といった他者と円滑な会話を進める上で重要な貢献を果たしているということになる。以降では、フィラーが他者との円滑なインタラクションに果たす役割をフィラーの他者指向的側面と呼ぶことにする。次節では、話し手の文産出とフィラーの関係に関する議論を紹介する。

2.5.3 フィラーと文産出

話し手が音声としての言語を産出するまでには様々な認知的、心理的な要素が関わっていると考えられる。文産出は話し手の意図から発話までの過程を指す。これまでに提案されている大部分の言語産出に関わるモデルでは、スタート地点として話し手の意図を設定し、調音をそのゴールとするようなモデルを仮定している (寺尾 1992: 370)。

Levelt (1989) は話し手の意図から調音までに関わる要素をそれぞれモジュール化したモデルを構築している (図 2.1)。Levelt (1989) のモデルでは話し手の

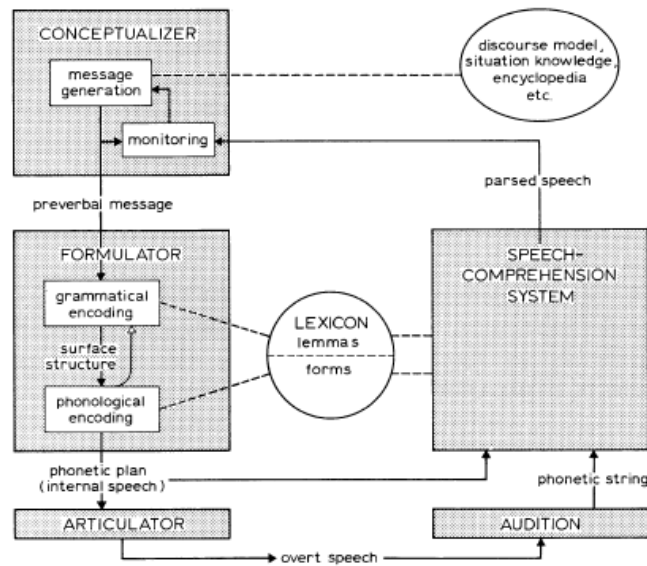


Figure 1.1
A blueprint for the speaker. Boxes represent processing components; circle and ellipse represent knowledge stores.

図 2.1 Levelt(1989:9) による文産出モデル

意図がまず概念化され、未言語な状態として出力される。その未言語な状態をインプットとして‘Formulator’と呼ばれるモジュールによって文法的および音韻的なコード化が施されて発話に至る。その過程で、百科事典的な知識や語彙が参照される。さらに Levelt (1983, 1989) は、話し手が発話をするまでに話し手自身がその発話が正しいか、もしくは適切かチェックする自己モニタリング (self-monitoring) 機能が想定されている。

言語の産出は常に問題なく行われるとは限らない。いわゆる「言い間違い」がそれで、文産出上の過程で何らかの問題が生じた結果として「言い間違い」は現れる*9。一方で、言い間違いに対する修復 (self repair) もしばしば行われていることが知られている。次の例は *vertical* と言いかけて、*horizontal* と言い直した例である。

*9 当然文産出の過程は目に見えない。そのため、出力としての「言い間違い」を手がかりに言語産出モデルが仮定・検証されることが多い (寺尾 1992: 371)。

(15) To the left side of the purple disk is a v-, a horizontal line.

(Levelt 1989: 13)

このような事例から、話し手の意図が言語化される過程で何らかのエラーが起こったことを監視（モニタリング）するための心的な操作が行われていることが仮定されている。そのような操作を Levelt (1989) は self-monitoring と呼んでいる。フィラーの表出も「言い誤り」と同様に話し手の文産出過程で生じたトラブルや遅れが反映されたものとして捉えることができる。また、「言い直し」などによって、障害を取り除くことを修復 (self-repair) と呼んでいる。さらに Clark and Fox Tree (2002) は英語における *uh* と *um* の分析を通じて Levelt (1989) の仮定した修復の過程を修正し、次のような提案を行っている。

Our proposal is that speakers add these collateral signals by a process that is an elaboration of the Levelt (1983) model for self-repairs. The process has two steps:

Step 1: Monitor your speech plans and speech output for problems worthy of comment or repair.

Step 2: The moment you discover such a problem: (a) formulate a collateral signal for making the comment or repair, and (b) select a method for adding the signal to the primary utterance.

(Clark and Fox Tree 2002: 106)

すなわち *uh* や *um* といった ‘collateral signals’ は自身の発話をモニタリングしている話し手が産出途上で何らかのエラーを発見したときに、その修復手段として選択され^{*10}、表出されるとする。

^{*10} Clark and Fox Tree (2002) は、*uh*, *um* が話し手によって選択されて産出され、またその選択が話し手によって制御されており、‘signal’ や ‘symptom’ ではないとする (p.105)。

日本語のフィラーに関して同様にフィラーの自己モニタリング性に着目した研究として定延・田窪 (1993, 1995), 田窪 (1995) が挙げられる。定延・田窪 (1995: 76) によると、話し手は対話の際に、その対話に関係する情報を一時的に取り出し、それを携えて対話に臨むとする。定延・田窪 (1995) は話し手は自身が持つ知識 (定延・田窪 (1995) では「心的データベース」と呼ばれている) と対話で利用される一時的な知識を分けるモデルを想定している。話し手は一時的に取り出された情報の中から検索したり、計算したり、さらに、取り出された情報だけでは対話が続行できなくなった場合は知識全体から情報を検索したりしながら対話を進めるとというのが定延・田窪 (1995) の対話の考え方である。「あの(ー)」や「ええと」のようなフィラーは、検索や計算といった話し手の心的な操作の実態が反映された形式であると考えられる。フィラーとは「自分のやっている処理をモニタする標識」(田窪 1995: 1020) であり、従って話し手は「自分の心的計算上の困難をモニタしながら音形式で表現」(田窪 1995: 1023) しながら対話を進めている。定延・田窪 (1993), 田窪 (1995) では直接 Levelt (1989) が参照されているわけではないが、話し手が文産出に当たってその過程をモニタしており、その過程がフィラーなどによって音声的に反映されるという点については共通するものと考えられる。

山下・水上 (2007), Watanabe (2009) は日本語のフィラーを題材にして、実験心理学的な手法を用いることで、フィラーが話し手のどのような心的な処理プロセスを反映しているのか実証的に考察している。中でも実証的研究として特筆すべき先行研究として『日本語話し言葉コーパス (国立国語研究所 2004) (以下「CSJ」と呼ぶ)』を基にフィラーを統計的に分析した Watanabe (2009) が挙げられる。Watanabe (2009) は以下2点に関してCSJにおける統計的な有意性を指摘した。

(16) a. フィラーは談話境界や南 (1974) におけるC類の従属節など、「深い節

境界」に類出する (boundary hypothesis)

b. フィラーに後続する句は長く複雑である (complexity hypothesis)

(16a) により話し手は、浅い境界よりもむしろ深い節境界において、その後話すべき事柄をプランニングするために言い淀むと推測し (Watanabe 2009: 124)、さらに (16b) から、聞き手は話し手のフィラーを聞くことでこれから長く複雑な発話が行われることを期待すると結論づけている (Watanabe 2009: 125)。

ただし、Watanabe (2009) はフィラーの形式ごとの振る舞いの差異についての議論は少ない。また、フィラーは Wharton (2003: 49) や Ameka (1992), 田窪・金水 (1997) が指摘するように身振りや視線といった身体的動作との関連が示唆されているが、Watanabe (2009) が主として利用している CSJ は音声資料に限られ、行った実験も音声採取に限られているようである。Watanabe (2009) ではフィラーの形式的な差異については社会言語学的な考察が行われており、男女差やスタイル (フォーマル/インフォーマル) によって選択されるフィラーの種類に異なりが見られることが示されているが、形式間の機能的な差異などについては触れられておらず、何故社会言語学的な差異が見られたかについては明らかにされていない。

2.6 フィラーの目的指向的分析

以上では、間投詞およびフィラーに関する先行研究を概観してきたが、いくつかの先行研究では、フィラーの記述にあたって、目的指向的な記述がされることがある。本節では、このような先行研究に対する、本論文の立場を述べる。

定延 (2005) は間投詞「さー」について次のように述べている。

「さー」が現れるのはふつう、「やってみても良い結果が出ない検討」の最中に限られる。

だが、これは「狩人の智慧」にすぎない。日本語コミュニケーションの世界に生き、「さー」と言う話し手の多くは、そんなことは考えもしていない。

(中略)

以上のように「これこれこのような感動詞（たとえば『さー』）とこれこれこのような話し手のきもち（見込みがない検討の最中であること）が結びつくということが外部の観察者にはわかっても、「話し手が感動詞を発して自分の気持ちを表している」とはかぎらない。（定延 2005: 35）

話し手はフィラーを何のために発しているのかという問いに対して、観察者である我々はその問いに答えることは不可能である。言語学的な観点からフィラーが記述される時、目的指向的な記述がされることがある。たとえば、山根 (2003: 223) はフィラーについて「一度に多くの情報を出表することができない話し手はフィラーを頻出することで情報処理の時間を稼いでいる」と述べている。川上 (1994) は場つなぎ的な「まあ」について「先行発話を受けつつ次への展開をスムーズに誘導するという調整機能を果たす」（山根 2003: 77）とし、「話の流れを一応は受け入れつつ、小さな転換を図ることによって、談話をコントロールしようという意識が働く」（山根 2003: 78）という。

間投詞を記述対象とするとき、このような「話し手が～しようとするために、Xという間投詞は使われる」という記述の仕方には注意が必要である。間投詞を発する話し手が「時間稼ぎをしようとしている」かどうか、「まあ」を発する話し手が「談話をコントロールする意識が働いている」かどうかは我々は観察を通じて知ることができない。定延 (2005) が指摘するようにおそらく話し手自身はそのようなことは考えもしていないだろう。関連性理論における記述も同様である。間投詞を発する話し手が聞き手に常に特定の意図を伝えようとして

いるかどうかはわからないし、*huh*を発する話し手が‘it is ridiculous to.’を伝えようとしているかどうかは、観察者は知り得ないことである。

間投詞ないしは、フィラーを記述対象とする際に言えることは、おそらく以下のような事柄に限定されるであろう。

- (17) a. ある間投詞は発せられる環境（状況）に制限があることがある。
- b. その環境はコミュニケーション上において、特徴的であることがある。結果的に観察可能な形で、その特徴的な環境を間投詞によるコミュニケーション上の効果としてみなすことができる場合がある。（「フィラーによるターンの保持」など）。
- c. さらに、相手から発せられた間投詞について、聞き手が何らかの解釈をすることがある。

従って、**定延 (2005)**が指摘するように、「さー」について言えることは、『「やってみても良い結果が出ない検討」の最中に限られる』という、(17a)で表される記述までで、「話し手はやってみても良い結果が出ない検討をする（ことを伝える）ために「さー」を使う」とは言えないのである。**串田 (1999)**が指摘した、フィラーによる「助け船」についても、「話し手が助け船をするためにフィラーを発した」という主張ではない。フィラー周辺の会話連鎖を観察することで、結果として「フィラーが助け船としての役割を果たし、フィラーによるターンの保持が観察されない有標的な状況でコミュニケーション上の支障を来すことなく会話が進んだ」ということであり、(17b)を指向した記述であるといえる。

本論文でも間投詞（フィラー）を記述するにあたっては、目的指向的な記述は避け、フィラーの現れる状況記述に注力する。

2.7 要約

本節では、これまでの間投詞およびフィラー全般に関する研究について概説した。特に、分野ごとにおける間投詞の扱われ方を中心に述べた。

まず、国語学的な視点からは、品詞としての間投詞の位置づけが議論されてきた。特に、係り受け関係のない、統語的に独立している間投詞を、ひとつの品詞とみなすかどうか、もしくは、間投詞を一文とみなすかどうか、という点が議論の焦点となってきた。

意味論や語用論を中心とする、言語学的な観点からは、間投詞の意味の捉え方が議論になってきた。例えば、間投詞は命題的要素への還元可能性が議論されてきた。語用論的視点からは、関連性理論を中心に、間投詞の手続き意味論的な分析が試みられてきた。これは、間投詞を命題的な要素に還元する考え方とは対立する。間投詞の手続き意味論的な分析では、間投詞が概念的な意味を持つ表現ではなく、聞き手の推論に一定の制約を課す表現であると分析される。

認知科学からのアプローチでは、間投詞の中でも特にフィラーを中心に、フィラーのコミュニケーション活動の中での位置づけや、言語産出に関わるフィラーの役割が議論されてきた。前者のフィラーの対人的な振る舞いについては、会話分析からのアプローチ (Goodwin 1987, 串田 1999, 水上・山下 2007) による観察事例からフィラーによる発言権の維持が見られる事例や、逆にフィラーが相手の発話を促す「助け船」となって、会話が継続される事例などが報告されている。文産出面については、Levelt (1989), Clark and Fox Tree (2002) のモデルや、日本語のフィラーを分析した定延・田窪 (1995), 田窪 (1995) などにより、発話が産出される過程における自己モニタリング操作の反映標識としてフィラーが捉えられている。

最後にフィラーの記述方法に関して、目的指向的な記述に対する本論文での立場を述べ、フィラーの記述に際しては、目的指向的な記述は避け、フィラー

の現れる状況を精査する方針をとることを述べた。

第3章 談話の形態とフィラー

3.1 はじめに

フィラーは話し言葉に特徴的な形式である。話し言葉はまた、それが使用される現場に、通常聞き手が存在するという点において、特徴的である。すなわち、書き言葉では筆談といった特殊な状況を除けば、言語的な情報が発信される場に、情報の受け手が通常存在しない*1。逆に話し言葉は、独り言を除けば、情報発信が行われる場において情報の受け手が存在する状況で使われるという特徴がある。場合によっては、情報のやり取りは同時進行的に行われる。話し手だった者が聞き手に、聞き手だった者が話し手に交替する、いわゆる話者交替が起こり得るのも話し言葉が使用される状況の特徴である (Sacks et al. 1974)。さらに、聞き手は一人であることもあれば、不特定多数であることもある。

前章では、フィラーの一般的な性質についてこれまでに提出されてきた仮説を紹介してきたが、日本語の場合、フィラーとみなされる音声形式は一つではない。フィラーは話し言葉が使用される場で現れる形式である以上、話し言葉の特徴に注目してフィラーの分析をすることが不可欠である。特に、話し言葉では、聞き手がコミュニケーションの現場に存在する特徴があるので、話し手と聞き手との関わり合い方に応じて、話し手のフィラーの表れに差がある可能性がある。これまでに、フィラーの形式ごとの差異に関する議論はいくつかなされているが*2、「聞き手との関わり」からフィラーの性質を論じたものはあま

*1 チャットなどコンピュータを介した「会話」は、書かれた言葉が使用される状況で、情報の受け手が画面上を通して現場に存在するといえる。このような状況では話し言葉的な特徴がしばしば見られることが Herring (2001: 617) によって指摘されている。

*2 例えば、「あの一」と「え一」に関しては定延・田窪 (1993, 1995) を参照。「あの一」と「その一」の差異に関しては大工原 (2008), 堤 (2008) を参照。

表 3.1 Settings of language use (Clark 1996: 8)

	Spoken settings	Written settings
Personal	A converses face to face with B	A writes letter to B
Nonpersonal	Professor A lectures to students in class B	Reporter A writes news article for readership B
Institutional	Lawyer A interrogates witness B in court	Manager A writes business correspondence to client B
Prescriptive	Groom A makes ritual promise to bride B in front of witnesses	A signs official forms for B in front of a notary public
Fictional	A performs a play for audience B	Novelist A writes novel for readership B
Mediated	C simultaneously translates for B what A says to B	C ghostwrites a book by A for audience B
Private	A talks to self about plans	A writes note to self about plans

りない。

本章では、聞き手がコミュニケーションの現場に存在するという話し言葉の特徴に注目し、話し手が聞き手との関わりの中でフィラーをどのように発しているのか、現代日本語の話し言葉に基づくコーパスを用いて分析する。具体的には話し言葉が使用される状況を、「独話（講演）」と「対話」およびその中間である「ポスター会話」の三つの談話形態に分け、各談話形態におけるフィラーの現れを観察する。その結果現れる、談話形態別のフィラーの使用実態の傾向と特徴について論じる*3。

3.2 「聞き手との関わり」と談話の形態

話し言葉が使用される状況は様々である。従って、話し言葉におけるフィラーの表れを分析しようとした時、話し言葉が使用される状況の違いを考慮に入れる必要があると思われる。例えば、Clark (1996: 4) は、話し言葉（および書き言葉）が使用される状況 (spoken settings) を表 3.1 のように分類している。本論文で特に注目するのが ‘personal settings’ と ‘nonpersonal settings’ と呼ばれる状況である。personal settings とはいわゆる通常の会話で、対面の場合もあれば

*3 本章における議論は川田 (2009) の一部を基にしている。

電話による会話もあり得る。特徴としては2人ないしはそれ以上の会話参加者がおり、会話のターン交替が自由に行われる。nonpersonal settings とは、会話参加者のうち一人が主として発話する形態を指す。発話者以外の参加者は発話者の発話を中断する機会はほとんど無いか、全くないため、ターンの交替も起こりにくい。nonpersonal settings のバラエティーは豊富で、教師が教室で講義をする状況や、牧師が自身の経験を話したりする状況などがある。さらに、nonpersonal settings の場合、発話者は前もって何を話すか用意している場合も多く、聞き手に干渉されることを期待していない (Clark 1996: 4-5)。

本論文では、この personal settings と nonpersonal settings の違いを聞き手とのインタラクションの度合い、言い換えれば「聞き手との関わり合い」の程度差として考える。本論文における「聞き手との関わり」とは、話し手がどの程度聞き手の知識や態度、反応について留意しながら談話を進めているかについての程度を表すこととする。すなわち、話し言葉が使用される場において、話し手がどの程度、(特定の) 聞き手に対して注意を向けて言語使用を行っているかを表す用語として扱う。

Clark and Brennan (1991), Clark (1996) は言語使用を共同行為 (joint action) とみなしている。Clark (1996) の見方に従えば、話し手と聞き手が共同して、話し手側の意図と、聞き手側の理解を擦り合わせ、共有する知識を蓄積していく営みが言語使用における共同行為である。対話はその意味において典型的な共同行為である一方、講演のような形態は、話し手が不特定多数の聞き手に一方的に情報を提供するような形態であり、話し手は一人一人の聞き手の反応や理解を、対話ほど留意する必要がない (もしくはできない) 状況である。従って、nonpersonal settings に相当する談話形態は「聞き手との関わり合いの度合い」が全体として低い状況であると考えられる。

表 3.2 CSJ 収録データの概要 (前川 (2004: 4) より)

音声のタイプ	タイプ	話者数	データ数	時間 (h)
学会講演	独話	819	987	274.4
模擬講演	独話	594 [†]	1,715	329.9
学会インタビュー	対話	10	10	2.1
模擬講演インタビュー	対話	16	16	3.4
課題指向対話	対話	16	16	3.1
自由対話	対話	16	16	3.6

[†] このうち 10 名は学会講演者の話者でもある

3.2.1 使用データ

本章では、上で述べたような談話形態ごとの「聞き手との関わりの度合い」に着目して、以下の話し言葉が収録されたコーパスを用いて分析を行った。

1. 音声独話、対話コーパスとして「国立国語研究所 話し言葉コーパス (以降では“CSJ”と呼ぶ)」(国立国語研究所 2004)
2. 映像対話コーパスとして「Billboard Corpus」(瀬戸口他 2007, 高梨他 2007, 川田 2008)

次節では、それぞれのコーパスについて詳説する。

3.2.2 CSJ

CSJに収録されている音声資料は「独話」、「対話」、「朗読」の三種である。このうち自発的な自然発話が収録されているデータは「独話」と「対話」であるため、本論文でも「独話」と「対話」を利用する。表 3.2 に各データの話し手数とデータ数、収録時間を示す。

3.2.2.1 CSJ 独話資料

CSJ 独話資料は収録方法により、「学会講演」と「模擬講演」と呼ばれる二種のデータに分けられる*4。学会講演は「理工学、人文、社会の3領域におよぶ種々の学会における研究発表のライブ録音である。講演時間は10分から25分程度が大半であるが、1時間前後に及ぶ特別講演の類も少数含まれている。学会講演の多くをしめる理工学系の学会では、男性の大学院生であることが多いので、学会講演の話者は、年齢と性別の偏りがある。発話スタイルは概してあらたまり度が高い」(前川 2004: 3)。模擬講演は、「できるだけ年齢と性別のバランスをとった一般話者による、日常的話題についての講演である。話者の大部分は人材派遣会社からの派遣であり、あらかじめ指定された3種の一般的なテーマ(例えば「人生で一番嬉しかったこと」「人生で一番悲しかったこと」「私の住んでいる街」等)に基づいて、具体的な講演内容を決めてタイトルをつけ、1講演10~15分程度のスピーチをおこなった。発話スタイルは概して学会講演よりもくだけたものとなっている」(前川 2004: 4)。

通常「独話」という形態は、独り言など、聞き手がない状況を指すことが多いと思われる。本論文ではCSJに従い「独話」を上で説明したような不特定多数を聞き手とする「講演」もしくは「スピーチ」を表す形態を意味する用語として用いることとする。

CSJ 独話資料は講演という性質上、聞き手とのインタラクションは通常起こらず、Clark (1996) の言う、典型的な nonpersonal settings に相当する談話形態であると考えられる。

*4 「学会講演」にも「模擬講演」にも該当しない独話音声として「その他」と呼ばれるカテゴリーがあり、16データ存在する。一例を挙げると「専門学校における日本語教師養成関係の講義音声」などが含まれる。本論文では「その他」は分析対象としなかった。

3.2.2.2 CSJ 対話資料

次に「対話」データについて説明する。「対話」には「学会講演インタビュー」、「模擬講演インタビュー」、「課題指向対話」、「自由対話」の4種類がある。いずれも参加者は2名である。収録は国立国語研究所内に設置されている対面ブースが用いられている。話者はそれぞれ独立した防音ブースにはいるが、ガラス越しにお互いの顔が見えるようになっている。お互いの音声はイヤホンを通じて聞く」(籠宮 2004: 5)。

学会講演インタビューと模擬講演インタビューは、各講演者にインタビュアーが講演内容についてインタビューするという内容である。インタビュアーは20代と30代の女性各1名である*5。

「課題指向対話」で用いられた課題は「実在の芸能人に講演を依頼した場合の謝礼(ギャラ)の額を想像し、その多寡の順に、芸能人9名ないし10名をソートするタスク(ギャラ・タスク)」(前川 2004: 4)である。参加者2名(学会/模擬講演インタビューの時と同じペア)が相談しながら、対話が進められる。なお、双方には芸能人の写真リストか、芸能人の紹介文が渡されている(籠宮 2004: 4)。

CSJ対話資料はインタビューにせよ、課題指向対話にせよ、多かれ少なかれ話し手の発話に聞き手が反応し、ターンの交替が頻繁に起こる personal settings に相当する談話形態であるといえる。

3.2.3 Billboard Corpus

Billboard Corpus は2007年に京都大学学術情報メディアセンターを中心に収録された映像付対話コーパスである。Billboard Corpus はもともと、デジタルアーカイブとして保存・蓄積されたミーティングや会話などのデータに対して、効率の良いアクセスを可能にするために、コンテンツが含む音声・映像などの

*5 インタビュアーは学会講演インタビューに際しては学会予稿集に目を通して見ている。また模擬講演についてはインタビュー対象の講演の収録に立ち会っている。

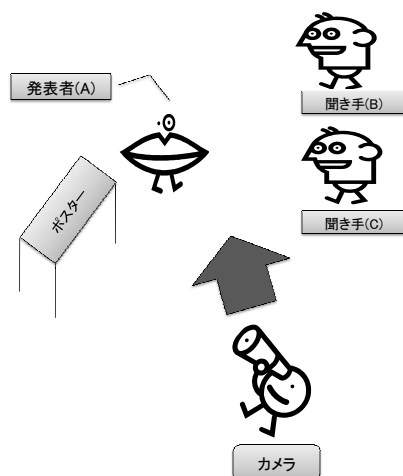


図 3.1 Billboard Corpus の撮影状況

情報に基づいて自動的にインデックスを付与しようとする工学的な研究のための基礎データとして構築されたものである(瀬戸口他 2007: 32)。そのような背景から、Billboard Corpus では映像、音声、転記資料だけではなく、対話参加者の対話中における視線方向や指さし、うなずきなど非言語的な動作に関する情報(タグ)が人手で付与されている*6。

Billboard Corpus は映像収録用に調整が施された部屋で収録された。撮影状況は図 3.1 のようなイメージとなる*7。カメラは実際には複数設置されている。タグ付与作業や分析の目的に応じて注目するカメラアングルを選択することが出来る。

対話参加者は 3 名の研究者(大学院生を含む)で構成される。3 名のうち 1 名の発表者(A)が、残り 2 名の聞き手(B, C)に対して、A の研究内容についてポスター発表をするという内容である(瀬戸口他 2007, 高梨他 2007)。

発表者は 4 名で各発表は 20~25 分程度行われた。発表者は異なる聴衆に対して 2 回~3 回ずつ発表を行った。発表数は合計 9 本になる。発表の概要と発表時

*6 正確には、2010 年現在も非言語情報のアノテーション作業は筆者を中心に進行中である。

*7 ポスターの高さは発表者の腰の高さ程度である。ポスターは 4 枚で構成されており、縦横 2 枚ずつ貼られている

表 3.3 Billboard Corpus の概要

ID	性別	発表概要	発表時間 (s)
070423_13	男性	Billboard Corpus の説明	1540.84
070423_15	男性	Billboard Corpus の説明	1124.81
070423_17	男性	Billboard Corpus の説明	1150.06
070426_13	男性	自動音声認識技術とその応用	1290.06
070426_15	男性	自動音声認識技術とその応用	1263.56
070809_13	男性	ラストファリ運動について	1622.52
070809_15	男性	ラストファリ運動について	1520.37
070810_13	女性	チンパンジー保全について	1613.78
070810_15	女性	チンパンジー保全について	1321.09

間は表 3.3 の通りである。なお、ID 名はアンダースコア (_) を挟んで日付と時間から構成される。同じ日に異なる発表者が発表をすることはないので、日付によって話者が識別される。表 3.3 における「発表概要」は筆者による。

Billboard Corpus は CSJ 独話資料と同じく、一人の発表者が一定時間ある決まったタイトルについて聴衆に向かって話すという形態を取るが、CSJ 独話資料とは異なり、聴衆との頻繁なインタラクションが認められている。聴衆は発表の途中で質問やコメントをすることができ、逆に発表者が聴衆の発話を促すことも出来るという点で CSJ 独話資料とは異なる。瀬戸口他 (2007) によると Billboard Corpus でのポスター発表は、講演など他の談話形態と比較して次のような性格を持つ。

参加者の役割付けから見ると、話し手と聞き手が固定されることがないミーティングなどと比較して、ポスター会話は話し手と聞き手という役割付けは存在する。しかし、講演などと異なり話し手がポスターの内容について話している途中でも、聞き手は必要に応じて比較的容易に質問などをすることができ、またそれによって会話の主導権を握ることが

表 3.4 各資料の概要

	CSJ 独話資料	Billboard	CSJ 対話資料
総時間 (秒)	2,180,292	12,509	43,774
データ数	2,702	9	58

できる。つまり、講演とミーティングの中間的な位置づけとなっている。

(瀬戸口他 2007: 32)

Billboard Corpus は CSJ における独話資料と同じく、「講演」を収録したもののだが、上記のような特質がある。Clark (1996) における personal settings と nonpersonal settings の境界に位置する談話形態であるといえる。以降では、Billboard Corpus の談話形態を瀬戸口他 (2007) に従い「ポスター会話」と呼び、講演などの典型的な独話とは区別して扱う。

以上で述べた3つの談話形態（独話、ポスター会話、対話）は、「聞き手との関わり合いの度合い」という観点からそれぞれを特徴づけることが出来る。すなわち、対話において話し手は常に聞き手を意識した発話が求められる。さらに情報のやり取りも相互に行われるため、対話は聞き手との関わりが強い形態である。CSJ 独話資料においては、実体として聞き手は存在するが、聞き手からの反応はないか、まれで、話し手は発話中において聞き手との関わりを意識する必要はない。話し手はほぼ一方的な情報提供者としての役割を持つ。一方で瀬戸口他 (2007) が指摘するようにポスター会話は、その中間で、話し手は概ね情報提供者として振る舞うが、聞き手とのインタラクションは制限されていない。本章では以上で述べた3つの談話形態に現れるフィラーについて議論する。

なお、表 3.4 において各資料の総時間とデータ数をまとめた。

3.3 談話形態ごとのフィラーの分布

本節では、先に紹介したコーパスを元に、CSJ 独話資料、Billboard Corpus、CSJ 対話資料の3つの談話形態ごとのフィラーの分布を調査した結果について述べる。まず、談話形態ごとに出現したフィラーを計数し、各談話形態におけるフィラーの分布を明らかにする。さらに、各談話形態に共通して頻繁に出現していた三種フィラー（後述する「え」型、指示詞型、「ま」型）に注目し、それぞれのフィラーがどの談話形態で頻出するのかについて調べた。以上の調査によって、談話形態ごとに特徴的なフィラーの現れを明らかにする。

3.3.1 CSJ 独話資料におけるフィラー

CSJ の転記基準 (小磯他 2004) によると、CSJ におけるフィラーは以下の基準 (18) と (19) のいずれかを満たすものについて認定される。

- フィラー

- (18) a. 場繋ぎ的な機能を持つ表現。語彙を以下のように限定し、その範囲内で場繋ぎ的機能を有する場合に付与。
- b. 下記以外の表現は、たとえ場繋ぎ的機能を有するものであっても (F)^{*8} は付与しない。
- c. 「あの／その」に関して、フィラーと連体詞とで迷う場合には、原則 (F) を付与した上で迷った旨をコメントする。

—— フィラー表現 ——

あ(-), い(-), う(-), え(-), お(-), ん(-), と(-)*, ま(-)*,
 う(-) ん, あ(-)(ん) の(-)*, そ(-)(ん) の(-)*,
 う(-) ん(-)(っ) と(-)*, あ(-)(っ) と(-)*, え(-)(っ) と(-)*, ん(-)(っ) と(-)*
 ※上記全てのフィラーとの組み合わせ: ~ですね(-), ~っすね(-) [例] あのですね, えーとっすねー
 ※上記「*」印のフィラーとの組み合わせ: ~ね(-), ~さ(-) [例] まーねー, うーんときー
 ※括弧内は任意 [例] あの, あの一, あーの, あーんの一

- 感情表出系感動詞

^{*8} フィラーを意味するタグを表す。

(19) a. 驚いたときや落胆したときなどに発する感動詞

b. 語彙の限定や表記の統一は行わず、長音や促音も含め聞こえた
とおりに表記。

例：(F あーあ), (F あっちゃー), (F ぎょっ), (F うおー)

例えば (20) における、‘(F)’ がフィラータグを表し、フィラータグに囲まれた表現が、CSJにおいてフィラーと認定された表現である。

(20) 私達は日常 (F ま)(F ま) コミュニケーションをする時にさまざまな距離
を取っている訳ですけれども (F えー) それについて (F えー) 文化人類学
者のエドワード・ホールとは (F あの) コミュニケーションの目的や社会
的な状況に応じて (F とー) 四つの距離の使い分けが行なわれていると
いうことを (F えーと) 六十年代に言いました (A01F0034)

CSJの独話資料におけるフィラータグが付与されている表現（感情表出系感動詞を含む）を計数したところ、合計すると約430,000回フィラーが出現していることがわかった。その中で、(18)において「フィラー表現」と認められているものに絞って計数すると、428,879回出現していた。転記されたフィラーの種類については、転記基準で認められているフィラーの基本的な形態は15種類であるが、「え」と「えー」のような語末長音の有無の差も含め、一文字でも異なるフィラーの形式は97種類認められた^{*9}。ただし、フィラーの種類は非常に多様ではあるが、その分布には顕著な偏りが見られた。まず、フィラーの種類は上位10種類で362,430回出現しておりフィラーの回数全体の85%を占めた。上

^{*9} 転記を基にフィラーを計数しているため、転記上のフィラーと実際の音声との間に乖離がある可能性は否めない。例えば、「んー」というフィラーについてそれが/n/や/N/で発音されているのか/m/で発音されているのかは、転記から知ることができない。本論文ではこの問題については捨象しているが、今後考慮していく必要はあると思われる。

表 3.5 各資料におけるフィラーの頻度 (上位 20 種)

CSJ 独話資料		Billboard		CSJ 対話資料	
フィラー	回数	フィラー	回数	フィラー	回数
えー	117,160	ま	686	あのー	590
え	46,716	まー	684	まー	511
ま	44,768	あのー	275	えー	471
あのー	40,777	あの	259	あ	447
あの	33,644	えっと	199	ま	428
まー	31,430	えっとー	171	あー	381
その	15,130	えー	141	あの	365
あ	11,829	ん	133	ん	281
えーと	11,079	え	112	その	206
ん	9,897	えーと	88	え	173
あー	9,434	あ	86	んー	123
おー	8,144	えーっと	83	そのー	116
そのー	6,946	その	78	あーのー	112
えーっと	5,559	えーとー	49	えーとー	102
んー	5,387	う	25	う	79
う	4,080	そのー	21	えーと	71
うー	3,418	えーっとー	20	うー	55
お	3,361	あー	15	あーの	43
えっと	2,917	えとー	11	えーっと	31
えーとー	2,560	んー	10	んーと	21
その他 (77 種)	14,643	その他 (24 種)	69	その他 (45 種)	211
合計	428,879	合計	3,215	合計	4,817

位 20 種類ではフィラーの回数全体の 97% (414,236 回) が占められた。表 3.5^{*10}に各資料における上位 20 種のフィラーと頻度をまとめた。

表 3.5 からフィラーの種類についても偏りがあることが読み取れる。「え」を初頭音に持つフィラーは 143,660 回出現しており、全体のフィラーの回数の 33% を占め、もっとも頻繁に出現していた。次に多かった指示詞と形態を同じくする「あの」は 86,686 回出現しており、「その」なども含めた指示詞型のフィラーについては 99,282 回 (全体の 23%) にのぼった。3 番目に頻度が高かったのが「ま」を初頭音に持つフィラーであった。この「ま」型のフィラーは 76,218 回出現しており、全体のフィラーの回数の約 18% を占めていた。すなわち、「え」

^{*10} フィラーの計数に当たっては、「聞き取りや語彙の判断に自信がない場合」(小磯他 2004: 8)を示す“(?)”タグが付与されたフィラーも含めて計数を行った。また、個人名などが含まれるために伏せ字となっている発話範囲に含まれるフィラーも計数対象とした。当然ながら、フィラーの種類は不明である。なお、伏せ字のフィラーは 154 回出現していた。

型、「指示詞」型、「ま」型のフィラーの三種のフィラーで、全体のフィラーの75%以上を占めていたことになる。

その他に目立ったフィラーとしては「あ(ー)」や「ん(ー)」「う(ー)」等が挙げられる。特に「あ(ー)」については形態上は指示詞「ああ」と共通するため、一種の指示詞型のフィラーといえるが、その振る舞いは典型的なフィラーとは言い難い例も散見される。

- (21) a. それで英語は(F あの) マスコミでも(F う) 最近騒がれてまして話す方向(F あの) 私の時代は(F あー) 教科書リーダーを辞書を片手に引きながら(F あの) 訳すっていうそれが主な作業でした (S00F0057)*¹¹
- b. (F えーと) これは(F え)(F えー) 大学のスチューデントボディーといういわゆる(F あのー)(F ん)(F ま) 生徒会みたいな(F あー) 大学版が仕切っていました (S00F0171)
- c. その時そのレオス・カラックス監督とちょうど恋人同士だったっていうことでそういう裏話も知って後で(F あー) だからあんなに綺麗だったのかなと思ったりもしました (S00F0200)
- d. 自分よりピアノがうまい人が世の中にはたくさんいるいるっていうことが分かってでそういう人達も必ずしも成功してるとは限らないっていうこう現実を見てしまって(F あー) もうこれはとてもピアノはやってられないなと思ったらもう苦しくて苦しくて仕方がなくて (S00F0209)

(21a)における「あー」は典型的なフィラーで、例えば、「あのー」や「えーと」で置き換えても、不自然ではない。(21b)も同様で、いわゆる修復 (Levelt 1989)の際に表出されるフィラーである。一方で、(21c), (21d)は「えー」や「あのー」

*¹¹ フィラータグの他、CSJにおける各談話タグは残したまま引用している。

で置き換えると、(置き換えること自体は可能だが) 不自然さが残る。このような「あー」は、話し手による推論や探索の結果、新たに得られた知見が語られる際に現れることがある。言い換えれば話し手が漠然とした「気づき」をした時に表出されることがある。この話し手の「気づき」の際に表出されうる形式には「そう」(定延 2002: 91)も指摘されており、定延(2002)は「気づき」の下位範疇である「思い出し」「思いつき」「納得」の際に(主としてそれらの前触れとして)「そう」が現れることを指摘している*12。「気づき」の「あー」は「あの一」と比較して振るまいがかなり異なるという点において、「あの一」と同じカテゴリで記述することができない。さらに独話においては話し手自身の過去の思考内容を引用する形で現れることが多く、発話時における話し手の心的操作を反映していないという点で、そもそもフィラーとして認めることも難しいだろうと思われる。

3.3.2 Billboard Corpus におけるフィラー

次に Billboard Corpus について同様の手法で発表者のフィラーの度数を調べた。Billboard Corpus の転記基準ならびにフィラータグの付与基準は CSJ の基準(18)に準拠している*13。Billboard Corpus は9つのデータを合計した発表総時間が約12,000秒(発表者の発話時間は約8,425秒)である。(18)における「フィラー表現」に相当する表現は合計3,215回出現しており、44種類認められた。表3.5のように、上位10種で全体の約80%を占め、上位20種では96%を網羅していた。

*12 定延(2002: 91)は気づきの「そう」の例として以下を挙げている。

- (ii) そうそう。田中さんがよろしくとのことでした。
- (iii) そうだ。いいことがありますよ!
- (iv) そうか。別の手がありましたね。

定延(2002: 91)も指摘するように、気づきの「そー」は単独では現れることは少ない。

*13 Billboard Corpus の転記資料を見ると、CSJではフィラーとして認められていない「こう」や「そーです」などもフィラーとして認められている。さらに、1例しかなかったが、「この」もフィラータグが付与されている例があった。基準をCSJと合わせるために、たとえ場繋ぎ的表現であったとしても上記表現は除外し、(18)で認められている「フィラー表現」に絞って計数した。

フィラーの分布については、まず CSJ 独話資料との共通点として、「え」から始まるフィラー、「あー」や「そー」など指示詞と形態を同じくするもの、「ま」から始まるフィラーによってほぼ占められているという点が挙げられる。この三種で約 2,800 回出現しており、全体の約 87% を占めた。ただし、この三種の内訳に関しては CSJ とは異なっていた。最も頻出していたのが「ま」型で、1,371 回出現していた。続いて「え」型が 789 回出現しており、指示詞型が 641 回出現していた。すなわち、ポスター会話においても大多数のフィラーは「え」「ま」及び指示詞型で占められていた一方で、「ま」型が頻出していたという点において CSJ 独話資料とは異なる結果となっていた。

3.3.3 CSJ 対話資料におけるフィラー

更に、CSJ 対話資料について調査した。CSJ の対話資料は「インタビュー」と「課題指向対話」と「自由対話」の 3 つの形態から構成される。インタビュアーは全対話資料において 2 名しかいない。また、課題指向対話でも自由対話でも同じインタビュー対話のインタビュアーが対話に参加している。そのためフィラーの計数に当たってはインタビュアーの発話は除外した。対話資料全体のフィラーの分布と対話の形態毎のフィラーの分布を表 3.6 に示す。対話資料では、「うん」など応答表現がその対話の性質上頻出する。CSJ の転記基準においても、対話資料に限り応答表現にフィラータグを付与することが認められている(小磯他 2004: 16)^{*14}。ただし、本論文は応答表現に関しては対象外としており、計数対象としていない^{*15}。

^{*14} CSJ 対話資料で応答表現として認められている表現は下記の通りである。

はい、ええ、うん、うーん、ううん、いえ、いいえ、いや

「まあ」など、フィラーと同形式で応答表現的に振る舞う場合も当然あり得るが、計数上は CSJ 基準に従い上記表現のみを応答表現とした。

^{*15} (18) では、「うん／うーん」は「フィラー表現」としても認められており、応答表現である「うん／うーん」と見かけ上の区別がつかない。しかし、フィラータグの付与された表現を列挙すると、CSJ 独話資料では「うん／うーん」にフィラータグが付与されている例はなく、実際上は「うん／うーん」は応答表現としてみなされているようであった。従って、フィラーの計数に当たっては「うーん／うん」も応答表現として除外している。ただし「う (ー)」「うーんと」などは計数対象としている。

表 3.6 CSJ: 対話資料におけるフィルター

	対話全体	インタビュー	課題指向	自由対話
データ数 (個)	58	26	16	16
時間 (秒)	43,774	19,831	11,041	12,902
指示詞型 (個) *	1,450	911	71	468
「え」型 (個)	922	535	180	207
「ま」型 (個)	944	626	48	270
その他 (個) †	1,487	520	466	501
合計 (個)	4,803	2,592	765	1,446

* フィルターのカテゴリは 3.4.1 における定義に基づく。

† 指示詞型、「え」型、「ま」型、および応答表現を除外したフィルターの個数。

他の談話形態で分布の8割以上を占めていた「え」から始まるフィルター、「あ(そ)の」を中心とする指示詞と同形のフィルター、および「ま」から始まるフィルターは、対話形式においては、全体の約65%で、過半数を占めていた。他の談話形態と比べると低い数値となったが、依然として大多数をこの3種のフィルターが占めていた。さらに大きな特徴として、「え」型、「ま」型のフィルターの頻度が比較的low、特に「課題指向対話」における「ま」型のフィルターの出現頻度が顕著に低い結果となった。

指示詞と同形のフィルターとしてみなさなかつた「あ(ー)」が頻出していたのも特徴のひとつである。

(22) a. L: *¹⁶何か(Fあの)じゃ出張のついでに

R: (Fはい)

L: 色んなところに行ったりとか

R: (F **あー**) そういうことはあります (D01M0020)

b. L: 他にケーキとかも結構フランスって凄いいいって言われるんだけどケーキはどうでした

R: (F **あー**) あたし甘いもの苦手なんですよ (D01F0055)

*¹⁶ ‘L’はインタビュアーを表し、‘R’は本章で計数対象としたインタビュイーを表す。

例えば (22) のように、インタビュアー (L) の発言を受けて、話し手に漠然とした「気づき」があったときに表出されることがある。CSJ 独話資料で指摘した「気づき」の「あー」とは、「気づき」のきっかけを聞き手から得ているという点で異なるが、独話で見られた「あー」と同じく「あの一」や「え一」に置き換えると、発話全体の解釈に影響を与えるため、「あの一」や「え一」と同列に扱うことは難しいと思われる。ただし、「あ一」は (21a) で述べたような典型的なフィラーの振る舞いを見せる場合もあるが、「気づき」の「あ一」とフィラーの「あ一」の区別は曖昧である。

(23) L: なぜ ICU にいってしまったんですか

R: (F あ一) そそれは何だろう (F ま) かなり特殊な大学ですよ

(D01F0003)

(23) のように、「あ一」の後で再び自問することも可能なので、このような場合、たとえ「あ一」の代わりに「え一」や「あの一」が表出されてもおかしくない状況である。

いずれにせよ、このような相手の発話を受けて表出される「あ一」は応答的な表現としてみなすこともできる。「あ一」を応答表現とみなすと、指示詞と同形のフィラーと、「え」、「ま」から始まるフィラーの総数は、応答表現を除く全体のフィラー約 75% を占める^{*17}。

^{*17} なお、「あ一」の出現位置について、CSJ 独話資料および Billboard Corpus と CSJ 対話資料には顕著な差があった。CSJ は「0.2 秒以上のとぎれが無く、連続して生じている区間」(小磯他 2004: 3) をひとつの転記単位としている。当然ターン交替時も区切りの対象となる。この転記単位をもとに「あ一」の出現位置を比較すると、CSJ 独話資料では、転記単位初頭 (すなわち 0.2 秒以上のポーズの直後の発話) に「あ一」が現れる回数が全体の約 50% (4646/9436)、Billboard Corpus の場合も約 50% (8/15) であるのに対して、CSJ 対話資料の場合は約 88% (339/381) であった。すなわち、CSJ 対話資料ではほとんどの「あ一」の直前はポーズであった。これは、確実ではないが高い確率で、CSJ 対話資料では発話中に現れる「あ一」はフィラーではなく、ターン交替時の初頭に現れ相手の発話を受けた応答表現的な「あ一」で占められたことを示唆する。

3.4 三種類のフィラーと談話形態間における比較

前節では、各談話形態において頻出するフィラーとその特徴について述べた。その結果、いずれの談話形態においても、「えー」、「あの／その」「まー」とそれらに類似する形態のフィラーによってほぼ占められていることが分かった。また、各談話形態によってそれぞれのフィラーの分布が異なることも明らかになった。

本節では、フィラーの大部分を占める「えー」、「あの／その」「まー」の各フィラーがどの談話形態で特徴的に現れるのか、談話形態間における比較を行う。あるフィラーが談話形態の違いによって、その生起率に差があるかどうかを確かめることが目的である。もし差があれば、当該フィラーがどの談話形態で出現されやすいのか（されにくいのか）が明らかになる。

まず対象とするフィラーの種類を明確にするために、改めて三種類のフィラーの形態的な定義を行う。そして、各データごとに現れた三種類のフィラーそれぞれに対して、フィラーの総数を割ることで、各フィラーのデータごとにおける生起比率を産出した。談話形態ごとに生起比率の平均値を産出し、生起比率の平均値の比較を行う。

3.4.1 三種類のフィラー

まず、調査対象とする三種類のフィラーを形態的な特徴に基づき、以下のよう

- 三種類のフィラーはCSJ基準(18)を満たしており、フィラータグが付与されていないなければならない。
- 三種類のフィラーは次に述べる「え」型フィラー、指示詞型フィラー、「ま」型フィラーから構成される。
 - － 「え」型フィラー

* 初頭音が/e/のフィラー

* ただし、CSJの転記資料では、「ええ」と表記されているものは応答表現としてみなされているので、除外した。

－ 指示詞型フィラー

* 指示詞と形態を同じくするフィラーで、以下の条件を満たすもの

- ・ {あの/あーの}から始まるフィラー
- ・ {その/そーの}から始まるフィラー^{*18}

－ 「ま」型フィラー

* /ma/を初頭音に持つフィラー

3.4.2 方法

本節では、三種類のフィラーがそれぞれどの談話形態で頻出するか（しないか）を統計的に明らかにすることで、フィラーの形態と、Clark (1996) の ‘personal/nonpersonal settings’ に基づく「聞き手との関わりの度合い」に応じた談話形態との関係を探る。

調査に当たっては、(18) で認められているフィラー表現のみをフィラーとみ

^{*18} この定義では「あー」や「そー（です）ね」、「こー」が指示詞型フィラーとみなされない。特に「あー」や「そー」は典型的なフィラーとしても振る舞うことがあるので、指示詞型フィラーとみなすこともできる一方で、前節で述べたとおり、応答表現的にも振る舞うことがあるため「あの」や「その」と同列に扱うことは難しい。そのため指示詞型フィラーとはみなさなかった。しかし応答表現的に振る舞うのは「ま」型フィラーも同じなので、問題は残る。これらの振る舞いの差は音調的な特性から捉えられる可能性がある。「そー」「そー（です）ね」に関しては、定延 (2002) において、フィラーとして振る舞う場合があることが述べられている。しかし、CSJ 基準ではフィラーとして認められていないため、計数対象から除外した。形態上対応する「あー」を除いたので、「そー」を含めると対象形態の整合性がとれなくなるという問題もある。また、特に「そー」についてはフィラータグが付与されていないため、単純に文字列のマッチングから計数しただけでは本来の指示詞的用法と区別できず、正確な計数が行えない。以上の理由から「そー」に関しては捨象することにした。なお「そー（です）ね」に関しては文字列のマッチングによる計数自体は可能である。CSJ 独話資料で 1,314 回、Billboard Corpus で 93 回、CSJ 対話資料で 327 回出現していた。Billboard Corpus と CSJ 対話資料においては、無視できない量である。ただし、応答詞的に振る舞っている場合があるので全てがフィラーとは限らない。なおコ系列指示詞型のフィラー「こう」などについては Billboard Corpus のみでタグ付与されているため、比較対象をそろえるために除外した。今後、より精緻な定量分析を行う上で「{こ/そ/あ}ー」の振る舞い整理した上で分析することは重要であると考えられる。

表 3.7 談話形態とフィラーの関係 (平均比率)

	CSJ 独話	Billboard	CSJ 対話
「え」型 [†]	40.22 (35.20) [‡]	27.51 (28.41)	19.63 (12.47)
指示詞型	24.76 (17.66)	21.76 (19.81)	24.37 (20.76)
「ま」型 [†]	16.74 (12.07)	40.56 (47.75)	18.24 (14.65)

[†] $p < 0.05$

[‡] 括弧内は中央値を表す。

なし、CSJ 独話資料、Billboard Corpus、CSJ 対話資料の各データについて、フィラーの総数を計数した。さらに、3.4.1 で定義した「え」型フィラー、指示詞型フィラー、「ま」型フィラーを同様に計数した。その上で各データごとの総フィラー数に対する「え」型フィラー、指示詞型フィラー、「ま」型フィラーの表出比率を計数した上で、談話形態ごとに表出比率の平均値を算出し、その平均値を比較する。

対象としたデータは三種類のフィラーも含めてフィラーが1回以上表出されていたデータとした。CSJ 独話資料では 2,682/2,702 データが対象となった。Billboard Corpus、CSJ 対話資料では全てのデータが対象となった。素データを表 3.7 に示す。

次に検定方法について述べる。検定対象とするフィラーの出現率は3つの談話形態において同じであると仮定して検定を行った。すなわち、フィラーの出現率は談話形態の違いに左右されないと仮定した。まず、各フィラーの表出比率の正規性および分散を調べた。正規性に関しては、Kolmogorov-Smirnov (コロモゴロフ・スミノフ) 検定を行った結果、CSJ 独話資料の「え」型フィラー、指示詞型フィラー、「ま」型フィラーいずれにおいても正規分布をなしていなかった。分散についてはバートレットの分散分析を用いて調べたところ、「え」型フィラー、指示詞型フィラーに関しては $p < 0.05$ であったため、各談話ごとにおける均質な分散を示さなかった^{*19}。そのためノンパラメトリック検定で

*19 統計的検定には R (Windows 版 (Team 2008)) を用いて計算した。各検定法は標準パッケージ内の各

ある、クラスカル・ウォリス法*20を用いて、中央値の比較を行った。その結果、「え」型フィラーと「ま」型フィラーについては5%水準で談話形態による差が有意にあるという結果となった。指示詞型フィラーについては有意な差が見られず、談話形態の違いによる出現率に差はないという結果になった。

次に、「え」型フィラー、「ま」型フィラーの出現率についてマン・ホイットニー検定による多重比較を行った*21。その結果、「え」型フィラーについては、CSJ独話資料とCSJ対話資料の比較 ($p < 0.05$) および、CSJ対話資料とBillboard Corpusの比較 ($p < 0.1$) において有意な差が見られた。「ま」型フィラーについては、CSJ独話資料とBillboard Corpusおよび、Billboard CorpusとCSJ対話資料において有意な差が見られた ($p < 0.05$)。すなわち、「え」型フィラーについては、3つの談話形態を比較して、CSJ対話資料が最も低い出現率を示し、「ま」型フィラーについては、3つの談話形態を比較して、Billboard Corpusが最も高い出現率を示したということになる。

3.4.3 考察: 「聞き手との関わり」とフィラー

以上の結果より、フィラーの種類と談話の形態にはある程度の関連性があるようである。

「え」型フィラーは、独話、ポスター会話と比較すると対話において出現率が低かった。Clark (1996) における“personal settings”に相当する談話形態ではあまり見られないフィラーの形式であることが示唆される。独り言ほどではないが、「聞き手との関わり」が希薄で、話し手が一方的に話し、聞き手からのフィードバックが少ない談話形態において「え」型フィラーは比較的頻出する

関数を用いた。

*20 クラスカル・ウォリスの検定 (Kruskal-Wallis test) は、ウイルコクソンの順位和検定を3条件以上の場合にも適用できるように拡張したものであり、“対応がない3つ以上の条件の中央値 (分布の全体的位置) がすべて等しい”という帰無仮説を検定するために用いられる。(森・吉田 1990: 212)

*21 マン・ホイットニーの検定 (Mann-Whitney test) は、対応がない2つの条件の中央値 (分布の全体的位置) を比較する際に用いられるノンパラメトリック検定であり、用いる統計量の記号からU横定 (U test) と呼ばれることが多い(森・吉田 1990: 204)

ことがわかった*22。

指示詞型フィラーは談話の種類による差が見られなかったため、聞き手とのやり取りが頻繁であろうとなかろうと、その出現率に変化はないといえる。

「ま」型フィラーに関しては、興味深い結果となった。Billboard Corpus は話し手が一方的に聞き手に対して情報提供をする CSJ 独話資料に近い側面を持ちながら、聞き手による割り込みが許され、ターン交替も行われる。「聞き手との関わり」という点において Billboard Corpus は独話と対話の中間的な談話の形態でありながら、フィラーの出現比率は必ずしも CSJ 独話資料と CSJ 対話資料の中間的な値になるということはなく、「ま」型フィラーについては特に、一番高い出現率を示し、独自の特徴を示した。

次章以降では、自然談話において出現したフィラーの大多数を占めていた、「え」型、指示詞型、「ま」型のフィラーの振る舞いと特徴について議論を行う。本節で示された、談話形態別における各フィラーの分布の違いに着目した考察をする。

また、フィラーの形式的な側面についても考察する。フィラーは「え」型を除くと、実質的な意味を持つ語と形式を共有する場合がある。例えば指示詞型フィラーである「あの」「その」「こう」はその名の通り、通常は指示詞として振る舞う。また、「まあ」は以下のようにフィラーというよりは、副詞的に用いられる場合もある。

(24) A: 太郎くんって背は高いの？

B: うん、まあ高いよ。

フィラーの形式的な特徴と自然談話におけるフィラーの振る舞いとの関係に

*22 山根 (2003: 231) は「「エー」は独話に多い」という観察をしている。本論文では「独話とポスター会話と比べると対話で少ない」という結果だったため若干異なる結果であったといえる。

についても着目する。従って、以降では、フィラーの出現する言語外的環境（談話の形態といった話し手を取り巻くコミュニケーション上の環境や話し手の身体動作）とフィラーの言語的特徴の両側面を中心に、コーパスの分析や語用論的、談話分析的手法を用いて、「え」型、指示詞型、「ま」型フィラーの分析を行う。

3.5 要約

本章では、CSJ（『日本語話し言葉コーパス』）と Billboard Corpus をもとに、談話の形態を独話、対話、および、その中間であるポスター会話に分け、談話形態ごとに出現したフィラーの種類を計数した。その結果、談話形態に関わらず、出現するフィラーは「え」型、指示詞型、「ま」型の三種類のフィラーが大多数を占めることがわかった。さらに、談話形態と出現するフィラーの種類の間には、関連がみられた。独話では、他の形態に比べ、「え」型が占め、ポスター会話では、「ま」型が目立った。また、課題指向対話では、「ま」型が極端に低い傾向が見られた。

第4章 フィラーと視線の同期について

4.1 はじめに

対話において、参加者が行っていることは発話だけではない。話し手は身振り手振りを交え発言し、その間、相手に視線を向けたり、時には目をそらしながら、対話を進める。聞き手の場合も同様にうなずきといった身体的な動作を行ったり、視線を話し手に向けたりそらしたりしながら、話し手との対話が進められる。対話における話し手の身体動作や視線は話し手の心的状態や聞き手に対する意識を推定する一つの手がかりとなる*1。

本章ではフィラーの音声形式と、話し手の視線方向との関係について論じる。これまでも、フィラーと視線の関係について注目した研究はいくつか存在する。例えば、英語話者のフィラーと話し手の視線を観察した Kendon (1967: 60) がある。Kendon (1967) によると、話し手がフィラーなどの言い淀み*2を発している間は、流暢な発話が行われているときと比べ、聞き手から視線をそらしやすいという。

前章では「え」型フィラーは主に対話のような聞き手との関わりの高い談話形態では、その出現頻度が低く、講演のような聞き手との関わりが低い談話形態では、ある程度出現していた事が明らかになった。また、指示詞型フィラーについては、談話形態による大きな頻度差はなく、どのような談話形態においても同程度表出されていた。本章では、「フィラー発話時の話し手の視線」に注目し、フィラーの各音声形式によって視線方向に差があるのか検証する。特

*1 話し手による身体的動作については McNeill (1992), 喜多 (2002) など参照。視線については Goodwin (1980), Argyle and Dean (1965) などで議論されており、後述する。

*2 Kendon (1967) の用語では 'hesitation'。

に「え」型フィラーと指示詞型フィラーに注目した。その上でそれぞれのフィラーの特徴を、聞き手に指向されているか (cf. 2.5.2 節)、話し手自身に指向されているか (cf. 2.5.3 節) といった、フィラーの指向性の観点から両者の特徴を記述する*3。

通常の声言語は、対話において話し手が自身の意図を伝達する手段であり、いわば聞き手（他者）指向的な性質を持つといえる。一方で、フィラーは 2.5.3 節で述べたとおり、話し手が対話の最中において計算や記憶の探索を行っている時に無自覚的に発せられることがある。フィラーが計算や記憶探索といった話し手自身の心的な操作が音声として反映される形式（心的操作標識 (定延・田窪 1995)）とみなされる場合、フィラーは聞き手よりもむしろ話し手自身に指向された音声形式としての性質を持つといえる。

通常の声言語形式が聞き手を指向しているのであれば、流ちょうな発話が行われている時に視線が聞き手に向けられることは不自然ではない。しかし Kendon (1967) による「フィラー表出時は聞き手から視線がそれやすい」という観察が日本語にも当てはまるとすれば、通常の声言語形式とは異なり、日本語の会話におけるフィラーはその形式を問わず、おしなべて聞き手に対する指向性がないのであろうか。

本章では、Billboard Corpus を利用して、フィラーの音声形式に応じた話し手（発表者）の視線方向の差異について観察を行った。その結果、「え」型フィラーも指示詞型フィラーもある程度聞き手以外に視線が向けられており、日本語の自然談話においても先行研究の予測から外れていないことが分かった。すなわち、Kendon (1967) の観察は日本語の自然談話においても支持できると考えられる。ただし、指示詞型フィラーに関しては聞き手に対しても比較的視線が向けられており、必ずしも聞き手から目がそらされやすいとは言えない結果となっ

*3 本章は川田 (2008) の議論をもとにしている。

た。すなわち、「え」型フィラーは話し手自身に指向されたフィラーであるといえるが、指示詞型フィラーは必ずしもそうではなく、聞き手にもある程度指向されたフィラーといえ、フィラーの音声形式の違いによって、聞き手への指向性に関して程度差が見られることが示唆された。

本章の構成は次の通りである。次節ではフィラーおよび非言語情報の先行研究と、本論文におけるフィラーの位置づけを提示する。4.3節ではデータとアノテーションの説明をする。4.4, 4.5節ではフィラーと視線の同期に関する調査結果を報告し、指示詞型フィラーについては聞き手の存在がより意識されながら発せられていることを示唆する。4.6節では、談話形態ごとの差異に注目し、それが4.5節の観察を支持する事例であることを述べる。さらに、4.6節と4.5節の結果と前節の結果を比較し、フィラーと「聞き手との関わり合い」の度合いの関連について再度触れる。最後に議論をまとめる。

4.2 議論の背景

4.2.1 フィラーの自己指向性と他者指向性

2.5.2、2.5.3節で述べたとおり、フィラーはコミュニケーションを円滑に進めるためのひとつの手段としての側面と、発話そのものの産出やプランニングに関わる、話し手自身に向けられる側面が指摘されてきた。前者はいわば「選択され、使われる」フィラーであり、後者は「現れる（出てしまう）」フィラーである。両者は排他的関係にあるわけではなく、フィラーごとにどちらかの側面しかないとはいえない。いかなるフィラーも、ある程度は「現れる」ものでありつつ、Clark and Fox Tree (2002)における *uh*, *um* の選好に関する議論のように、ある程度は「選択される」ものである。当然、「出てしまった」フィラーは結果的に聞き手に何らかの解釈を促す。例えば、Watanabe (2009)によると、話し手は複雑な発話を行おうとする時、フィラーを表出してしまうと同時に、聞き手は話し手がこれから複雑な発話を行うことを予測できる。さらに「現れるフィ

ラー」が、聞き手にある解釈を促すことをあえて利用してみせる場合もあり得る。例えば、(25)のように、依頼の場面で「あの一」が使われることがある。例えば、話し手は「相手のためにいかにも言葉を選んで考えながら頼んでいる」という態度が伝わることを期待しているかもしれない。

(25) (席を2人分占拠している強面の乗客に対して)

あの一、そこ空けてもらえますでしょうか？

このような例は、**定延・田窪 (1995)** が指摘している「特定の心的状態を演出する」(**定延・田窪 1995: 79**) ために意図的もしくは儀礼的に「考えてみせた」フィラーである。

2.5.1 で述べたように、本論文では、フィラーには文産出に関わる話し手自身に向けられた側面と、前節で紹介した「ターンの保持」など聞き手とのやり取りに深く関わる側面の二種の側面があると考えられる。

前者の話し手自身に向けられた側面をフィラーの「自己指向的性質」*4と呼び、後者のコミュニケーションの方略的な側面を、フィラーの「他者指向的性質」と呼ぶこととする*5。

以上のように、フィラーには自己指向的な側面と他者指向的な側面が絡み合い、話し手から表出され、聞き手に伝達されると本論文では考える。

*4 本論文では「自己指向性」という語には話し手の意図性は含意されないものと考えている。「自己指向性」、「他者指向性」の二つの側面は身体的なジェスチャーの機能分析の文脈においても指摘されている (**喜多 2002**)。フィラーと身体的ジェスチャーがどのような点で共通し、また異なるのかという点については興味深い問題であるが、本論文の範囲を超える。今後の課題としたい。

*5 **山根 (2003: 220)** はフィラーを3つの機能に分類している。そのうち、「テキスト構成に関わる機能」「話し手の情報処理能力を表出する機能」と呼ばれる機能が本論文で言う自己指向的性質に相当し、「対人関係に関わる機能」が他者指向性に相当すると思われる。しかし、山根の目的指向的な分類は問題が残る。例えば「話し手の情報処理能力を表出する機能」について**山根 (2003: 223)** は「一度に多くの情報を表出することができない話し手はフィラーを頻出することで情報処理の時間を稼いでいる」と記述している。しかし、2.6 で述べたとおり、「時間稼ぎ」といったフィラーの具体的な目的を実証することは困難である。困難である以上、本論文では特に自己指向的なフィラーは特定の目的があつて能動的に使われるものではなく、「文産出上の障害から自然と表出されてしまうもの」程度に捉えている。

4.2.2 「え」型フィラーと指示詞型フィラー

本節では、「え」型フィラーのひとつである「えーと」と指示詞型フィラーのひとつである「あのー」に焦点を当て、その振る舞いの違いに関する先行研究を概観する。

定延・田窪 (1993, 1995) によると、「あのー」は情報の検索時、特に、モノのイメージはつかめているが、名前がまだ思い出せていない状態における話し手の「名前の検索」(定延・田窪 1995: 80) 時に現れるという。例えば、話し手が「検索中」ではなく、「計算中」である時、「あのー」は現れにくい。

(26) 一郎: 1234 足す 2345 は？

次郎: {ええと / ??あのー}、3579 (定延・田窪 1995: 83 (8))

定延・田窪 (1993: 17) は「あのー」が表す話し手の心的状態について「名前の検索」の他に「発言内容に対する編集操作」を挙げ、それらをまとめて「話し手が発言すべき内容をうまく言語で伝えるための心的操作を行っている際に現れる外向型操作標識」であるとしている。すなわち、「あのー」は「聞き手の存在を予定している」(定延・田窪 1993: 22) 表現であり、(25) のように相手に「考えてみせる」ことが可能である。「あのー」は他者に対する指向性がもともと強いフィラーであると考えられる。

(27) (なくしたものを探している)

{えーと / ??あのー}あれどこやったかなあ

一方「えーと」は (27) のように、独り言でも現れうることから「内向型操作標識」(定延・田窪 1993: 17) とされる。すなわち、「えーと」は「あのー」に比べてより自己指向性が強いフィラーらしいフィラーといえる。ただし「えー」は「あのー」のような演技的な使用が不可能というわけではない。例えば、以下の

(28a) は、インターネット上の Q&A サイト*6 における相談者に対する回答のひとつである。また、(28b) は筆者が 1990 年代後半に書いた電子メールの一部である。

- (28) a. ええと、今更警察に届けても、現場検証も出来ないし、お互いの言い分を聞いて調書を作るくらいしか出来ないと思うのですが。*7
- b. えー、本題ですが、余った調査書を学校へ、郵送で返却します。

通常、自然的表出があり得ない書き言葉において、フィラーを表記することで、書き手が「思考状態であること」が演出される。「えー(と)」に関しても「特定の心的状態を演出する」(定延・田窪 1995: 79) ために意図的もしくは儀礼的に「考えてみせる」ことは可能である。

以上より、多かれ少なかれ、フィラーには自己指向的な側面も他者指向的な側面もあると考えられる。ただし、実際には、第三者が話し手の意図の有無を知ることは出来ない以上、フィラーの自己指向的振る舞いと他者指向的振る舞いの境界は明らかではない。

4.2.3 視線とフィラー

視線は対話を含む相互行為の中で大きな役割を果たすことが知られており、対話中の話し手の視線を観察した事例は多い (Kendon 1967, Goodwin 1980, 1987)。特に本論文で注目したのは Kendon (1967) による次の観察である。

The speaker looks at the auditor during passages of fluent speech and at the end of phrases but that he looks away during passages of unfluent speech or during hesitations. (Kendon 1967: 60)

*6 ユーザーが相談や質問を投稿し、複数のユーザーがその相談や質問に対して自由に回答を投稿することができるインターネット上のサービス。

*7 <http://komachi.yomiuri.co.jp/t/2008/0223/170675.htm?o=0\&p=2>

Argyle and Dean (1965: 291) や Clark (1996: 276) によれば話し手が視線を聞き手に向けているとき、それは聞き手へのチャンネルが開いていること、もしくは、話し手が聞き手に注意を向けている証拠とされる。逆に、相手に視線を向けていない状況は聞き手に注意を向けていない証拠とみなされる (Clark 1996: 276)。同様に話し手が思考状態にあるときも、聞き手に対する注意が向けられていない状況であるとされる (Clark 1996: 276)。従って、話し手が情報検索やエラー修復を行っている状態でフィラーが現れたときに話し手の視線が聞き手からそれやすいことは不自然ではないと考えられる*8。

聞き手との関わりという観点から視線を考えれば、話し手が特定の相手に視線を向けながら発話している状況は、聞き手の反応に留意しながら談話を進めている状況であり、聞き手との関わりが局所的に強い状況と考えられる。逆に、目をそらし、聞き手とのチャンネルをいったん閉じた状況は局所的には弱い関わりを示すものと考えられる。すなわち、フィラーは一般に、言語使用において聞き手との関わりが低い状況で現れやすいことが先行研究から予測される。

4.2.4 先行研究の課題

先行研究では、フィラーの形式間の差異と、フィラーと視線との関連についてはそれぞれ独立して扱われていた。すなわち、視線に関してフィラーごとの違いに関しては言及されてこなかった。例えば、Kendon (1967) ではフィラーの音声形式の差異について留意されていないことが挙げられる。日本語には多様なフィラーが存在し、その振る舞いも音声形式によって異なる場合が見られることを考えると対話の非流ちょう性を区別なく扱うことは問題が残ると考えられる*9。また、日本語に関して、フィラーと身体動作との関係に触れた、実例を

*8 この点に関しては Kendon (1967: 42) でも “In withdrawing his gaze, *p* (話し手)^{筆者注} is able to concentrate on the organization of the utterance” と指摘されている。

*9 その他の関連研究としては Goodwin (1987) が挙げられる。Goodwin (1987: 118) では、話し手がフィラーの表出を含む次発話の検索 (word search) を行いながら対話相手へ視線を向けることによって、対話相手の発話を誘発させることがあると指摘されている。

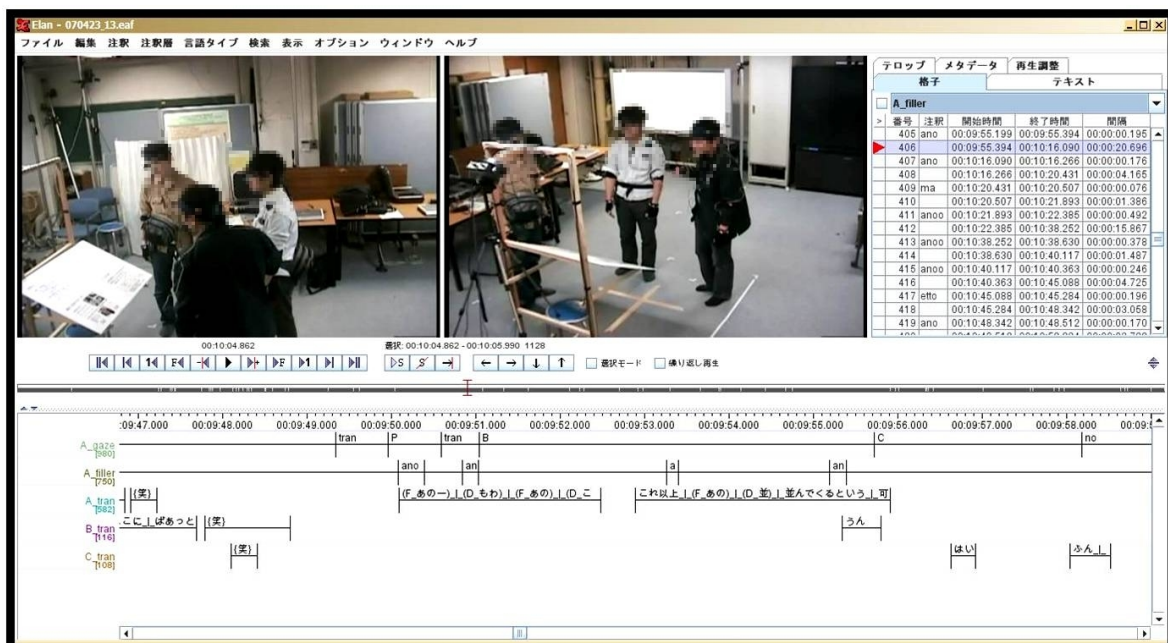


図 4.1 ELAN によるアノテーション作業画面

中心とする具体的なデータに基づく研究は少ないという現状がある。

本論文では、話し手がフィラーを発している間の視線方向に着目し、フィラーの音声形式間の差異を自己（他者）指向性の程度差の観点から捉え直すことを目的とする。

4.3 ラベル付与

本節では Billboard Corpus における視線およびフィラーラベルの付与手順について説明する。フィラーと視線の関係を定量的に観察するためには、談話データとその転記情報の他に、時間ごとの視線方向を記録する必要がある。談話データに付与された転記以外の情報を、ラベル、もしくはアノテーションと呼ぶ。Billboard Corpus では元々「視線」「うなずき」「指さし」の3つの非言語情報についてのアノテーション方法が仕様で決められている(瀬戸口他 2007: 34)。アノテーションの付与に際しては、専用のソフトウェアが用いられる。本論文ではいくつかのソフトウェアを併用してアノテーションを行った。図 4.1 は

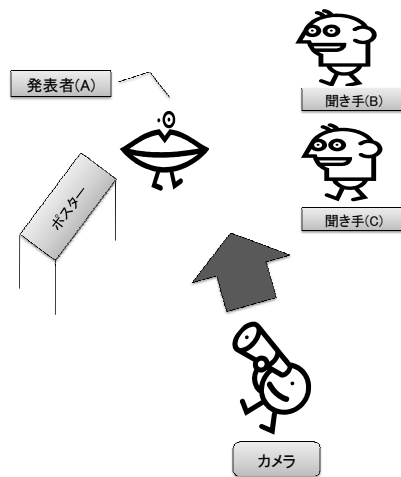


図 4.2 Billboard Corpus の撮影状況 (図 3.1 再掲)

アノテーション作業に用いたソフトウェアの一つである ELAN (Windows 版。Ver. 3.7.2)^{*10} のスクリーンショットである。図 4.1 のように映像や音声を確認しながらアノテーション付与が行われる。

4.3.1 視線

まず、視線ラベルの付与方法について説明する。Billboard Corpus の撮影状況を 4.2 に再掲する。本論文では発表者 (A) の視線ラベルを中心に分析を行った。

Billboard Corpus の仕様では、視線には各視線方向の種類 (視線ラベル) とその開始時間および終了時間の 3 つのラベルが付与されることになっている。発表者 A の視線方向には、次の 6 種類が割り当てられる。

- B: 聞き手 B を見ている区間
- C: 聞き手 C を見ている区間
- H: 聞き手を見ていることは確かだが、対象が判然としない区間
- P: ポスターを見ている区間
- no: 上記以外に視線を向けている区間

^{*10} <http://www.lat-mpi.eu/tools/elan/>

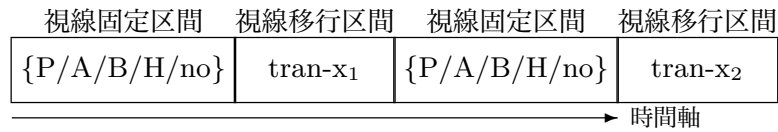


図 4.3 視線区間

(開始時間	終了時間	視線方向)
.....		
11.7717114	21.2352441	P
21.2352441	21.6725832	tran-C
21.6725832	22.3312594	C
22.3312594	22.6483897	tran-P
22.6483897	26.3165303	P
26.3165303	26.7393708	tran-C
26.7393708	27.0036460	C
32.4530019	32.6168525	tran-B
32.6168525	33.2352566	B
.....		

図 4.4 視線ラベル付ファイルのフォーマット

- tran: 視線移行区間

視線ラベルは視線固定区間 (B, C, H, P, no^{*11}) と視線移行区間 (tran) の繰り返しとして付与される^{*12}。補足すると、坊農・片桐 (2005) においても同様の視線構造が提案されている。本論文では Billboard Corpus の tran ラベルを改変し、どの方向へ視線が移行しているかという情報を tran に加えた。以下では視線移行方向情報と呼ぶ^{*13}。定義上、視線移行方向情報は当該 tran ラベルの次の視線固定区間を表すラベルと必ず同じ値となる^{*14}。視線の遷移を図示すると、図 4.3 のようになる。tran-x の x が視線移行方向情報を表す。例えば、図 4.3 の最初の視線移行方向情報 x₁ は 2 番目の視線固定区間を占める視線方向と同じ値に

^{*11} no に関しては厳密には視線が固定されていない可能性がある。例えば、ポスターも聞き手も見ずに、「首が揺れている」もしくは「目が泳いでいる」状態などが考えられるが、ここでは考慮していない。

^{*12} ラベル付与は目視で行われる。tran が目視では確認できないほど短時間で行われた場合は、tran が付与されない場合もある。

^{*13} 視線移行方向情報は「次の対象に視線を動かしている」という解釈と「前の対象から視線をそらしている」という解釈の二通りの解釈があり得る

^{*14} 一度 tran ラベルを付与した後で、それぞれの tran について次の視線固定区間ラベルを視線移行方向情報として書き加えたので、正確には同じ値に設定したという表現が正しい。

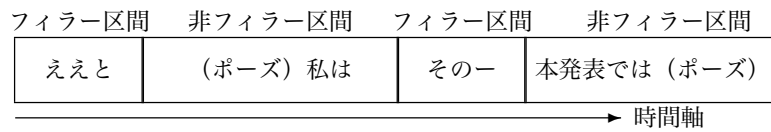


図 4.5 フィラー区間

なる。

ラベル付与に当たっては音声分析ソフトウェア「WaveSurfer (Windows 版。Ver. 1.8.5)*¹⁵」を用い、途中から「ELAN (Windows 版。Ver. 3.7.2)」を用いた。実際にラベル付与されたデータは図 4.4 のようなフォーマットでテキストファイルとして書き込まれる。

4.3.2 フィラーラベル

次にフィラーラベルについて説明する。Billboard Corpus には転記テキストにフィラー情報が記されており、前節ではそのフィラー情報を利用した。しかし Billboard Corpus の転記テキストにはフィラーの開始時と終了時は記されていない。視線を含めた非言語情報ラベルとの比較を行うためにはフィラー発話の正確な開始時間と終了時間についての情報が必要である。従って、非言語情報ラベルとの比較のために、フィラーの開始時間と終了時間を記したフィラータグを新たに付与しなおした*¹⁶。まず本章におけるフィラータグの基本的な仕様を説明する。まず、フィラーが発声されている時間を「フィラー区間」と呼び、その他の発話やポーズも含めてフィラー以外の時間を全て「非フィラー区間」と呼んで区別する。図示すると、図 4.5 のようになる。フィラーラベルには視線と同様にフィラーとその開始時間と終了時間の 3 項が付与される。非フィ

*¹⁵ <http://www.speech.kth.se/wavesurfer/index.html>

*¹⁶ 転記テキストと本論文独自のフィラータグには手作業ゆえの数値のずれがある。全てのデータ (9 データ × フィラー三種 (「え」型フィラー、指示詞型フィラー、「ま」型フィラー) に関しては平均 8 個のずれがあった。各データにおける全フィラー (3 種類のフィラー) の平均出現数が 110 (転記テキスト) である。本論文では無視できる誤差として扱ったが、今後精度を上げる必要はあると思われる。

(開始時	終了時	フィラー)
12.523	12.718	ee
12.718	13.345	
13.345	13.960	eetoo
13.960	14.297	
14.297	15.022	sonoo
15.022	17.342	
17.342	17.618	eeto
17.618	18.661	
18.661	18.807	ano
18.807	25.774	
25.774	26.393	eetodesune
.....		

図 4.6 フィラーラベル付ファイルのフォーマット

ラー区間についてはその開始時間と終了時間のみが記される。フィラーの表記は英字とし、できるだけ発音に近い形で表記した。例えば、短めに「あの」と発音された場合は‘ano’とラベルを付与し、末尾が長めに発音された場合は‘anoo’といったようにラベルを付与した^{*17}。なお、フィラー認定のための基準は特に設けなかった。例えば、音調的な特徴を定義したり、「指示詞型フィラーは照応関係を持たない」といったフィラーの定義をしてトップダウン的に認定作業を行おうとしても、ラベル付与をする際に短時間で一つ一つ判定するのは事実上困難である点を考慮して母語話者としての言語直感のみを頼りにフィラーの認定を行った。

フィラーラベルの付与に際しては、音声の転記用ソフトウェアである「Transcriber (Windows 版。Ver. 1.5.1)^{*18}」を使用し、音声波形を目視で確認しながら音声を聞き、フィラーが発声されていると判断した箇所についてフィラー区間の認定を行った。具体的なフィラーラベルの付与されたファイルのフォーマットは図 4.6 のようになる。

^{*17} 基本的には聴覚印象のみを基準としているため、母音の長さや表記の対応は、必ずしも一貫していない。英字表記は便宜上のものと割り切ってラベル付与を行った。ただし、フィラー区間の開始時間と終了時間は記録されているため、フィラーの長さに関する分析はフィラーの英字表記ではなく、時間情報を使えば問題ないと考えている。

^{*18} <http://trans.sourceforge.net/>

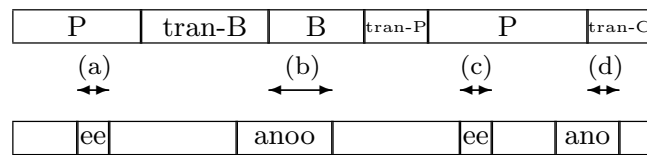


図 4.7 同期区間

4.4 フィラーと視線の同期

4.4.1 同期区間

本章ではフィラーと同期している視線区間を次のように定義する。

- (29) フィラーと重複する視線区間において、当該フィラーの終了時に重複している視線区間を、フィラーと同期する視線区間と認定し、同期区間と呼ぶ。

具体的には図 4.7 で示されている両矢印の区間 (a)~(d) が同期区間に相当する。同期区間には二つの可能性がある。まずフィラーが同一視線内に包含されている場合で、(a) と (c) がそれに相当する。この場合、当該フィラー全区間が同期区間となる。もう一つの可能性は、フィラーが連続する二つ以上の視線レベルにまたがっている場合である。(b) と (d) がそれに相当する。この場合、定義 (29) に従って、フィラー終了時に重複している視線区間を同期区間とする。ただし同期しているフィラーの終了点を同期区間の終了点とする。例えば (b) の場合、「あの一」と同期している視線区間は‘tran-B’ではなく、‘B’とする。同様に (d) の場合は‘P’ではなく、‘tran-C’を同期区間とする。(d) において話し手はフィラー開始時には‘P’を見ていたが、「あの一」といいながら‘C’方向へ視線を移していることを表している。同期区間は視線固定区間であっても視線移行区間でもよい。

フィラー終了時を基準に同期区間を定義したことについて、理論的に裏付けられた根拠はないことを断っておく。(29) は (d) のように、フィラー表出時の

視線方向ではなく、フィラーの途中で生じた視線移行に焦点を当てた定義である。フィラーの表出が次発話産出の過程に関わっているのであるとすれば、フィラー開始時ではなく、フィラーの途中で起こった現象に注目する方が妥当であろうと考えたため、(29)を同期区間として定義した。

念のためフィラー開始時点を基準に重複する視線を同期区間として計数を行った。例えば(b)においてtran-Bを同期区間として計数したが全体の傾向に大きな変化は見られなかった*19。

4.4.2 調査対象

調査対象としたフィラーは指示詞型フィラーと「え」型フィラーそして「ま」型フィラーである。ただし、本章の目的は「え」型フィラーと指示詞型フィラーとの比較を通じてフィラーの自己（他者）指向性の差異を探ることにあるので「ま」型フィラーは中心的には扱わず、調査結果のみ記した。「ま」型フィラーに関しては指示詞型フィラーと「え」型フィラーの比較を通じて本章の最後に簡潔に特徴付けを行う*20。「んー」などについては生起数がそれほど多くなく、また、まとまった先行研究もないため分析対象外とした。

調査にあたっては、それぞれのデータについて発表者Aの指示詞型フィラーおよび、「え」型フィラーとそれに同期するAの視線方向の種類を計数した。

本章では、視線方向に関しては「聞き手を見ているか否か」という点のみに注目している。そこで、{B, C, H, P, no, tran-x}の6種類の視線ラベルを「聞き手視線」と「非聞き手視線」の2種に分けて統計を出した。聞き手視線方向に

*19 重複している視線全てを同期区間と認めなかったことの原因を説明する必要もあると思われる。大きな理由はフィラーの開始時、途中、および終了時それぞれの区間で同期している視線方向を同一視して計数すると、データの統一性が保証できなくなる可能性があると判断したからである。また、一つのフィラーに対して一つの同期区間を割り当てれば、同期区間の数がフィラーの数と一致するので、計数上の煩雑さが避けられるという点も考慮した。

*20 指示詞型フィラー間の相違については本章では捨象した。圧倒的にA系列の指示詞型フィラーが多くそれ以外は生起頻度が低かったため、比較するのが難しかったのが大きな理由である。また、頻度の高いA系列に限定する積極的な根拠もないため、指示詞型フィラーとしてまとめることにした。

は、聞き手を見ていることを示す視線固定ラベル、B, C, H を割り当て、さらに聞き手を見ようとしている視線移行ラベル、tran-B, tran-C, tran-H を割り当てた。非聞き手視線方向には、ポスターか聞き手以外のその他の方向に視線を向けていることを示す視線固定ラベルである P, no を割り当て、さらに聞き手以外の方向を見ようとしている視線移行ラベルである tran-P, tran-no を割り当てた。まとめると以下のようなになる。

- **聞き手視線:** B, C, H, tran-B, tran-C, tran-H
- **非聞き手視線:** P, no, tran-P, tran-no

以降では、聞き手視線方向と同期しているフィラー区間の時間を聞き手視線同期時間と呼び、非聞き手視線方向と同期しているフィラー区間を非聞き手視線同期時間と呼ぶ。

4.5 調査結果と考察

4.5.1 調査結果

以上を元に、指示詞型フィラー、「え」型フィラー、参考情報として「ま」型フィラーそれぞれのフィラーと同期する視線（同期区間）の時間と回数を調査した。視線同期時間と同期回数の素データを表 4.1、表 4.2 で示した。

まず全体の視線時間を概観しておく。表 4.1 の「データ ID」列においてイタリックになっているデータは全体として聞き手に対してより長く視線が向けられていたデータである。9 データ中 4 データが聞き手により長く視線が向けられていた。聞き手にあまり視線を向けなかった 070809 を除いて、話し手が同一人物であってもデータによって視線方向の傾向は異なっていた。Billboard Corpus では、各話し手の視線方向に一定の傾向はなく、データによって異なっていると考えられる。

同期時間については、各データの発話時間および、各データの発表者 A の発

表 4.1 視線同期時間 (秒)

データ ID	全体の視線時間		「え」型		指示詞型		「ま」型	
	聞き手	非聞き手	聞き手	非聞き手	聞き手	非聞き手	聞き手	非聞き手
070423_13 [†]	846.04	694.80	22.74	37.08	12.02	8.48	7.62	8.31
070423_15 [†]	610.49	514.32	16.53	24.14	8.05	4.61	9.88	9.78
070423_17	452.69	697.37	6.69	20.43	5.86	9.59	9.92	19.54
070426_13 [†]	694.28	595.78	2.15	7.53	15.86	18.59	10.96	13.92
070426_15	562.02	701.54	0.82	6.12	9.32	22.86	7.04	13.20
070809_13	336.06	1286.46	1.27	32.59	0.32	3.68	1.16	31.25
070809_15	585.68	934.69	2.38	29.09	0.25	3.34	5.20	25.90
070810_13 [†]	925.70	695.28	7.73	22.40	25.77	15.16	3.36	9.16
070810_15	584.68	736.41	1.32	11.16	9.9	20.13	1.95	6.61

[†] 全体を通して、聞き手に視線がより長く向けられていたデータ

表 4.2 視線同期回数 (回)

データ ID	「え」型			指示詞型			「ま」型		
	聞き手	非聞き手	計	聞き手	非聞き手	計	聞き手	非聞き手	計
070423_13	81	110	191	47	35	82	49	49	98
070423_15	49	63	112	27	18	45	59	54	113
070423_17	29	51	80	17	31	48	63	110	173
070426_13	13	28	41	71	64	135	92	118	210
070426_15	4	19	23	33	76	109	57	107	164
070809_13	7	133	140	3	16	19	12	236	248
070809_15	12	110	122	2	14	16	26	175	201
070810_13	18	54	72	58	40	98	14	43	57
070810_15	5	29	34	30	45	75	12	26	38

話時間に対する（非）聞き手視線時間の比率が異なるので同期秒数や回数をそのまま使って比較することはできない。以下のように、それぞれのフィラーとの同期時間を全体の聞き手視線時間もしくは非聞き手視線時間で割ることで、同期率を算出し正規化した。

- 非聞き手視線同期率 = 非聞き手視線同期時間 / 非聞き手視線時間
- 聞き手視線同期率 = 聞き手視線同期時間 / 聞き手視線時間

正規化した結果を図 4.8 において示した。

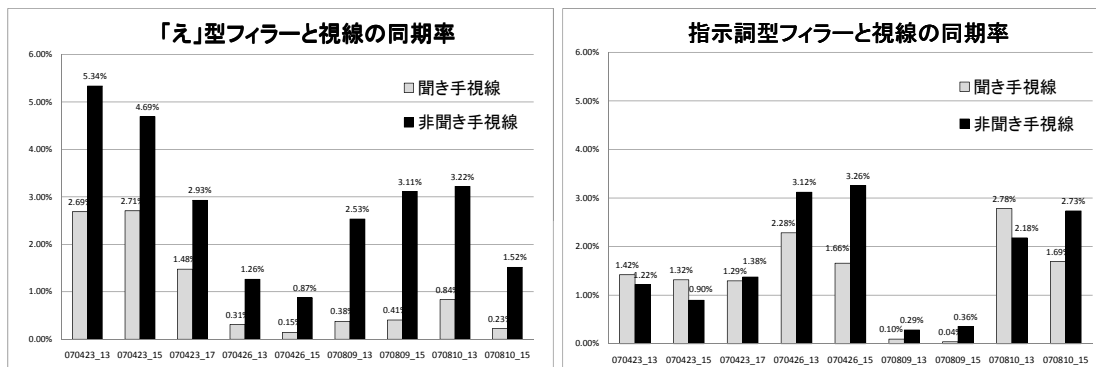


図 4.8 各フィルターと視線の同期率

4.5.2 考察

まず、表 4.1、4.2 の同期時間（回数）を見ると、フィルターの種類によって異なる傾向が見られる。時間、回数共に太字で示した値が、他方より高い値であることを表す。まず「え」型フィルターについては全てのデータについて、時間および回数共に聞き手以外の視線方向と同期していた。指示詞型フィルターに関してはいくつかのデータにおいて聞き手により視線が向けられていたことがわかる。つまり、指示詞型フィルターの場合は必ずしも聞き手を見ている傾向があるとは言えないようである。なお、「ま」型フィルターについては「え」型フィルターと同じような傾向が見られる。

同期率についても、上記傾向は大きく変わらなかった。図 4.8 が示すように、「え」型フィルターの場合、聞き手視線同期率（灰色のバー）に対して非聞き手視線同期率（黒色のバー）が全てのデータにおいて高くなっている。一方で、指示詞型フィルターの場合、いくつかのデータにおいて聞き手視線同期率が非聞き手視線同期率を上回っていた。070426、070809 の二名については「え」型フィルターと同様、聞き手以外に視線が向けられていた。ただし、070426_13 は回数では聞き手に向けられる回数の方が多かった。070809 は全体を通して、聞き手に視線が向けられておらず、かつ指示詞型フィルターの生起数自体が他のデータと

比べて少なかった。

なお、指示詞型フィラーの非聞き手視線同期率の値自体は「え」型フィラーと比べて低いわけではなかった。すなわち、フィラーの種類にかかわらず、フィラー発話時にある程度聞き手から視線がそらされること自体は先行研究の示すとおりであった。

ところで、上記の分析は各フィラーと視線の同期時間を比較して行ったが、指示詞型フィラーと「え」型フィラー単独の発話長が大きく異なるという可能性も考えられる。そこで、各データにおける指示詞型フィラーと「え」型フィラーの発話長の平均を求めた。表 4.3 に結果を示す。フィラーの長さについては、ID が 070423 の話し手に関してのみ、二種のフィラーの平均長に差がないとは言えない結果となったデータが存在したが、概ねフィラーの長さに大きな差はないようである。

以上の観察より、フィラーの種類によって、視線同期の傾向が異なることが示唆された。「え」型フィラーの場合は聞き手以外の対象により頻繁に視線が向けられる傾向があり、指示詞型フィラーは「え」型フィラーに比べれば、聞き手に視線が向けられている。注意すべき点は、それでも双方のフィ

ラーにおいて共に十分に聞き手以外に視線が向けられているという事実である。このことから、双方のフィラーは共に自己指向的な側面を持っており、その上で、指示詞型フィラーに関しては他者指向的側面が相対的に強く、「え」型フィラーは相対的に低いということが示唆される。(25) で示したように依頼の場面など自然談話中で演技的、儀礼的に使うことができる指示詞型フィラー(特に「あのー」と、演技的使用が (28b)、(28a) のような書き言葉に制限されや

表 4.3 各フィラーの平均長 (秒)

データ ID	「え」型	指示詞型
070423_13 [†]	0.37	0.28
070423_15 [‡]	0.38	0.29
070423_17	0.41	0.35
070426_13	0.32	0.32
070426_15	0.33	0.31
070809_13	0.25	0.28
070809_15	0.3	0.26
070810_13	0.45	0.44
070810_15	0.44	0.42

[†] ($t = 4.26, df = 226, p < 0.05$)

[‡] ($t = 3.49, df = 96, p < 0.05$)

表 4.4 プレゼン時と質疑応答時の視線とフィラー分布

	視線 (秒)		フィラー (回)	
	聞き手	非聞き手	「え」型	指示詞型
531 秒以前	204.87	314.43	157	2
531 秒以降	639.47	375.4	34	80

すい「え」型フィラーとの分布的差異が他者指向性の程度差に起因するのであれば、実データによる結果と合致するものであると考えられる。

4.6 談話状況の差異

本節ではポスター会話形態形態において聞き手とのインタラクションが頻繁に行われる状況とそうではない状況とでフィラーの分布や視線同期に関して顕著な差が現れることを示す。その上で本節で示す事例が前節までの観察と考察を支持するものであることを述べる。

Billboard Corpus では前章 (3.2.3) でも述べたとおり、発表者が最初から最後まで延々と話し続けているわけではない。質疑応答など聞き手とのインタラクションも頻繁に行われている場合が多い。ただし、そのスタイルは発表者によって異なっており、質疑応答を交えながら発表を行う者もいれば、プレゼンテーション（講演）と質疑応答を明確に分けている者もいた。

中でもプレゼンテーションと質疑応答を明確に分けて発表を進めていた 070423_13 のデータに注目した。070423_13 では前半は典型的なプレゼンテーションが行われており、発表者が一方的に話し、聞き手とのインタラクションはほとんどない。しかし発表が始まって約 531 秒後に発せられる (30) の発話を境に、質疑応答が始まり、聞き手との頻繁なインタラクションが始まる。

(30) えっとー私からのえっとプレゼンテーションは以上になります

(530.528 – 533.176 秒)

表 4.4 に 070423_13 の 531 秒以前と以降の視線とフィラーの分布を示す。表

表 4.5 プレゼン時と質疑応答時の視線同期時間 (秒)・回数 (回)

	「え」型		指示詞型	
	聞き手	非聞き手	聞き手	非聞き手
531 秒以前 (同期時間)	8.36	9.28	N/A	N/A
531 秒以降 (同期時間)	5.6	7.89	11.45	8.48
531 秒以前 (同期回数)	64	93	N/A	N/A
531 秒以降 (同期回数)	17	17	45	35

4.4 が示すように 531 秒以前のプレゼンテーション時は非聞き手視線時間の方が長い。また、フィラーの分布は指示詞型フィラーが 2 回、「え」型フィラーが 157 回表出されており、「え」型フィラーに圧倒的に偏っている。

一方で、531 秒以降の質疑応答では、より長く聞き手に視線を向けていることが分かる。またフィラーの分布を見ると、指示詞型フィラーの生起数が「え」型フィラーを超えている。すなわち、プレゼンテーションと質疑応答では視線方向とフィラーの分布の傾向がちょうど逆になっている。

表 4.5 は 531 秒前後の視線同期時間をフィラー別に示したものである。531 秒以前では指示詞型フィラーは 2 回しか表出されていないので、計数対象から外してある。

同期率を示したグラフが図 4.9 である。もともと 070423_13 は「え」型フィラーの生起数が多いため、聞き手視線同期率と非聞き手視線同期率の差は大きく出なかった。531 秒以前も聞き手視線と同期する「え」型フィラーが長く表出されているようである。しかし図 4.9 が示すとおり、531 秒以降では、聞き手視線と同期するフィラーは「え」型フィラーが聞き手視線時間に対して約 1% を占めるのに対して、指示詞型フィラーでは約 2% を占めており、フィラーと同期する聞き手視線は指示詞型フィラーに偏っている。

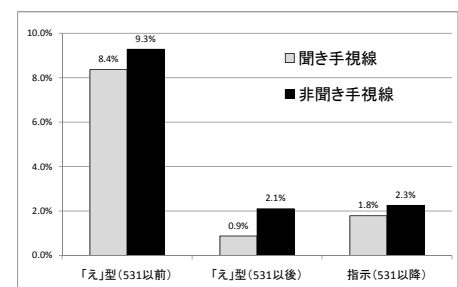


図 4.9 070423_13 における各フィラーと視線の同期率

以上の観察より次のようなことがいえる。まず、聞き手との関わりの度合いがプレゼンテーション時より質疑応答時の方が高いのは、聞き手の発話量の差からも明らかであろう。その前提のもとで、聞き手との関わりの度合いが低い状況では話し手は聞き手以外に視線を向ける傾向がみられた。一方で聞き手との関わりの度合いが高い状況では、話し手は聞き手に対してより頻繁に視線を向ける。また、聞き手とのインタラクションがあまり行われない状況では、話し手は「え」型フィラーをより頻繁に発し、インタラクションが頻繁に行われる状況では指示詞型フィラーも多用されるという傾向が示された。

この結果は前節で述べた、指示詞型フィラーの他者指向性の強さに合致する傾向であるといえる。また、「え」型フィラーと指示詞型フィラーとの視線同期率を比較しても、聞き手とのやり取りが多い形態では、指示詞型フィラーに偏っているという点も前節の議論と矛盾しない。

4.7 「ま」型フィラーと視線

最後に「ま」型フィラーについて少し触れておく。表4.1、4.2をみると、「ま」型フィラーの振る舞いは、ほぼ「え」型フィラーと共通する。すなわち、概ね話し手が聞き手以外を見ているときに「ま」型フィラーが発せられることが多い。「え」型フィラーと「ま」型フィラーの同期率を図4.10で示す。同期率に関しても話し手は「え」型フィラーと同様に「ま」型フィラーの表出時には聞き手から目をそらしている傾向が読み取れる。「ま」型フィラーもまた、「え」型フィラーと同じく、視線との同期関係を見る限りでは、自己指向性の高いフィラーであることが示唆される。

ところで、前章において、CSJ独話資料、CSJ対話資料およびBillboard Corpusを比較して、談話形態ごとに現れやすいフィラーについて述べた。前章において提示した表3.7によると、「ま」型フィラーはポスター会話において頻出していた。視線との関わりにおいて、「ま」型フィラーは聞き手に視線が向かず、自

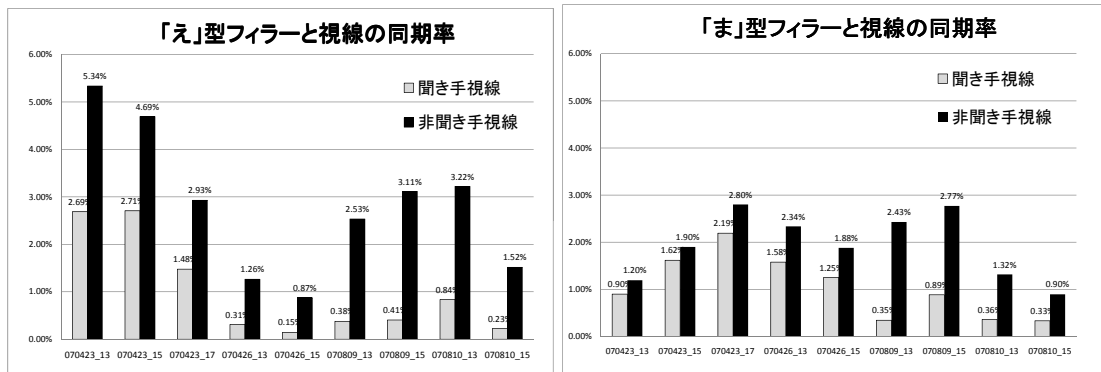


図 4.10 「え」型フィラーと「ま」型フィラーにおける視線の同期率

己指向性の高さがうかがえるフィラーであるにも関わらず、聞き手とのやり取りが少ない独話において「ま」型フィラーが必ずしも頻出しないという事実は一見整合性がないように思われる。

次章では、「ま」型フィラーが自己指向的かつ、ポスター会話で頻出するフィラーであることに注目し、「ま」型フィラーが実在物としての聞き手を必要とするが、「ま」型フィラーの談話の中での役割としては、話し手側に属する話し手自身の情報提示の際に表出される表現として位置づけてゆく。

4.8 要約

本章では、Billboard Corpus を利用してフィラー発話時の話し手の視線方向をフィラーの音声形式ごとに観察した。その結果、「え」型フィラーの発話時は、話し手は聞き手から視線をそらしている傾向が明らかになった。「ま」型フィラーについても概ね同様の結果となった。言い淀みの最中は聞き手から目がそれやすいという Kendon (1967) の観察と合致し、話し手が自身の発話の産出により重きを置く自己指向性の強いフィラーであることが示唆された。これは3節で得られた「「え」型フィラーは聞き手との関わり合いが低い独話で頻出する」という結果にも沿う結果である。

一方で、指示詞型フィラーの場合は、視線方向に偏りはなく、「え」型フィ

ラーと比較すると聞き手にも視線が向けられていた。3節で談話形態を比較した結果でも、指示詞型フィラーの生起に偏りはなかった。4.6節で、ポスター会話中に質疑応答が始まると指示詞型フィラーの生起が増えた事例も合わせると、指示詞型フィラーは自己指向、他者指向性のどちらも偏り無く持ち合わせたフィラーであるといえる。

すなわち、フィラーはその音声形式によって振る舞いが異なり、特に「え」型フィラーと指示詞型フィラーに関しては自己／他者指向性の観点からそれぞれを特徴づけることができることを、話し手の視線方向との同期関係を観察することで示した。

第5章 「まあ」の分析

5.1 はじめに

前章までの観察から、「ま」型フィラーは聞き手への視線があまり見られない、自己指向性の比較的高いフィラーであることがわかった。それにもかかわらず、聞き手との関わりという点において独話と対話の中間形態であるポスター会話で特に頻出するという特徴も見られた。この点に注目し、本章ではこの「ま(あ)」という形式(以降では「まあ」と表記する)について語用論的、談話分析的観点から分析する。

指示詞型フィラーがその名の通り指示詞として振る舞うのと同様に、「まあ」はフィラーとして振る舞うだけではなく、副詞として用いられ、文全体の真理条件的な意味に影響する形式として機能することがある。これまで副詞としての「まあ」について記述した研究は少ない。

「まあ」を分析するに当たって、本章では、5.2においてまず副詞としての「まあ」の意味記述を行い、「まあ」をスケールに作用する表現として記述する。スケールに作用する表現として「まあ」を扱うことによって、「まあ」が一種の緩和表現として振る舞う根拠を与える。その上で、5.3において緩和表現としての「まあ」の談話中における役割について述べる。最後に「まあ」のフィラーとしての性質を副詞の「まあ」と関連付け、3章、4章の議論も踏まえてまとめる*1。

5.2 スケールに作用する表現としての「まあ」

日本語には発話の「和らげ (hedge/mitigation)」や「ぼかし」のために使われる表現が多く存在することが知られている。例えば、“sentential hedge”として

*1 本章における議論は川田 (2007a,b) の議論をもとにしている。

c. お君^{きみ}さんの相手は田中君と云って、無名の—まあ芸術家である。

(『葱』)

d. (子規は) 滅多に人と交際などはしなかった。僕だけどういものか交際した。一つは僕の方がええ加減に合わして居ったので、それも苦痛なら止めたのだが、苦痛でもなかったから、まあ出来ていた。

(『正岡子規』)

(32a) では返答の際に「まあ」自体が否定されている。(32b) の「まあ」は直後の名詞句を修飾し、概数を表している。(32c) では、文脈上、書き手(主人公)は「田中君」をプロの芸術家と信じていない。動詞句と共起する(32d)の場合、子規が「条件付きで交際可能な男」であることが「まあ」によって明示される。このように「まあ」はそれ自身で文の意味に影響を与えることがわかる。

5.2.1.2 「まあ」の文法的カテゴリー

本節では、「まあ」が話し手の真偽判断に関わる文副詞としての振る舞いを見せる一方で、後続する要素の持つスケールに制限を与える性質も持ち得る標識であることを述べる。

本論文で扱う文副詞とは、節に統合されない“disjuncts (離接詞)” (Quirk et al. 1972: 268) を指すこととする。Quirkらの議論をもとに日本語の文副詞を分析したものとして、澤田(1978)、中右(1980)などがある。(32b)の「まあ」は「多分」や「だいたい」といった表現と置き換えても大きく文意は変わらない。「多分」や「思うに」など概言的な副詞は中右(1980)において「真偽判断の副詞」と分類されている。「真偽判断の副詞」とは「命題の真偽の度合に対する査定的判断を示す」(中右 1980: 196)と定義される。真偽判断の副詞は共通して「不確定的コンテクスト」(中右 1980: 196)に現れない特徴を持つ。具体的には以下の環境での生起が制限される。

- 命題否定の作用域に生じない。

(33) *確かに朝倉先生は送別会に出席されなかったのではなく、たぶん出席されなかったのだ*³。(澤田 1978: 22(96))

- 直接(間接)疑問の作用域に生じない*⁴。

(34) a. *多分、次郎は道江に恋をしていたのですか?(澤田 1978: 20(87))

b. *私は彼らが多分早退できるかどうか尋ねた。

(中右 1980: 196(4e))

同じことは「まあ」でも観察される。

(35) a. ?? この部屋は、まあ明るくないのではなく、確実に明るくないね。

b. ?? まあ太郎は賢いのですか?*⁵

c. ?? わたしは、次郎に、まあ太郎が賢いかどうか尋ねました。

このように、「まあ」は「真偽判断の副詞」と同じ環境を要求するが、必ずしも「思うに」や「たぶん」と同じ意味内容を持っているわけではない。例えば、下の(36)のように「たぶん」は「まあ」と自然に共起し、「たぶん」の意味が冗長になったり、強調されることはない。

(36) そんなデータの取り方をして、全国の労働者を対象に行った(たぶんまあともな)調査と比較しても全く説得力を感じません。

(ブログ『学舎日記』)*⁶

(36)における「まあ」は「まとも」かどうかの真偽に言及しているわけではない。どの程度「まとも」という、「まともさ」の度合について言及していると

*³ 文法性判断を表す記号は引用元に従っている。

*⁴ そのほか、条件節内、onlyの作用域に生じないことが中右(1980)で挙げられている。

*⁵ ただし、「驚き」と解釈することは可能。

*⁶ <http://d.hatena.ne.jp/manabiya/>

解釈できるだろう。例えば、「ある程度」といった表現に置き換えても、文意は大きく変わらない。「まあ」は「命題の真偽の度合」だけではなく、(31a) や (36) のように後続要素の持つ意味の度合に対しても影響を与える。つまり機能的には程度を表す性質をも持つといえる。

5.2.2 「まあ」に関する先行研究

5.2.2.1 談話標識としての「まあ」

前節では、「まあ」が特殊な文副詞であることを述べたが、「まあ」を副詞としてみる先行研究は少なく、多くは「談話標識」と捉え、その機能面から考察するものが多い。特に、「まあ」の基本的な機能を提示し、その機能から様々な用法が派生されるという考え方を採る。

例えば、川上 (1993, 1994) は「まあ」の基本的な機能を「概言」としている。川上は「まあ」を談話中で現れる位置によって分類している。発話の冒頭に現れる「まあ」は「応答型用法」と呼ばれる。応答型の「まあ」の『基本的な意味は「大まかにひきくくって述べる概言」という姿勢・態度に求められる』(川上 1993: 72) としている。この基本的な意味をもとに、談話の中では、「先行発話を受けつつ次への展開をスムーズに誘導するという調整機能を果たす」(川上 1993: 77)。一方で、発話内の文頭、文中に現れる「まあ」は「展開型用法」と呼ばれる。基本的な意味としての「概言」は維持しているが「実質的な意味が希薄」(川上 1994: 77) である。談話における調整機能は果たしており、「まあ」は後続する話題・路線がそれ以前の話題・路線から転換することを予告しつつ、転換そのものを支え(中略)転換後スムーズに後続内容を導入するよう促す」(川上 1994: 77) 役割を果たしているとする。川上の分類する「展開型用法」は、「間つなぎ」と共通する性格を持っている(川上 1994: 77) と指摘されているように「ま」型フィラーと対応する*7。しかし、「談話の調整機能」という記述は明示的

*7 ただし川上 (1994) は「展開型用法」の「まあ」は「言い淀み」とは異なるとしており、『言い淀み』な

ではなく、また、フィラーが談話を「調整」する程の強力な機能を有しているかどうかは慎重に考慮する必要がある。また、「ま」型フィラーについて「概言」的機能を残しているとするのも主張としては強いと思われる。以下はCSJ独話資料の一部であるが、「ま（－）」の前後において事実的情報が語られている。このような場合に現れる「ま」型フィラーを概言とみなすのは難しいだろう。

- (37) (筆者注: 父親は) かつての日本国有鉄道といういわゆる国鉄のま一職員だったということもありましてえーま一県内新潟県内ですけれどま転居しました。 (S01M0950)

富樫(2004)は「まあ」の機能を「曖昧性」に求めている。富樫によれば「まあ」は次のように記述される。

- (38) 「まあ」の機能: ある前提から結果へと至る計算処理過程が曖昧であることを示す。あるいは、計算に至る際の前提そのものが明確ではないことを示す。 (富樫 2004: 134 (52))

(38) によって聞き手の存在を仮定せずに「まあ」を記述できるので、独話での使用も取り込める。聞き手が存在する時は次のような機能として実現する。

- (39) 「まあ」が表す処理の曖昧性から生じる「和らげ」の効果が、(実際の計算処理とは関係なく) 聞き手に対して示される。 (富樫 2004: 140 (73a))

このような記述を与えることによって、川上(1993, 1994)で見落とされていた、「まあ」の独話での使用を取り込むことが可能となるだけでなく、(38) から

どとの最も大きな違いは「まあ」にはその出現場所に一定の傾向がある』と指摘されている。ただし「出現場所」を「出現環境」と同義とするならば、他のフィラーも同様に、出現環境(談話の形態や後続句の複雑さなど)に緩やかながら制約があることは本論文のこれまでの議論でも述べてきたことであり、Watanabe(2009)なども指摘するところである。

語用論的に派生した(39)によって、聞き手への働きかけとしての「まあ」を、基本的な機能を維持したまま説明することが可能だとしている。

(40) (ケンカをしている二人の間に割って入って)

まあ、まあ、まあ

(富樫 2002: 25 (37))

上のような「まあ」によって生じる、聞き手の感情を和らげる効果は「まあ」が本質的に持つ「曖昧性」標示の機能から、聞き手が解釈するものである」(富樫 2002: 27)とされ、これが「語用論的派生」であるとされる。

驚きを表す「まあ」も「曖昧性」から派生されるという。「まあ」が現れるのは獲得情報に対する何らかの曖昧性、「はっきりとした事実として受け止めない」といったような反応が派生的に生じるため」(富樫 2004: 140)とされる。ただし、曖昧性から「まあ」のそれぞれの解釈への「派生」を可能にする手続きは必ずしも明確ではない。また、フィラーの例からは、話し手の発話内容が曖昧であると判断することはできないという問題も残る。

5.2.2.2 先行研究の課題

先行研究は個別の課題は残されつつも、「まあ」の様々な用法をうまく捉えており、「まあ」の性質を満たすための必要条件は備えていると思われる。しかし、「概言」や「曖昧性」を表すとき、必ずしも「まあ」が現れるとは限らない。これらの定義は「まあ」を記述するには強すぎる可能性がある。例えば、「概言」や「曖昧性」と記述しただけでは、「たぶん」や「思うに」のような他の真偽判断の副詞と区別することができない。また、「だろう」や「かもしれない」といったモーダル助動詞も「概言」を表すことはよく言われている(寺村 1984: 219)。従って、「まあ」の意味を他の言語形式の区別する形で記述する必要がある。

次節以降では、「まあ」が文副詞のひとつとしてコード化されるべき意味を特定する。さらに、「まあ」の緩和表現的な用法など真理条件的な意味とは無関係

な用法については、「まあ」の持つ性質が、発話行為へ作用することで実現することを述べる。このような記述を与えることで、他の緩和表現との差異を示すことができる。

5.2.3 Scalar implicature と「まあ」

5.2.3.1 森田 (1993)

「まあ」の機能をスケールの観点から記述したと思われる先行研究として、**森田 (1983)** が挙げられる。

森田 (1983) は下の (41) のような例で使われる「まあ」を「軽く抑えた判断」(**森田 1983: 279**)を表すとしている。具体的には「小から大へと伸展していくある状況や何らかの働きが、何らかの条件でストップする限界点を冷静に認め、現実の事実として受け止める、もしくは自身の控えめの判断として示す意識である」(**森田 1983: 279**)とされる。

- (41) a. 子供のやることだからまあ仕方がない (森田 1983: 280)
 b. まあ我慢しましょう (森田 1983: 280)

筆者の解釈では、**森田 (1983)** による「まあ」の基本的な性質は「話し手による限界点の設定・認識」にあると思われる。しかし、「限界点」とは、「進展していく状況や何らかの働きがストップする点」とされ、明示的に限界点とは何かについて示されているわけではない*⁸。本論文では、「限界点」とは「まあ」の与えることのできるスケールの限界点と解釈し、**森田 (1983)** の観察を拡張した分析を行う。

*⁸ さらにいえば、限界点を状況や働きに限定すると、(32a) や (32c) のような例を扱えなくなる可能性がある。

5.2.3.2 Scalar implicature

「まあ」によって与えられるスケールを観察するにあたり、まず scalar implicature (Fauconnier 1975, Horn 1989) を導入する。

本論文では、ある二つの異なる表現の一方が他方よりも高い（低い）スケールを表している条件を Horn (1989: 231)^{*9}, Kay (1990: 63) に従い、次のように規定する。

(42) For distinct d_i, d_j in D_x , $P(d_i)$ entails $P(d_j)$ iff d_j is lower than d_i

(P = Propositional function, D_x = Domain of P , d_x = Members of D_x)

(Kay 1990: 63(i))

すなわち、ある異なる二つの表現について大小関係があるとき、またはそのときに限りその表現を含む命題間に一方的な含意関係があると考ええる。

これ以降、二つの命題間の含意関係 (entailment) を $p \rightarrow q$ 、推意関係 (implicature) を $p +> q$ と表す。(42) に従い、 $P(x) \rightarrow P(y)$ が成り立つことと、 x が y よりも同一スケール上で高いスケールを表すこと ($x > y$) は同義と考える。

- (43) a. 太郎の部屋はまぶしい。
 b. 太郎の部屋は明るい。
 c. 太郎の部屋はまぶしくない。
 d. 太郎の部屋は暗い。

通常、(43a) が成り立つ時、(43b) も成り立つ。従って、(42) より、明るさのスケールについては、「まぶしい」の方が「明るい」よりも高くなる。ただし、上記定義に従うと、(43b) は (43d) を含意しないので、「明るい」と「暗い」の間

^{*9} Quantitative scales are defined by entailment; P_j outranks P_i on a given scale iff a statement containing an instance of former unilaterally entails the corresponding statement containing an instance of the latter. (Horn 1989: 231)

のスケールを問うことはできない。また、(43b)の発話に対して、例えば(43c)という推意が生じる。この推意は Maxim of Quantity (Grice 1989: 26)に従うことで生じるとされる。

(44) Maxim of Quantity:

- (a) Make your contribution as informative as is required (for the current purposes of the exchange).
- (b) Do not make your contribution more informative than is required.

(Grice 1989: 26)

スケールの高い表現が低い表現を常に含意するとき、高い表現が“more informative”になる (Kay 1990: 66)。従って、(43a)について真であると確信しているにもかかわらず、(43b)を発したとすれば、(44a)に違反することになる。同様に、(43b)からは、(44)に従うことで、(43c)が推意として得られる。すなわち、以下のような関係が成り立つ。

(45) $P(x) \rightarrow P(\neg y) \ (x < y)$

この推意を scalar implicature と呼ぶ。現実には太郎の部屋がまぶしかったとしても(43b)は偽の言明にはならない。つまり、(43b)から生じうる推意(43c)はキャンセルが可能である。例えば、以下のような例が成り立つ。

(46) A: 君の部屋は明るいのか？

B: 明るいよ。実際まぶしくて勉強どころじゃないよ。

否定の環境では、肯定の環境とは逆の含意関係が成り立つ^{*10}。例えば、(47a)は常に(47b)を含意する。

^{*10} スケールの逆転については、Fauconnier (1975)を参照。

- (47) a. 太郎の部屋は明るくない
 b. 太郎の部屋はまぶしくない

すなわち、以下のような関係が成り立つ。

$$(48) P(\neg x) \rightarrow P(\neg y)(x < y)$$

それに伴い scalar implicature も逆になり、(49) のように表すことができる。

$$(49) P(\neg y) +> P(\neg\neg x)(x < y)$$

例えば次のような例が成り立つ。

(50) X: 君の部屋、まぶしくない？

Y: まぶしくないよ。勉強はかどるし。(+> 明るい)

スケールの定義を明確にするために本論文では強い定義を採用したが、スケールを含意関係だけで決定することに関しては議論がある。例えば以下の例を見てほしい。

- (51) a. 犬が歩く
 b. ポチが歩く（「ポチ」は、ある一匹の犬を指示する名前を表す）
 c. 哺乳類が歩く

「犬」とある個体「ポチ」は instance-of の関係にあり、また、「哺乳類」と「犬」は is-a の関係にある。上の命題間には一種の含意関係が認められる*11。すなわち、(51b) \rightarrow (51a)、(51a) \rightarrow (51c) という関係が認められる。しかし、「ポチ」 $>$ 「犬」という関係や、「犬」 $>$ 「哺乳類」という関係を認めるには、直感的にも難

*11 instance-of/is-a 関係に関しては 溝口他 (1999) を参照。

しい。個体（インスタンス）とその個体の集合であるクラスの間は、「*X*が明るい」と「*X*がまぶしい」との間にあるような意味的な連続性はなく、本質的にスケールという概念を当てはめることができない。本論文においてスケールを想定できる表現は、対象となる表現間に意味的な連続性がなければならないことを前提とする。

5.2.3.3 「まあ」の作用するスケール

本節では、「まあ」が後続表現に対して作用するスケールを観察する。特に「まあ」だけがもつ意味を抽出するために、「まあ」と形式・意味的に類似し、また、振る舞いも似ている副詞「まあまあ」を挙げ、二つの表現の差異についても言及する。

まず、肯定文の環境で「まあ」が現れた場合をみる。この場合、(52)のような分布を見せる。

(52) a. X: 君の部屋は明るい？

Y: {まあ/まあまあ} 明るいよ

b. Y': {??まあ/??まあまあ} 明るいよ。実際、まぶしくて勉強どころじゃない。

(52b) は (46) とは異なり、scalar implicature のキャンセルを明示的に表現することが難しくなるという現象が見られる。ただし、この振る舞いは「まあまあ」とも共通し、文意も大きく変わらない。つまり、「まあ」と「まあまあ」は scalar implicature のキャンセルを制限する。言い換えれば常に聞き手に対し「まぶしくはない」という推意を生成させる。次に否定の環境をみる。

(53) a. X: 君の部屋はまぶしくないか？

Y: {まあ / ??まあまあ} まぶしくない。

b. Y': {??まあ / ??まあまあ}まぶしくない。実際明るくなくて困ってる。

(53a) のように、「まあまあ」はそもそもスケールを持つような表現の否定と共起することができない。また、(53b) のように、scalar implicature を明示的にキャンセルするような環境においては「まあ」も「まあまあ」も生起することができない。肯定の環境と同じように、scalar implicature のキャンセルが制限される。

以上のように、肯定否定の環境に関わらず、「まあ」が付加されることによって、scalar implicature のキャンセルが制限される。スケールを持つ表現に「まあ」が付加されることで、常に当該表現より高いスケールの否定が推意として生じることになるので、「まあ」は共起する表現より高いスケールを指定できない。その結果、聞き手に対して、例えば「多く見積もって…」という解釈を促すことになり、消極的な評価としての意味合いを帯びることになる。これまでの観察から、「まあ」によってコード化される内容を以下のようにまとめる。

(54) a. 「まあ」が、ある要素に付加されることによって、その要素の持つスケールの上限が明示される。

b. その結果、「多く見積もって…」のような解釈となる。

5.2.4 発話行為緩和表現としての「まあ」

5.2.4.1 「まあ」による発話行為への作用

先行研究では先述したとおり、「まあ」の緩和表現 (hedge/mitigation) としての性質が挙げられる場合が多い。「曖昧性」から「発話の和らげ」への派生を仮定した富樫 (2004) の他に、Fukuda-Karlin (2003) では「まあ」の対人的な側面に注目し、“Reduction of Face threat”(Fukuda-Karlin 2003: 59) や、命令などの和らげ (Fukuda-Karlin 2003: 64) としての機能が挙げられている。しかし、一方で

Matsumoto (2001) は「ちょっと」の機能について考察しており、「ちょっと」をやはりヘッジと位置づけ、命令などの和らげなどに用いられるとしている。本節では、緩和表現としての「まあ」と「ちょっと」の差異について述べる。それとともに、「まあ」のスケールへの作用という性質が「概言」や「曖昧性」といった性質を「まあ」に持たせることを可能にすることを述べる。

5.2.5 「まあ」による発話行為への作用

まず、緩和表現としての「まあ」についてみる。ここでいう緩和表現とは、ヘッジ*¹²のような命題内容や発話行為の和らげとして機能する表現を指す。

Matsumoto (2001: 6) は、「ちょっと」に緩和表現としての機能があることを遂行動詞との共起関係によって示している。下の (55) のように、「ちょっと」を伴って「命令する」のような明示的な遂行動詞を伴って命令を宣言することはできない。しかし発話内効力が弱い動詞を伴って依頼を宣言することは可能である。

(55) a. ??{ちょっと/まあ}一週間の謹慎を命じます。

b. {ちょっと/まあ}ここ一週間は顔を出さないようお願いします。

(55) の場合、「ちょっと」を「まあ」に置き換えてもそれぞれの対立は変わらない。「まあ」を伴った命令は不自然だが、依頼をする環境では自然になる。

「まあ」がなぜ「発話の和らげ」として機能するのか論じるために、以下では「命令」と「依頼」の関係について再考する。本論文におけるスケールは (42) によって含意関係のみで定義されている。Searle (1969) における「依頼 (requesting)」の適切性条件は以下のように規定される。

*¹² 'Hedge' is a particle, word, or phrase that modifies the degree of the membership of a predicate or noun phrase in a set (Brown and Levinson 1987: 145).

(56) **Preparatory:** H(earer) is able to do A. S(peaker) believes H is able to do A.

Preparatory: It is not obvious to both S and H that H will do A in the normal course of events of his own accord.

Sincerity: S wants H to do A.

Essential: Counts as an attempt to get H to do A. (Searle 1969: 66)

「指令 (commanding)/命令 (ordering)」は (56) の全ての条件に下の (57) を加えることで成り立つ。

(57) **Preparatory:** S(peaker) must be in a position of authority over H(earer).

(Searle 1969: 66)

「指令/命令」は「依頼」の条件を常に含意しているので、命令行為が成り立つときは、依頼行為も常に成り立っていることになる。従って定義上「{指令/命令}>依頼」というスケールを考えることができる。また、本論文におけるスケールとは異なるが、発話行為にスケールを仮定したものとして Leech (1983) もある。そこでは、話し手と聞き手にもたらされる利益、もしくは負担の度合に応じて命令と依頼が関係づけられる「負担・利益の尺度」などが提案されている (Leech 1983: 178)。

そこで「まあ」を伴った「命令」に (54) を適用する。つまり、「まあ」をスケールを持つ発話行為に作用する形式として考える。「まあ」を伴った命令行為は少なくともその発話行為よりもスケールの低い発話行為に限定されることになる。その結果、命令を和らげることで自体が許されない文脈や状況では、「まあ」の使用は不自然になることが予測される。例えば、以下の例のように、聞き手に対する強制力が強く、和らげることができない場面では、通常「まあ」を付加することはできないと思われる。

(58) ?? 火事だ！まあ早く逃げろ！

同一スケール上にある(=一方が他方を含意する)発話行為について、「まあ」は(54)の性質から、その発話行為を和らげる機能を果たすことを示した。ただし、以上の例からは、「ちょっと」との差異を示すことができない。

5.2.6 「ちょっと」と「まあ」の差異

前節で示したように、「ちょっと」と「まあ」は緩和表現としての機能を共有する。このことは必ずしも「ちょっと」も(54)のような性質を持っていることを意味しない。以下では「ちょっと」と「まあ」の振る舞いの差について述べる。特に英語の緩和表現として知られる *I guess* (Brown and Levinson 1987) のような表現と機能的に対応すると思われる「まあ」の振る舞いに注目した。

(59) a. X: カレーの消費量が世界一の都市はどこだ？

Y: {まあ / ??ちょっと}ニューデリーだと思います。

b. Y': {まあ / ??ちょっと}ニューデリーだろう。

c. Y'': (その場で検索して) {??まあ / ??ちょっと}ニューデリーです。

d. Y''': {??まあ / ちょっと}知りません。

e. Y''': {??まあ / ちょっと}なにそれ？

上記例では、「まあ」と「ちょっと」の分布に差がみられる。話し手(Y)の知識状態に注目すると、以下の場合において「まあ」との共起が不自然となることがわかる。

- 発話時において、当該命題についての知識がある場合 (59c)
- そもそも要求された情報に対する知識がない場合 (59d), (59e)

逆に「まあ」が使える環境は、話し手の100%確実ではない、推論の結果得られたような信念について述べるときに限られる。話し手が真であることを知っている情報を最大とする知識状態のスケールを仮定すると、「まあ」によって示されるのは、最大点ではなく、それ以下の範囲、すなわち多く見積もれば最大となる範囲と考えられる。その結果「必ずしも正確ではない情報」が「まあ」によって示されることになる。いわば、「まあ」は話し手の確信の度合を反映するといえよう。しかし、「ちょっと」はスケールへの作用とは無関係のため、話し手の確信の度合に関して言及することはできない。「まあ」が「概言」や「曖昧性」という機能を持つのは「まあ」のスケール作用性が関わっていると考えられる。

以上より、本節では「まあ」が緩和表現として機能すること、そして、他の緩和表現とは振る舞いが異なること、さらに、「まあ」は話し手の確信の度合を反映することを指摘した。

5.2.7 応答表現としての「まあ」

依頼に対して同意（もしくは拒絶）するような行為に対しても「まあ」の持つ(54)の性質があてはまる。

(60) a. X: 忙しいところ申し訳ないのですが、明日の会議に代わりに出ても
らえませんか?

Y: まあいいです(よ)。

b. Y: ??まあいやです。

(60)のような例でみられる「まあ」は川上(1993: 72)において「消極的肯定」などと呼ばれているケースである。依頼に対して聞き手が行う選択は同意するかないかの二値に限られるわけではなく、その間にスケールがあると考えることが出来る。(60)に(54)を適用すると次のように分析できると思われる。すな

わち、「まあ」は完全な同意を最大値とするスケールに作用する。従って「まあ」によって「同意はできるが100%同意できるわけではない」という解釈を得られることが予測される。

しかし(60b)は不自然に感じられる。通常依頼者は、同意できるか、同意できるなら条件付きで同意できるのか、無条件で同意できるのかについて期待する。依頼者は依頼される側がどの程度同意できるのかについて期待しているのであって、どの程度拒絶するのかについては期待していない。従って、(60b)の不自然さは拒絶のスケールについての言及が語用論的に期待されていないことから生じると思われる。

5.2.8 副詞的な「まあ」の性質

本5.2節では、副詞的に振る舞う「まあ」は scalar implicature のキャンセルを制限することで、作用するスケールに対して上限を与える性質を持つことを述べた。上のような性質から、「まあ」は適切な環境もしくは文脈が与えられると、それに応じた機能を果たすことができる。例えば、形容詞など程度を表す表現と共起すれば、その表現の程度に作用し、ある発話行為と共起すれば、その発話行為の持つスケールに作用して、緩和表現としての機能を果たす。さらに、「まあ」を伴って、話し手の主観的な判断などが表明される場合についても、その判断が確実なものではないことが聞き手に伝わるのが、「まあ」の持つ性質から予想される。

次節では、緩和表現としての「まあ」が談話中において果たす役割について文末表現との共起関係を観察することで明らかにする。

5.3 「まあ」の談話中における役割

「まあ」は5.2.5節において、命令-依頼という発話行為のスケールに作用し、その程度を和らげる緩和表現的な機能を帯びるとした。以降では、主に「まあ」

と文末形式との共起関係をみることで、緩和表現的な「まあ」と談話の情報構造との関わりについて議論する。

5.3.1 「まあ」と文末形式との共起

5.3.1.1 疑問文

前節では「まあ」が発話行為の緩和表現として振る舞うことを示したが、全ての発話行為を和らげるわけではない。例えば、以下のように聞き手に対して質問をするような場合、「まあ」は緩和表現として振る舞わない。

(61) A: 太郎は去年大学を卒業してからというもの音沙汰がないんですよ。

B: {?? まあ／まあ_j}、太郎は大学を卒業していたのですか？

C: そうですね。知りませんでしたか？

(61) の場合、「まあ」は話し手の情動的な変動を表す「驚き」として解釈することは可能である。このような「驚き」を表す「まあ」を以降では「まあ_j」と表記する*13。しかし、(61) は質問という行為の和らげとしては解釈できない。質問と共起する緩和表現としては *wouldn't it, ok, right* のような “tag” や *you know* などに見られる “confirmation of a previous claim” (Erman 2001: 1340) などが挙げられる。このため、質問／疑問文自体は緩和表現との共起は可能だが、「まあ」に関していえば、質問との共起はできないということになる。

質問は、質問者にとって、真偽が確定していない情報について、相手が当該情報の真偽を知っていると質問者が想定しているときになされる。この時、質問と共起した「まあ」を緩和表現として解釈することはできない。このような場合は、質問者にとっての新情報獲得の際の情動変動、すなわち、驚きを表す「まあ_j」として解釈される。

*13 「まあ」と「まあ_j」の間には何らかの関連性があるかもしれないが、本論文は機能を異にする別形式とする。富樫 (2004) など両者の関連性についての議論もあるが、本論文では少なくとも、両者の共通性を主張する積極的な証拠が見つからないため、別形式としておくこととする。

また、話し手が知識として当該情報を持っていないことを宣言するような場合は「まあ」は不自然となる。

(62) X: カレーの消費量が世界一の都市はどこだ？

Y: ??まあ知りません。 ((59d)を再掲)

すなわち、話し手が知識として持っていない情報について「まあ」を使って言及することができないということになる。

5.3.1.2 モーダル述語

次に「まあ」とモーダル述語との共起関係を観察する。モーダル述語とは、構造的には「テンスの区別がある節を項として、節の主語と共起制約関係をもたない語類」(田窪 2006: 44)を指す。具体的には「らしい」「ようだ」「だろう」「かもしれない」などが含まれる。機能的にはいずれも「話し手の認識的な判断」(森山 1989: 61)を表す。しかし、「らしい(ようだ)」と「だろう(かもしれない)」はそれぞれ話し手の推論の仕方が異なると言われている。田窪(2006), Takubo(2007)によると、両者の差異は次のように記述される。

- (63) a. ダロウ類は大前提となる条件的知識 $p \supset q$ から、小前提となる知識 p が与えられたとき、推論により非可視領域方向、すなわち、発話現場から離れた状況、未来状況、仮装状況である q を構築する際につけられる。すなわち、肯定式 (modus ponens) を使った deduction につけられる。このとき、 p 自身も非可視的な知識であってよい。
- b. ヨウダ類は反対に条件的知識 $p \supset q$ (多くの場合、因果的な知識) と眼前の現実 q から、眼前でない現実からの反映 p として見る形の推論、すなわち abduction につけられる (Takubo 2007)

この差異は次のことを意味する。すなわち、「らしい」は「結果からそれが生じた原因を考える」という点で、「だろう」とは推論の方向が逆になる」(田窪 2006: 62)*¹⁴。

その結果得られる解釈は次の通りである。「ダロウ類は、前提となる状況から投射できるある非可視領域の状況がどういう性質を持つか叙述する」一方で、「ヨウダ類は現在の状況がどのような性質を持つものかを叙述するものと考えることができる」(田窪 2006: 68)。例えば、以下のような差として現れる。

(64) 文脈: 前の恋人と別れて7年になるが、
彼女はまだ結婚した{だろう／＃らしい}。 (田窪 2006: 63 (44))*¹⁵

(65) 文脈: 卒業名簿を見たら、みちこの姓が変わっていた。
彼女はまだ結婚した{＃だろう／らしい} (田窪 2006: 62 (42))

「まあ」が単純に概言(川上 1993)や曖昧性(富樫 2004)、判断の和らげと考えるのであれば、話し手の認識的な判断を示すモーダル述語との共起関係に制限は生じないはずである。しかし「まあ」は「だろう」と共に用いられることは自然だが、「らしい」との共起は不自然になる場合がある。

*¹⁴ 田窪 (2006: 64) によると、ヨウダ類とダロウ類とでは、推論の方向性が逆であるという考え方は大鹿 (1994: 534) でも指摘されている。田窪 (2006: 64) はさらに「のだ」が推論の方向を逆にする標識であることを基に、「の」を前置した「のだろう」「のかもしれない」についても「らしい」と同様に推論の方向を逆転させることを指摘している。例えば以下のように「らしい」が現れる環境で「のだろう」の使用が可能となる。

(v) 文脈: 卒業名簿を見たら、みちこの姓が変わっていた。
彼女はまだ結婚した{らしい／のだろう} (田窪 (2006: 65 (42))
なお、この例は「のだろう」についてのみ「まあ」の付与が自然である。

(vi) 文脈: 卒業名簿を見たら、みちこの姓が変わっていた。
まあ、彼女はまだ結婚した{??らしい／のだろう}
田窪 (2006) が指摘するように「のだろう」と「らしい」は同じではない。「ダロウ類はあくまであたたと与えられた情報から推論により、未知の帰結を導出するのであり、ヨウダ類はそうではない(中略)ヨウダ類は、眼前の現実を眼前でない現実からの反映として見る形の推論である」(田窪 2006: 68)。従って、(vi)において、「のだろう」に「まあ」が許されるのは、「のだろう」であっても、そこで行われている推論は話し手自身しか知り得ない未来的状況、仮想状況構築に変わりはないからであると考えられる。

*¹⁵ (64)、(65)の例文は森本 (1994: 90 (19), (20)) から引用された例文である。

(66) 君と親父とはどうかしらんが、母親とは**まあ**うまく行くだろう。

(『築地河岸』)

(67) 文脈: 卒業名簿を見たら、みちこの姓が変わっていた。

{?? まあ／まあ_j} みちこはもう結婚したらしい。

「らしい」は発話時における「眼前の状況」から話し手が判断をする際に用いられる。眼前の状況とは、すなわち、他人と（例えば視覚的に）情報を共有することが可能な現実の状況が含まれる。そのような状況では「まあ」の生起は不自然となり、逆に、「まあ」は話し手の知識をもとに推論を行うことが明示される環境において、使うことができる。ただし、(67)の「まあ」は情動変動を表す「まあ」と解釈すると自然になる。逆に(66)を「まあ_j」と解釈することはできず、モーダル述語の種類によって、「まあ」の解釈がどちらか一方に制限されることが観察される。

5.3.1.3 終助詞

「まあ」の分布は、共起する終助詞の種類によっても変化する。本論文では特に「ね」と「よ」に注目した。以下の(68)は「まあ」が「ね」、「よ」とそれぞれ共起させた例である。

(68) a. (机の上のパソコンを見て)

{?? まあ／まあ_j} 新しいパソコンを買いました**ね**

b. A: パソコン、壊れたそうですが、修理に出したんですか？

B: もったいないとは思いましたが、{まあ／?? まあ_j} 新しいのを
買いました**よ**。

「ね」と「よ」の違いについて述べた研究の一つとして益岡(1991)が挙げられる。益岡(1991)に従えば、(68a)の「ね」は、「話し手の知識と聞き手の知識が基

本的に一致すると判断される場合」(益岡 1991: 96)に用いられる「ね」である。この時、文頭の「まあ」は「まあ_j」としか解釈できない。一方で、(68b)で用いられるような「よ」は、「文の情報内容を聞き手が知らないだろうという話し手の想定」(益岡 1991: 96)があることが前提となる。この場合の「まあ」は「まあ_j」と解釈することはできない。

ただし、「ね」に関しては益岡 (1991) のように、話し手が聞き手の知識を鑑みるような記述は不十分であることが Takubo and Kinsui (1997) によって指摘されている。例えば、以下のような例は A と「ね」を用いる B とでは明らかに現在時刻に関する知識についてギャップがある上、B もそのことを知っているはずである。従って益岡 (1991) の記述では説明できない。

(69) A: 今何時ですか？

B: 3時ですね。 (Takubo and Kinsui 1997: 755)

Takubo and Kinsui (1997) では (68a) も (69) の場合も「ね」は話し手が“mental computation for verification”を行っていることを示す標識であると分析される。また、(69) は緩和表現的な「まあ」の付加が可能である。(68b) と同じ文脈で、「よ」の使用も自然な (70) でも、「まあ」は自然となる。

(70) A: パソコン、壊れたそうですが、修理に出したんですか？

B: 買いました。まあ、仕方がないです{ね/よ}。

すなわち「まあ」に関しては、同じ「ね」でも、(68a) のように話し手が聞き手との間で知識共有が可能な状況にあると想定している場合は「まあ_j」のみが許され、(70) のように、「ね」も「よ」も可能な、話し手と聞き手との間に知識のギャップがあると話し手が想定する状況では、緩和表現的な「まあ」しか許されない。

5.3.2 話し手の情報状態と「まあ」

これまでの観察をまとめると以下のようなになる。

- (71) a. 緩和表現としての「まあ」は話し手と聞き手が情報を共有できる環境では生起できない。また、話し手が知識として持っていない情報について「まあ」を用いて言及することができない。「まあ」を用いて言及可能な情報は話し手だけが持つ（と話し手が想定する）情報に限られる。
- b. 「まあ_j」は緩和表現的な「まあ」とは逆の分布を示す。すなわち、聞き手と共有可能な情報、もしくは、聞き手が持つ（と話し手が想定する）情報について言及する際に使用することができる。

5.4 「まあ」と「ま」型フィラー

前節では、緩和表現として副詞的に振る舞う「まあ」について、主に二点について議論した。まず、「まあ」は程度を表す表現や発話行為と結びついて、それらの表現の持つスケールの上限が示されると記述した。その結果、緩和表現的な解釈が得られることを指摘した。二点目として、緩和表現としての「まあ」は談話において、話し手が聞き手にとって未知であると想定している情報を提供する際に用いられることを述べた。本節では、「まあ」の緩和表現としての性質および新情報提供標識としての振る舞いと「ま」型フィラーとの関係について考察する。

5.4.1 ケド節と「ま」型フィラー

まず、実際の自然談話の中で現れた「まあ」について見てみる。次の例はCSJの一部である*16。

*16 太字と下線は筆者による。

- (72) あのー **ま** 父親がですね あのー **まー** 今の JR 東日本 えー かつての日本国
有鉄道と言ういわゆる国鉄の **まー** 職員だったということもありまして
えー **まー** 県内 新潟県内です けれど **ま** 転居しました。

(国立国語研究所 2004: S01M0950)

副詞的に振る舞う「まあ」とフィラーとしての「まあ」は連続的であり、厳密な区別は難しいと思われる。しかし、(72) の発話は全体的に事実が述べられており、そこで現れる「ま」や「まー」が、話し手の判断の程度など、何らかのスケールに作用しているようには見えない。「ま」、「まー」を取り除いたとしても、(72) の解釈は変わらない。そのため (72) における「まあ」は副詞的な「まあ」とは考えづらい。かつ、音調的な観点からも、焦点アクセント等を伴うことがない点において、(72) の「まあ」は典型的なフィラーであると考えられる。

このような「ま」型フィラーは「けど」を伴う節が後続する場合がある。(72) における「まー県内 新潟県内ですけど」の他にも、以下のような例が挙げられる。

- (73) a. 例えば東京球場の後に神宮球場とか後楽園球場とか色んな野球場 **まー**
東京です けど 近いところ行きました。

(国立国語研究所 2004: S09M0986)

- b. 出直してこいとかいう風なことを言われたりして えーと **ま** 演奏の
技術もそうです けども それに対する姿勢というものが非常に問われ
る毎日でした。

(国立国語研究所 2004: S05F0463)

上記例のような、談話中に挿入されたケド節について扱った研究として、例えば、Nakayama and Nakayama (1997) がある。Nakayama and Nakayama (1997) によると、(73a)、(73b) に現れるケド節は談話の“Background clause”を形成するとされ、談話において次のような機能を果たすと分析されている。

(74) a. The non-contrastive *kedo*-clauses in our narrative data serve to provide background information for the main line of the narrative.

(Nakayama and Nakayama 1997: 612)

b. *Kedo* serves to mitigate the force of illocutionary acts in order to maintain harmony among speakers. (Nakayama and Nakayama 1997: 614)

例えば、(73a)では、「色んな野球場」という主張が、ケド節によって、「東京限定の色んな球場」に弱められ、(73b)では「演奏技術は全く必要ない、というわけではない」という内容が付加されることで、「演奏の姿勢が重要である」という主張が条件付きの主張として弱められている。

「けど」が(74)のような機能を果たすとすれば、ケド節に前接するフィラーの「まあ」は談話の“Background information”の導入部として挿入されていると考えることができる。「まあ」自体はフィラーである以上、それ自体では意味機能をもつことはない。“Background clause”を構成する主要な要素として「けど」は振る舞うが、「ま」型フィラーの存在は選択的であり、副次的である。しかし、「まあ」は副詞としては緩和表現としての側面をもち、それが、「ま」型フィラーと連続的な関係を持っていると考えれば、「ま」型フィラーとケド節と共起することは不自然ではない。ケド節が果たす「主張の弱め」と「まあ」の持つ緩和表現としての機能は矛盾しない。いわば、ケド節が果たす「主張の弱め」に「ま」型フィラーが間接的に寄与していると考えられる。すなわち、ケド節は「ま」型フィラーと共に“Background clause”を形成し、発話全体の主張を弱めるという談話的な機能を果たしている。

以上の「まあ～けど」の共起パターンは、経験的には自然に感じられるが、義務的ではないので、実際に高い頻度で生じるかどうかは自明ではない。そこで、「まあ」もしくは、ケド節の生起数に対して、「まあ～けど」のパターンが実際にどの程度現れるのか定量的な観察も行った。

話し言葉は文境界が曖昧なため、「文」や「節」という概念を使って、構造的に「まあ」と「けど」をひとまとまりとみなす基準を設けることが難しい。係り受け情報などを手がかりにすることは可能だが、CSJに、そのような情報が付与されているのは一部のデータに限られる。また、話し言葉について既存の構文解析器をそのまま適用しようとしても、精度に問題が残る。そこで近似的に「まあ～けど」の連なりを計数するために、CSJ、Billboard Corpusで採用されている発話単位である「転記基本単位」を利用した。「転記基本単位」とは0.2秒以上のポーズによって挟まれた音声の範囲である(小磯他 2004: 1)。本論文では、「ま」型フィラーと同一転記基本単位内で最も近くに出現する「けど」を一つのまとまりとして考え、「ま」型フィラーと「けど」との共起関係を認定することにした*17。

「けど」と比較するために次の条件に当てはまる形式として理由などを表す「から」との共起頻度も同様に計数した*18*19。

- CSJで「けど」と同じ接続助詞と分析されている形式であること
- 「けど／けれど」と同様に主節に挿入される形で付加されやすく、また、主節に対して後置されやすい

「まあ」と「から」が共起する例としては、例えば以下のような発話が相当する*20。

*17 「けど」を計数するに際して、「けど」もしくは「けれど」にマッチする文字列を対象とした。

*18 CSJで接続助詞と認定されている表現は頻度の高い順に「て」、「と」、「が」、「けど」、「けれど」、「から」、「ば」、「で」、「し」、「ながら」などである。

*19 計数するにあたっては、接続助詞と認定されている「から」とマッチする文字列を対象とした。これにより格助詞「から」と区別することが可能となる。ただし、意味的に類似する「ので」は対象外とした。CSJでは「ので」は「準対助詞」+「助動詞」と認定されており、「～のではない」における「ので」も同様に分析されている。そのため単純に品詞情報と言語形式とのマッチングだけで計数すると、理由を表す節を構成する「ので」以外の「ので」も抽出してしまうため除外することにした。比較方法については諸々の問題は残るが、ここでは「まあ」と共起する接続助詞同士を比較することで「まあ」と「けど」の共起関係の定量分析を行う。

*20 現状では以下のような「けど」と共起しているとも考えられる例も「から」と共起した例として含まれてしまうため、今後は文末表現を意識した抽出法を考えるか、係り受け関係を細かく見るかする必要はあ

(75) a. (F ま) 僕も (F お) 人口減らした一人ですから (S03M0096)

b. (F まー) ちょっと部長は大阪の人間だったもんですから (S01M0450)

ケド節もカラ節も主節に挿入もしくは後置される形で付加されることが多い。「ま」型フィラーはそもそもこのような挿入的な節で現れやすいフィラーであるという可能性もある。そこで「ま」型フィラーと文末、すなわち主節末との共起頻度も計数し、ケド節・カラ節との共起頻度と比較した。ここで対象とする主節はいわゆる判定詞「た／だ」、「です／ます」もしくは「う」*21を末尾にもつIPUと定義し、「ま」型フィラーとの共起頻度を計数した*22。なお、品詞情報はCSJのみ付与されているので、計数対象はCSJに限定した。

次に分析方法について述べる。ケド節とカラ節および主節の頻度は異なり、当然主節の数が圧倒的に多い。そのため単純に「ま」型フィラーとの共起数は比較できないと考えた(表5.1参照)。そこで「けど」、「から」の頻度と「まあ～けど」、「まあ～から」の頻度を各データごとにそれぞれ計数し、以下のように正規化して比率の平均値を比較することとした。

- 接続助詞「けど」の生起における「まあ～けど」の割合 = 「まあ～けど」の頻度 / 「けど」の頻度
- 接続助詞「から」の生起における「まあ～から」の割合 = 「まあ～から」の頻度 / 「から」の頻度

る。

(vii) (F まー) だからそういう意味でタイトルは二十一世紀だから何なんだっていう話なんですけど (S11M1270)

*21 CSJでは「た／だ」、「です／ます」、「う」は助動詞と認定されている。

*22 当然、この定義では網羅性が犠牲になっている。例えば、終助詞「ね」なども主節末になる可能性がある。だが「ね」は「けどね」が可能だけでなく、文節末に生起する可能性もある。そもそも文末／文節末の厳密な定義は非常に難しい。ここでの目的は「ま」型フィラーが文末／主節末に現れやすいのか、ケド節で現れやすいのか傾向を比較することであり、少数の例外については傾向に影響を与えないと判断し、比較を行った。

表 5.1 「まあ」とケド節との共起 (個数)

	CSJ 独話 (n=2,702)	CSJ 対話 (n=58)
「まあ」	76,219	944
「けど」	43,067	930
「から」	12,974	458
主節末	122,615	791
「まあ～けど」	6,798	103
「まあ～から」	1,156	35
「まあ～主節末」	5,460	18

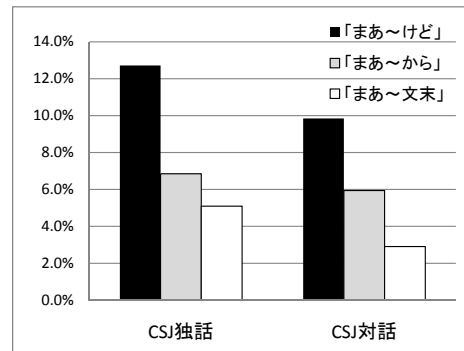


図 5.1 「まあ」と接続助詞との共起 (平均比率)

- 主節における「まあ～主節末」の割合 = 「まあ～主節末」の頻度 / 「主節末」の頻度

各比率の平均値を図 5.1 に示す。それぞれの比率には差がないと仮定して、クラスカル・ウォリス法を用いて比較したところ、CSJ 独話資料、CSJ 対話資料ともに $p < 0.05$ 水準で有意な差となった。多重比較 (マン・ホイットニー検定) においては、CSJ 対話資料におけるカラ節と主節末の比率に大きな差が見られなかった ($p < 0.1$) ことを除いて、他の比較においては $p < 0.05$ 水準で差が見られた。

以上の比較の結果、「ま」型フィラーはケド節やカラ節といった挿入的な節において頻出することが明らかになった。さらにカラ節と比較し、「ま」型フィラーはケド節と共起しやすいことも明らかになった。すなわち、ケド節の持つ「主張の弱め」という機能と「ま」型フィラーの振る舞いは共通する部分があり、互いに調和しており、頻度という観点からもそれが裏付けられたと考えられる。

5.4.2 対話の種類と「ま」型フィラー

本節では、「まあ」が、話し手と聞き手が情報を共有可能な環境では現れにくいという点に関して、「ま」型フィラーについても、その性質が保持されている

表 5.2 CSJ: 対話資料におけるフィラー (表 3.6 再掲)

	対話全体	インタビュー	課題指向	自由対話
データ数 (個)	58	26	16	16
時間 (秒)	43,774	19,831	11,041	12,902
指示詞型 (個) *	1,450	911	71	468
「え」型 (個)	922	535	180	207
「ま」型 (個)	944	626	48	270
その他 (個) †	1,487	520	466	501
合計 (個)	4,803	2,592	765	1,446

* フィラーのカテゴリーは 3.4.1 における定義に基づく。

† 指示詞型、「え」型、「ま」型、および応答表現を除外したフィラーの個数。

ことを、CSJ 対話資料の分析を通して明らかにする。

3.3.3 節で示した CSJ 対話資料における「ま」型フィラーの分布には次のような、いくつかの特徴があった。

- (76) a. ポスター会話 (Billboard Corpus) と比較すると、CSJ 対話資料では「ま」型フィラーの生起数が少なかった。
- b. 「インタビュー」、「課題指向対話」、「自由対話」のうち、最も「ま」型フィラーの頻度が少なかったのは「課題指向対話」であった (表 5.2)。

本節では特に (76b) の特徴に注目する。同じ対話形態でも、「インタビュー」と「課題指向対話」では、対話の状況や目的が大きく異なる。各対話形態の説明については、3.2.2.2 で述べたが、改めて簡単に説明する。

「インタビュー」は、インタビューされる人 (インタビューイー) が事前に行った講演 (学会発表 / 模擬講演) に対するインタビューである。インタビュアーは講演の感想について聞いたり、講演内容に関する質問を行い、インタビュイーがそれに答えるという形態である。

「課題指向対話」は「インタビュー」の時と同じペアが次の作業を共同で行うものである。1. 双方に著名人のリスト、もしくは人名リストが用意されてい

る。2. 著名人の名前と顔を二人で相談しながら一致させる。3. 同定した著名人をギャラ（講演料）の高い順に並べる。なお、お互いが同じ写真リストを渡されている場合と、一方には人名のリスト、他方には写真のリストが渡されている場合がある。双方は顔は見えるが、相手のリストは見ていない。

次にそれぞれの対話の特徴を述べる。まず、インタビューの場合、インタビュアーとインタビューイーとでは発話量に差がある。一般的にインタビュアーの発話が相対的に少ないと考えられる。CSJ対話資料においても同様にインタビュアーの発話時間が、インタビューイーと比べて短かった（図5.2）^{*23}。インタビューという対話形式は、インタビュアー側が聞き手役となり、インタビューイーが質問に答えるという形をとる。未知の情報を要求するインタビュアーに対して、インタビューイーが一方的に情報を提供する形態である。その意味において Billboard Corpus と共通する。そのため、インタビューイーの発話内容は、「説明」、「報告」、「感想」が多い。

一方で、課題指向対話は、互いが写真やリストを見て相談しながら対話が進められる。そのため双方の発話量に大きな差はない。「相談」という形態故に、参与者間において対話に関連する情報量に偏りはあまりない。双方の情報の流れも一方的ではなく、相互的であるという特徴がある。

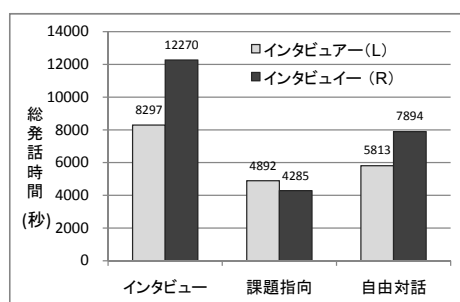


図 5.2 各対話形式の参与者の発話時間

以上の特徴を踏まえ、各対話ごとに現れた「ま」型フィラーの計数を行った。CSJ対話資料の16名のインタビューイーについては、CSJ独話資料においてもその講演内容が収録されている。この16名の中で、独話（講演）で特に「ま」型

*23 発話時間は転記基本単位が「0.2秒以上のポーズを含まない発話が行われている時間」であることを利用して、各話者の転記基本単位時間数を合計することで算出した。

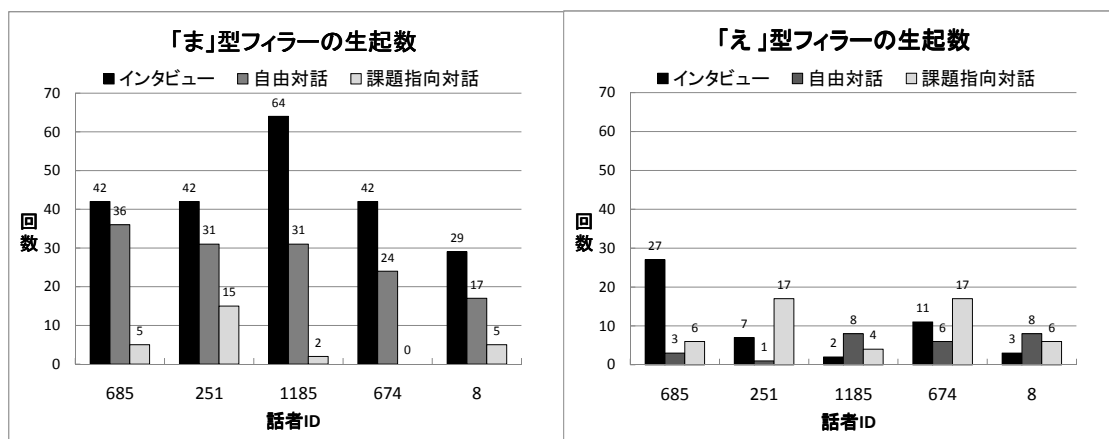


図 5.3 CSJ 対話資料における話者ごとの「ま」型フィラー/「え」型フィラーの生起数

フィラーを発していた（＝「ま」型フィラーを言う癖のある）上位5名を選び、対話の形態別の「ま」型フィラーの生起頻度を計数した。

その結果を示したものが図 5.3 である。比較のため、同じ話し手による「え」型フィラーの頻度も示した。なお、インタビュアーのフィラーは計数対象外とした。

図 5.3 が示すように、インタビューにおける「ま」型フィラーの頻度は高くなっている。しかしインタビューで「ま」型フィラーを頻繁に発する話し手でも、特に課題指向対話では、「ま」型フィラーの頻度が低くなることが図 5.3 から観察された。しかし「え」型フィラーに関しては、対話の形態による影響はみられなかった。

「インタビュー」は一方が常に新しい情報を提供し、双方で前もって共有されている情報は限られている。それに対して「課題指向対話」は、対話の目的が事前に設定されており、かつその目的が双方で共有されている。そのためどちらかが、一方的に情報を与えるという状況が成立しづらい。さらに、写真が双方に渡されている場合は、視覚的な情報が共有されていることになる。

この対話形態の違いによる、「ま」型フィラーの分布の違いは、(71) で述べた緩和表現的な「まあ」の性質と合致する。すなわち、「まあ」は聞き手に対して

新しい情報が提供される環境で使用することが可能で、逆に、聞き手との情報共有が想定される環境では使用できないという性質は、一方的な情報提供が行われやすいインタビューにおいて「ま」型フィラー相対的に頻出し、それに比して、情報のやりとりが相互的な課題指向対話では「ま」型フィラーがあまりみられないという観察結果と並行的である。

5.4.3 聞き手と「ま」型フィラー

本章の観察から、副詞として振る舞う緩和表現的な「まあ」と「ま」型フィラーの間にはある程度のつながりがあることがわかった。いずれも、話し手の主観的判断や、推論結果も含めて聞き手とは共有されていない新しい情報を話し手が提供しようとする際に発せられるという共通点が見いだされた。フィラーとしての「まあ」も発話の和らげとして振る舞うといわれるケド節と自然と共起する点において、副詞的な「まあ」との連続性がみられた。

本節では、以上の点と、これまで得られた「ま」型フィラーの観察結果との関係について考察する。まず、これまでの「ま」型フィラーの観察結果をまとめておく。3.4において、独話、ポスター会話、対話に出現する「ま」型フィラーを比較したが、その結果、ポスター会話において、「ま」型フィラーの頻度が有意に高いことが明らかとなった。もう一つは、4.7節において、「ま」型フィラーは「え」型フィラーと同じく、その発話時に相手から目がそらされることが多く、自己指向性の比較的強いフィラーであると位置づけた。この両者の性質は、不整合にみえる。自己指向性が強いのであれば、「ま」型フィラーは「え」型フィラーと同じく、ポスター会話よりは、講演のような談話形態で頻出することが予想される。さらに、独話（講演）もポスター会話も、聞き手に未知の情報を提供することが期待される形態である。現実には、「ま」型フィラーは聞き手との関わりが求められるポスター会話で頻繁に観察される。この点に関して、原因を説明できる決定的な証拠を提出することはできないが、これまでの観察結

果から次のように考えることができる。不特定の聞き手を相手にする独話と違い、対話にしる、ポスター会話にしる、特定の聞き手とやりとりをする談話は、その参加者が発話を通じて互いの共有する知識を蓄積してゆく共同的な営みである*²⁴。そのため、話し手は常に聞き手の知識について勘案しながら発話することが必要となる。「ま」型フィラーの頻度が聞き手の情報状態によって左右されるという観察結果から、「ま」型フィラーは知識を勘案すべき特定の聞き手が存在する環境を要求するフィラーであるといえる。そのために、不特定の聞き手を相手にする独話と比較すると、ポスター会話の方が、「ま」型フィラーの表出には適した環境であると考えられる*²⁵。

5.4.4 英語のフィラーと「ま」型フィラー

最後に、これまで見てきた「まあ」の性質について、関連する英語のフィラー相当の形式と比較することで、双方の共通点および相違点について議論する。特に、「ま」型フィラーとその振る舞いに類似性が見られた *I mean* と *well* に注

*²⁴ このような談話の見方に関しては、Clark and Brennan (1991), Clark (1993, 1996), 高梨他 (2007) を参照。たとえば、Clark (1993: 5) は、次のような談話のモデルを提案している。

- (viii) (1) The participants in a conversation work together against a background of shared information.
 (2) As the discourse proceeds, the participants accumulate shared information by adding to it with each utterance.
 (3) Speakers design their utterances so that their addressees can readily identify what is to be added to that common ground.

Clark は会話において共有情報 (common ground) が適切に蓄積されていく過程を grounding(基盤化 (高梨他 2007)) と呼んでいる。会話は通常、次のようなことが観察される。

- 聞き手の注意 (聞き手からの視線など) が話し手に向けられる
- あいづちやうなずきが挟まれる
- 適切にターン交替が行われている

これらは、会話において基盤化が行われている肯定的な証拠である (Clark and Brennan 1991: 131)。逆に、聞き手が聞き損ないや誤解をしてると話し手が判断すれば、話し手はそれを放置せず、言い直すなど修復を行うことが観察される。このような現象は、会話で基盤化が行われている消極的な証拠である (Clark and Brennan 1991: 131-132)。

*²⁵ 山根 (2003: 229) では、「講演と対話という話し手と聞き手が物理空間を共有する談話に「マ (-)」が多い」と指摘されているが、本論文では少し異なる結果となったといえる。確かにポスター会話のような状況では「ま」型フィラーは頻出するが、同じく物理的空間を共有していると思われる課題指向対話では「ま」型フィラーは少ない。対話の種類によっても、「ま」型フィラーの頻度は異なるのである。「物理的空間の共有性」以外に本論文では話し手と聞き手の知識状態の差異が重要であると提案する。

目した。

5.4.4.1 *I mean*

Schourup (1985: 147) では、*I mean* は「話し手のみが知る情報 (private world) と話し手も聞き手も利用可能な情報 (shared world) が一致しないことを示す」とされる。Schiffrin (1987) でも、*I mean* と、談話参加者の情報状態の関係が指摘されている。*I mean* は話し手自らの情報に対する「確からしさ (certainty)」や「卓立 (salience)」といった、話し手自身の情報に関してマークする標識であるとされる。その結果、*I mean* は話し手が自身の考えや意図を修正する際に現れたり、話し手の発話に対して、聞き手の注意を引き続けさせることを助ける標識として実現する (Schiffrin 1987: 309)。例えば Schiffrin (1987) では以下のような実例が観察されている。

(77) a. But he still carries it on and becomes sickening-sickening when y'see it,
see. **I mean** he's sick, from that (Schiffrin 1987: 302 (42b))

b. (話し手がなぜ白黒テレビが好きかについて力説している場面)

We don't have color T.V. and I don't *want it!* I:–**I mean** uh I jus–**I mean**
if somebody offered me one. could use another T.V. I would take the black
and white! (Schiffrin 1987: 306 (44))*²⁶

上の例のように、*I mean* は話し手がその前に述べたことを修正する時などに現れる。話し手自身の情報が提示されるという点において *I mean* と「まあ」はその振る舞いが相似すると考えられる。

「話し手の考えや意図の修正」という点に関しては、5.4.1 で述べた「まあ…けど」と同様の振る舞いを見せる。

*²⁶ Schiffrin (1987) のデータの表記法に沿って引用した。本論文では特に問題にならないのでその説明は省略する。

(78) 例えば東京球場の後に神宮球場とか後楽園球場とか色々な野球場 **ま**—
東京ですけど 近いところ行きました。

(国立国語研究所 2004: S09M0986)((73b)を再掲)

上の例のように「まあ」によって前言が撤回／修正されるケド節が導入される場合があることは5.4.1で議論したとおりである。「前言の修正」という *I mean* との共通の振る舞いは、*I mean* と「ま」型フィラーが本質的に聞き手の知識については言及しないという共通点と関わるものであると考えられる。

5.4.4.2 *well*

「まあ」と *well* との類似性については、Schourup (2001: 1048)でも指摘されており、実際 *well* が「まあ」と翻訳されることも多いという。Schourup (1985, 2001)の議論はすでに2.4.2で紹介しているが、改めて簡単に述べる。Schourup (1985: 67)では、*well*の本質は“indicating speaker’s current consultation of the private world”とされ、Schourup (2001)では、*well*は、言語的な意味を伝えない代わりに話し手が思考を行っているという状態を聞き手に伝える標識であるとしている。「ま」型フィラーも他のフィラーと同じように話し手が思考状態にある時、表出されることがある。

(79) A: なんでその、セメントに興味を持ったんですか？

B: まあ 为什么呢ね

(国立国語研究所 2004: D03M0053)

1.6 秒

ただし、「ま」型フィラーが表出されるのは話し手が話し手自身しか知り得ない事柄について判断や計算をしている場合に限られる。例えば、話し手自身の意見や感想が述べられるような文脈が想定される。

(80) a. (Aが50人から成るBのクラスの集合写真を見て)

A: 君はどこに写っているの？

B: (写真を見ながら) {?? まあ / えーと} どこだろうねえ…あつこれだ。

b. A: 君は将来どこに住みたい？

B: {まあ / えーと} どこだろうねえ…

(80a) のように、話し手が聞き手との共有が可能な事実に関する情報把握や整理、記憶探索をするような場合については、「ま」型フィラーの表出は不自然となる。

もう一つの類似点として、*well* の応答詞としての振る舞いがある。Schiffrin (1987) では、*well* の応答詞としての振る舞いが記述されているが、5.2.7 で述べたとおり、「まあ」も応答の際に、発話冒頭に現れることは自然である。

以上、話し手の生起する環境を話し手と聞き手の情報状態の観点から記述することによってフィラー間の通言語的な比較が可能となる。すなわち、「まあ」は話し手自身の情報が提示される際に現れるという点で *I mean* と共通する。話し手が思考状態にあることを示すことができる点、さらに応答詞として振る舞える点において、*well* とも共通する。つまり、「まあ」はそれぞれ部分的ではあるが、*I mean* や *well* と共通点を見いだすことができ、5.3 で行った記述が「ま」型フィラーだけに当てはまるわけではなく、通言語的な比較が可能であることが示唆される。

5.5 要約

本章では「まあ」の副詞的な用法について語用論的な分析を行い、さらに「ま」型フィラーを CSJ 対話資料を元に観察することで、「まあ」と「ま」型フィラーの連続性について議論をした。

まず、「まあ」の副詞的な振る舞いを整理し、「まあ」がスケールを持つ表現と共起すると scalar implicature のキャンセルが制限される現象をみた。その結

果「多く見積もって…」のような消極的評価としての意味合いを帯び、発話行為と共起することで、「まあ」が緩和表現的な振る舞いを見せることを示した。

緩和表現的に振る舞う「まあ」は、文末形式との共起関係を観察することで、聞き手と情報を共有できる環境で用いることができず、話し手しか知り得ない話し手の判断や未来的状況が述べられる時に現れうることを指摘した。

この性質は対話の種類ごとに観察した「ま」型フィラーでも見られた。すなわち、話し手が聞き手に未知の情報を提供するインタビューのような状況で「ま」型フィラーはよく見られる一方で、話し手と聞き手が相談しあうような状況では「ま」型フィラーがあまり見られなかった。

3.4において「ま」型フィラーが Billboard Corpus に頻出していた事実とも矛盾しない結果である。このことから、「まあ」は話し手が聞き手に未知の情報を提供する際に現れるという点において副詞的な「まあ」と「ま」型フィラーは共通しており、その点において両者には連続性があることがわかった。

第6章 結論

本論文では、日本語の自然談話中に現れるフィラーについてその音声形式ごとの振る舞いの違いについて観察し、それぞれの性質をいくつかの観点から記述した。特に「聞き手との関わり」の程度によって特徴づけられる談話形態の違いに応じて出現しやすいフィラーの種類が異なっていることを示した。その結果、フィラーは、談話中において話し手が聞き手に対してどの程度関わっているのか（いないのか）に応じて、選好される音声形式が異なることが明らかになった。すなわち、フィラーは談話における話し手の聞き手に対する関わりを反映する形式としてみなすことができることを示した。

まず、日本語の自然談話コーパスを用いて、フィラーの実態を明らかにした。その結果、フィラーの種類は多様ではあるが、概ね/e/を初頭に持つ「え」型フィラー、指示詞と同形の指示詞型フィラー、/ma/を初頭に持つ「ま」型フィラーの三種によって占められていた。

「え」型フィラーは「対話」において頻度が低く、また、対話（ポスター会話）においては、話し手は「え」型フィラーを発する間は聞き手から目をそらしやすい事が観察された。その点において、「え」型フィラーは自己指向性の強い音声形式であることがいえ、聞き手との関わりが弱い状況に親和性のあるフィラーであることが示唆された。指示詞型フィラーについては、談話の形態に関わらず平均的に表出されており、視線との同期に関しても「え」型フィラーと比較すると、聞き手に対しても視線が向けられていた。そのため、指示詞型フィラーは必ずしも自己指向性の強いフィラーとはいえず、実際「あの一」などが依頼の場面などにおいて、思考状態にあることを聞き手に演出する用法が認め

られることから聞き手に対する働きかけが認められる音声形式であることが裏付けられる。「ま」型フィラーは独話と比較して聞き手との関わりが強いポスター会話で頻出していた。一方で、話し手の視線は聞き手から外れる傾向にあり、「え」型フィラーと共通していたことから、自己指向性の高さが伺える。しかし、緩和表現的に振る舞う「まあ」の観察を通して、聞き手と情報を共有する環境で「まあ」の生起は制限され、逆に聞き手に対して未知の情報を提供するような環境では許される傾向があることがわかった。すなわち、「ま」型フィラーが、ポスター会話のような話し手が眼前の特定の聞き手に対して説明をするような状況で頻出する事実と合致する結果となった。

本論文で示したことは、直感的には明らかな結果ではある。例えば、**定延・田窪 (1993)** が指摘するように「えー」は独り言で表出されやすいが、「あー」は「えー」と比較すると独り言では使いづらいという直感から、「え」型フィラーと指示詞型フィラーの差異を感じることはできる。本論文は三種類のフィラーに対する認識を大きく変えるような観察結果は提出していない。しかしながら、次の三点において、本論文はフィラーの研究に対して一定の貢献を果たしたように思う。まず大量でかつ、収録状況や、条件が均質なデータを用いてフィラーの実態を明らかにした点が挙げられよう。これまでも談話の形態に応じたフィラーの観察は行われてきた (**山根 2003, Watanabe 2009**)。ただし、本論文は対話、独話および、「聞き手との関わり」という観点から、対話と独話の中間的位置づけに当たるポスター会話を比較することで各フィラーの表現形式間の分布の違いを示した。第二点目としては、話し手の視線のような、非言語情報とフィラーを関連づけ、直感に沿った結果を得ることができたという点が挙げられる。フィラーは音声的なジェスチャーであるという主張 (**田窪 1995, Schourup 2001**) という点からも、今後フィラーと身体動作をはじめとする非言語情報がどのように関わっているか考察することで、新たな知見が得られる可

能性がある。視線との関連はその文脈において一つの貢献であると考えられる。第三点目としては、これまで副詞としてもフィラーとしてもあまり研究蓄積のなかった「まあ」について一定の記述を与えたという点が挙げられる。「まあ」に対してスケールに作用するという記述を与えることで緩和表現的に振る舞うというこれまでの記述に根拠を与えた。さらに「まあ」がポスター会話で頻出するという自然談話コーパスからの結果と整合する記述を与えたという点が挙げられる。

本論文では議論することができなかつた課題もいくつか残されている。まず、本論文では、対象としたフィラーを「え」型フィラー、指示詞型フィラー、「ま」型フィラーに限定したが、特に指示詞型フィラーについては「あの一／その一」もしくはそれに類する形態に限定した。3.4における注(*18)でも議論した通り、「あ一」や「こ一」、「そ一」を「あの一」などと同じように扱うことは難しい。さらに言えば、本論文では指示詞としての共通項に着目して「あの一」と「その一」を同じように扱ってきたが、当然これらが全く同じ振る舞いをするかどうかは議論の余地がある。実際にア系指示詞と同形のフィラーとソ系指示詞と同形のフィラーを比較した研究も存在する(金(2006), 大工原(2008), 堤(2008)など)。本論文では Billboard Corpus においてソ系指示詞と同形のフィラーの出現頻度が少なく、サンプル数の問題から定量的な比較を断念せざるを得なかつた。今後、形態的なバリエーションに富む指示詞型のフィラーについてより深く考察する必要がある。

また、本論文ではフィラーの定性的な分析が不十分であったことも挙げられる。ただし、フィラーの定性分析は非常に難しい側面がある。例えば、作例、実例関わらず、用例を挙げてフィラーの「用法」を「分類」するような試みはこれまでも広く行われてきた。しかし、フィラーは本質的に文法的な非文を作ることができず、仮定した「用法」や「分類」に対する反証を提出することが難し

い。それ故に用法分類の妥当性を検証することが難しいという問題を常にはらんできた。さらに、フィラーは、自然談話を観察する限り、至る所で生起し、その数も多い。そのために、数例をもって一般化することが難しいという問題も生じる。本論文でも、できるかぎり定量的に各フィラーがどのような生起環境を好むかという点についてある程度の一般化を試みているが、話し手の性格など個人的要因が影響する可能性も否定できず、強い一般化をすることが現状では困難であると感じている。

もう一つ残された課題としては、他言語との比較が現状では不十分である。例えば、**金 (2006)** は韓国語の指示詞が間投詞的な振る舞いをすることを指摘している。

(81) ceki-yo {yeki-yo}, yeki mul com kacta-cwuseyyo

あそこ-待遇 ここ-待遇 ここお水 ちょっと持つ-ください
「あの、すみません。ここ、お水ちょっとお願いします。」

(**金 2006**: 776(32))

(82) cekiyo . . . , com tuli-l malssum-iissnuntey-yo

あそこ-待遇 ちょっとあげる-未来連体 言葉が ある-待遇
「あの…、ちょっとお話ししたいことがあります。」 (**金 2006**: 776(33))

金 (2006: 776) によると、韓国語でも、日本語のア系列指示詞に概ね相当する *ce* を含む *ceki-yo* (直訳: あそこです) は呼びかけや、言葉を探するときにも用いられるという。

さらに、琉球池間方言では、日本語の副詞である「もう」に当たる表現 *mmya* が、日本語と同様に副詞としての働きがあるだけでなく、フィラーのように振る舞う事が報告されている (**Hayashi et al. 2007, 川田他 2008**)。 *mmya* は会話だけではなく、昔語りのような独話形態でも頻繁に観察される。日本語のフィラー

が多くの場合、発話初頭（もしくは文頭）や文中で現れ、発話末（もしくは文末やイントネーションユニット末）ではあまり現れない (Iwasaki 1993) のに対し、*mmya* はむしろ文末やイントネーションユニット末で現れるという違いがある。

フィラーを含む間投詞はこのように、他品詞相当の言語表現と形式を共有する場合がしばしば見られる。どのような形式が間投詞としても振る舞うのか、さらに各言語が有する間投詞の振る舞いの共通点や相違点にはどのようなものが挙げられるのか、通言語的な考察はまだあまり行われていない。おそらく多くの言語が有しているであろう語彙範疇の一つである間投詞のより一般的な記述を進めていく上でも、様々な言語における間投詞の考察は重要であると考えられる。

用例出典

芥川龍之介 『葱』 1920年（「青空文庫」）

宮本百合子 『築地河岸』 青空文庫（底本：「宮本百合子全集 第五卷」、河出書房、1951年。初出：「新女苑」1937（昭和12）年9月号）

宮本百合子 『獄中への手紙 千九百三十四年（昭和九年）』 青空文庫（底本：「宮本百合子全集 第十九卷」、新日本出版社、1979年）

夏目漱石 『正岡子規』 青空文庫（底本：「筑摩全集類聚版 夏目漱石全集 10」、筑摩書房、1972年。初出：「ホトトギス」1908（明治41）年9月1日号）

夏目漱石 『手紙』 青空文庫（底本：「硝子戸の中」角川文庫、角川書店、1954年）

参考文献

- Ameka, Felix (1992) “Interjections: the universal yet neglected part of speech,” *Journal of Pragmatics*, Vol. 18, pp. 101–118.
- Argyle, Michael and Janet Dean (1965) “Eye-Contact, Distance and Affiliation,” *Sociometry*, Vol. 28, No. 3, pp. 289–304.
- Blakemore, Diane (1987) *Semantic constraints on relevance*, Oxford: Blackwell.
- (2002) *Relevance and linguistic meaning: the semantics and pragmatics of discourse markers*: Cambridge University Press.
- (2004) “Discourse Markers,” in Horn, Laurence and Gregory Ward eds. *Handbook of Pragmatics*, Oxford: Blackwell, pp. 221–240.
- 坊農真弓・片桐恭弘 (2005) 「対面コミュニケーションにおける相互行為的視点 — ジェスチャー・視点・発話の協調 —」, 『社会言語科学』, 第7巻, 第2号, 3–13.
- Brown, Gillian (1977) *Listening to spoken English*, Essex: Longman.
- Brown, Penelope and Stephen Levinson (1987) *Politeness*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Clark, Herbert (1993) “Introduction to Part I,” in Clark, Herbert ed. *Arenas of Language use*: University of Chicago Press, pp. 3–7.
- (1996) *Using language*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Clark, Herbert and Jean Fox Tree (2002) “Using *uh* and *um* in Spontaneous Speaking,” *Cognition*, Vol. 84, pp. 73–111.
- Clark, Herbert and Susan E. Brennan (1991) “Grounding in Communication,” in

- Perspectives on Socially Shared Cognition*, Washington: American Psychological Association, pp. 127–149.
- Clark, Herbert and Thomas Wasow (1998) “Repeating Words in Spontaneous Speech,” *Cognitive Psychology*, Vol. 37, pp. 201–242.
- 大工原勇人 (2008) 「指示詞系フィラー「あの(ー)」・「その(ー)」の用法」, 『日本語教育』, 第138巻, 53–62.
- 伝康晴・渡辺美知子 (2009) 「音声コミュニケーションにおける非流暢性の機能」, 『音声研究』, 第13巻, 第1号, 53–64.
- Erman, Britt (2001) “Pragmatic markers revisited with a focus on *you know* in adult and adolescent talk,” *Journal of Pragmatics*, Vol. 33, pp. 1337–1359.
- Fauconnier, Gilles (1975) “Polarity and the Scale Principle,” *CLS*, Vol. 11, pp. 188–199.
- Ferreira, Fernanda and Karl G.D. Bailey (2004) “Disfluencies and human language comprehension,” *Trends in cognitive sciences*, Vol. 8, No. 5, pp. 231–237.
- Fodor, Jerry A. (1981) *Representations : philosophical essays on the foundations of cognitive science*, Brighton: Harvester.
- Fukuda-Karlin, Atsuko (2003) “Functions of the Attitudinal Discourse Marker *maa* in Japanese Conversation,” in Clancy, Patricia ed. *Japanese/Korean Linguistics*, Vol. 11: CSLI Publications, pp. 53–66.
- Goldman-Eisler, Frieda (1968) *Psycholinguistics: experiments in spontaneous speech*, London: Academic Press.
- Goodwin, Charles (1980) “Restarts, Pauses, and the Achievement of a State of Mutual Gaze at Turn-Beginning,” *Sociological Inquiry*, Vol. 50, pp. 272–302.
- (1987) “Forgetfulness as an interactive resource,” *Social Psychology Quarterly*, Vol. 50, No. 2, pp. 115–131.

- Goto, Masataka, Katunobu Itou, and Hayamizu Satoru (1999) “A real-time filled pause detection system for spontaneous speech recognition,” in *Sixth European Conference on Speech Communication and Technology*.
- Grice, Paul (1989) *Studies in the Way of Words*, Cambridge: Harvard University.
- Hayashi, Yuka, Shoich Iwasaki, Takuya Kawada, and Tsuyoshi Ono (2007) “Exploration into Ikema discourse: *mmya*,” in *21st Pacific Science Congress*, p. 178, Okinawa.
- Herring, Susan C. (2001) “Computer-mediated discourse,” in Schiffrin, Deborah, Deborah Tannen, and Heidi E. Hamilton eds. *The Handbook of Discourse Analysis*, Malden: Blackwell, pp. 612–634.
- 飛田良文・浅田秀子 (1994) 『現代副詞用法辞典』, 東京堂出版, 東京.
- Horn, Laurence (1989) *A Natural History of Negation*, Chicago: The University of Chicago Press.
- 保科孝一 (1911) 『日本口語法』, 同文館, 東京.
- 井上優 (1993) 「日本語の「ぼかし表現」をめぐって」, 『日本学研究』, 第3巻, 74–91.
- 伊藤敏彦・峯松信明・中川聖一 (1999) 「間投詞の働きの分析とシステム応答生成における間投詞の利用と評価」, 『日本音響学会誌』, 第55巻, 第5号, 333–342.
- Iwasaki, Shoichi (1993) “The Structure of the Intonation Unit in Japanese,” in Choi, Soonja ed. *Japanese/Korean Linguistics*, Vol. 3, Stanford: CSLI Publications, pp. 39–53.
- 籠宮隆之 (2004) 『音声収録作業の概要 Version 1.0』, 国立国語研究所.
- 川田拓也 (2007a) 「日本語談話における「まあ」の役割と機能について」, 南雅彦 (編) 『言語学と日本語教育 V』, くろしお出版, 東京, 175–192.
- (2007b) 「「まあ」のスケール作用性 — 副詞的用法と談話的機能の統合

- に向けて—」, 『語用論研究』, 第9巻, 37-52, 12月.
- (2008) 「ポスター会話におけるフィラーと視線の同期について」, 『京都大学言語学研究』, 第27巻, 151-168.
- (2009) 「聞き手との関わり合いとフィラーの表現形式」, 『人工知能学会研究会資料SIG-SLUD-A902-04』, 21-27, 東京工業大学.
- 川田拓也・林由華・岩崎勝一・大野剛 (2008) 「琉球語宮古池間方言における *mmya* の談話機能」, 柴崎礼士郎 (編) 『言語文化のクロスロード』, 文進出版, 那覇.
- 川上恭子 (1993) 「談話における「まあ」の用法と機能 (一) - 応答型用法の分類-」, 『園田国文』, 第14巻, 69-79.
- (1994) 「談話における「まあ」の用法と機能 (二) - 展開型用法の分類-」, 『園田国文』, 第15巻, 69-79.
- Kay, Paul (1990) “*Even*,” *Linguistics and Philosophy*, Vol. 13, pp. 59-111.
- Kendon, Adam (1967) “Some functions of gaze-direction in social interaction,” *Acta Psychologica*, Vol. 26, pp. 22-63.
- 金善美 (2006) 「コ・ソ・アと i・ku・ce の感情的直示用法と間投詞的用法について」, 『言語文化』, 第4巻, 761-790.
- 喜多壮太郎 (2002) 「人はなぜジェスチャーをするのか」, 齋藤洋典・喜多壮太郎 (編) 『ジェスチャー・行為・意味』, 共立出版, 東京, 1-23.
- 小磯花絵・間淵洋子・西川賢也・斎藤美紀・前川喜久雄 (2004) 『転記テキストの仕様』, 国立国語研究所.
- 国立国語研究所 (2004) 『日本語話し言葉コーパス』, 国立国語研究所.
- 串田秀也 (1999) 「助け船とお節介-会話における参与とカテゴリー化に関する一考察」, 好井裕明・山田富秋・西坂仰 (編) 『会話分析への招待』, 世界思想社, 京都, 124-147.
- (2002) 「会話中の「うん」と「そう」-話者性の交渉との関わりで-」, 定

- 延利之 (編) 『「うん」と「そう」の言語学』, ひつじ書房, 東京, 5-46.
- Leech, Geoffrey (1983) *Principles of Pragmatics*, London: Longman. [池上嘉彦・河上誓作訳. 1987. 『語用論』. 紀伊国屋書店].
- Levelt, Willem (1983) “Monitoring and self-repair in speech,” *Cognition*, Vol. 14, pp. 41-104.
- (1989) *Speaking: From intention to articulation*, Cambridge, MA: MIT Press.
- Maclay, Howard and Charles E. Osgood (1959) “Hesitation phenomena in spontaneous English speech,” *Word*, Vol. 15, No. 1.
- 前川喜久雄 (2004) 『「日本語話し言葉コーパス」の概要 Version. 1.0』, 国立国語研究所.
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』, くろしお出版, 東京.
- Matsui, Tomoko (2001) “Semantics and pragmatics of a Japanese discourse marker dakara (so/in other words): a unitary account,” *Journal of Pragmatics*, Vol. 34, pp. 867-891.
- Matsumoto, Yoshiko (2001) “*Tyotto*: Speech Act Qualification in Japanese Revisited,” *Japanese Language and Literature*, Vol. 35, pp. 1-16.
- McNeill, David (1992) *Hand and Mind*, Chicago: The University of Chicago Press.
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』, 大修館書店, 東京.
- 溝口理一郎・池田満・來村徳信 (1999) 「オントロジー工学基礎理論—意味リンク, クラス, 関係, ロールのオントロジー的意味論—」, 『人工知能学会誌』, 第14巻, 第6号, 1019-1032.
- 三浦圭三 (1932) 『日本文法講話』, 啓文社書店, 東京.
- 水上悦雄・山下耕二 (2007) 「対話におけるフィラーの発話権保持機能の検証」, 『認知科学』, 第14巻, 第4号, 588-603.
- 森敏昭・吉田寿夫 (1990) 『心理学のためのデータ解析テクニカルブック』, 北大

- 路書房, 京都.
- 森本順子 (1994) 『話し手の主観を表す副詞について』, くろしお出版.
- 森田良行 (1973) 「感動詞の変遷」, 鈴木一彦・林巨樹 (編) 『品詞別 日本文法講座 接続詞・感動詞』, 明治書院, 東京, 178-209.
- (1983) 『基礎日本語 3 - 意味と使い方 -』, 角川書店, 東京.
- 森山卓郎 (1989) 「認識のムードとその周辺」, 仁田義雄・益岡隆 (編) 『日本語のモダリティ』, くろしお出版, 東京, 57-74.
- (1996) 「情動的感動詞考」, 『語文 (大阪大学国語国文学会)』, 第 65 卷, 51-62.
- 中右実 (1980) 「文副詞の比較」, 国弘哲弥 (編) 『日英語比較講座 第二巻文法』, 大修館書店, 東京, 157-219.
- Nakayama, Toshihide and Kumiko Nakayama (1997) “Japanese *kedo*: Discourse genre and grammaticization,” in Sohn, Homin and John Haig eds. *Japanese/Korean Linguistics*, Vol. 6, Stanford: CSLI Publications, pp. 607-638.
- 西坂仰 (1999) 「会話分析の練習—相互行為の資源としての言いよどみ」, 好井裕明・山田富秋・西坂仰 (編) 『会話分析への招待』, 世界思想社, 京都, 71-100.
- 大鹿薫久 (1994) 「本体把握 — 「らしい」の説 —」, 『日本語の研究: 宮地裕・敦子先生古稀記念論集』, 明治書院, 東京, 527-548.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik (1972) *A Grammar of Contemporary English*, London: Longman.
- Sacks, Harvey, Emanuel Schegloff, and Gail Jefferson (1974) “A Simplest Systematics for the Organization of Turn-taking for Conversation,” *Language*, Vol. 50, pp. 696-733.
- 定延利之 (2002) 「「うん」と「そう」に意味はあるか」, 定延利之 (編) 『「うん」と「そう」の言語学』, ひつじ書房, 東京, 75-112.

- (2005) 「「表す」感動詞から「する」感動詞へ」, 『月刊言語』, 第 412 卷, 33–39.
- 定延利之・中川明子 (2005) 「非流ちょう性への言語学的アプローチ」, 串田秀也・定延利之・伝康晴 (編) 『活動としての文と発話』, ひつじ書房, 東京, 209–227.
- 定延利之・田窪行則 (1993) 「談話における心的操作モニター機構 — 心的操作標識「ええと」と「あの(ー)」—」, 『平成4年度『日本語音声』E12班研究成果報告書』, 15–33.
- (1995) 「談話における心的操作モニター機構 — 心的操作標識「ええと」と「あの(ー)」—」, 『言語研究』, 第 108 卷, 74–93.
- 澤田治美 (1978) 「日英語文副詞類の対照言語学的研究」, 『言語研究』, 第 74 卷, 1–36.
- Schiffrin, Deborah (1987) *Discourse Markers*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Schourup, Lawrence (1985) *Common Discourse Particles in English Conversation*, New York: Garland.
- (2001) “Rethinking *well*,” *Journal of Pragmatics*, Vol. 33, pp. 1025–1060.
- Searle, John (1969) *Speech Acts: An essay in the Philosophy of Language*, London: Oxford University Press.
- 瀬戸口久雄・高梨克也・河原達也 (2007) 「多数のセンサを用いたポスター会話の収録とその分析」, 『情報処理学会研究報告, 2007-SLP-67 (6)』, 31–36.
- Shriberg, Elizabeth (2002) “To ‘errrr’ is human: ecology and acoustics of speech disfluencies,” *Journal of the International Phonetic Association*, Vol. 31, No. 1, pp. 153–169.
- Sperber, Dan and Deirdre Wilson (1995) *Relevance, 2nd Edition*, Oxford, UK: Blackwell. (内田聖二、中達俊明、宋南先、田中圭子訳 『関連性理論-伝達と認知- 第

- 2版』 研究社 1999).
- 鈴木一彦 (1973) 「感動詞とは何か」, 鈴木一彦・林巨樹 (編) 『品詞別 日本文法 講座接続詞・感動詞』, 明治書院, 東京, 138-177.
- 高梨克也・瀬戸口久雄・坊農真弓・河原達也 (2007) 「ポスター会話における発話の情報構造と基盤化の分析」, 『人工知能学会資料 SIG-SLUD-A702』, 21-28, 関西学院大学.
- 田窪行則 (1995) 「音声言語の言語学的モデルをめざして — 音声対話管理標識を中心に —」, 『情報処理』, 第36巻, 第11号, 1020-1026.
- (2006) 「日本語条件文とモダリティ」, 博士論文, 京都大学.
- Takubo, Yukinori (2007) “Two types of modal auxiliaries in Japanese: two directionalities in inference,” in McGloin, Naomi ed. *Japanese/Korean Linguistics*, Vol. 15, Stanford: CSLI Publications, pp. 440-451.
- 田窪行則・金水敏 (1997) 「応答詞・感動詞の談話的機能」, 音声文法研究会 (編) 『文法と音声 I』, くろしお出版, 東京, 257-279.
- Takubo, Yukinori and Satoshi Kinsui (1997) “Discourse Management in Terms of Mental Spaces,” *Journal of Pragmatics*, Vol. 28, pp. 741-758.
- Team, R Development Core (2008) *R: A Language and Environment for Statistical Computing*, Vienna, Austria. ISBN 3-900051-07-0.
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味 II』, くろしお出版, 東京.
- 寺尾康 (1992) 「文産出」, 『認知科学ハンドブック』, 共立出版, 東京, 370-381.
- 富樫純一 (2002) 「談話標識「まあ」について」, 『筑波日本語研究』, 第7巻, 15-31.
- (2004) 「日本語談話標識の機能」, 博士論文, 筑波大学.
- 時枝誠記 (1950) 『日本文法 口語篇』, 岩波全書 114, 岩波書店, 東京.
- 堤良一 (2008) 「談話中に現れる間投詞アノ (一)・ソノ (一) の使い分けについ

- て」, 『日本語科学』, 第23巻, 17–36.
- 和田萬吉 (1905) 『日本文典講義』, 早稲田大学出版部, 東京.
- Watanabe, Michiko (2009) *Features and Roles of Filled Pauses in Speech Communication: A corpus-based study of spontaneous speech*, 東京: ひつじ書房.
- Wharton, Tim (2003) “Interjections, language, and the ‘showing/saying’ continuum,” *Pragmatics & Cognition*, Vol. 11, pp. 39–91.
- Wierzbicka, Anna (1992) “The semantics of interjection,” *Journal of interjection*, Vol. 18, pp. 159–192.
- Wilkins, David P. (1992) “Interjections as deictics,” *Journal of Pragmatics*, Vol. 18, pp. 119–158.
- Wilson, Deirdre and Dan Sperber (1993) “Linguistic form and relevance,” *Lingua*, Vol. 90, pp. 1–25.
- (2004) “Relevance theory,” in Horn, L and G Ward eds. *Handbook of Pragmatics*, Oxford: Blackwell, pp. 607–632.
- 山根智恵 (2003) 『日本語談話におけるフィラー』, くろしお出版, 東京.
- 山下耕二・水上悦雄 (2007) 「図形説明課題対話におけるフィラーの分析—心的マーカよる内的処理プロセスの理解へ向けて—」, 『自然言語処理』, 第14巻, 第3号, 39–60.
- 安田喜代門 (1928) 『国語法概説』, 中興館, 東京.
- 山田孝雄 (1908) 『日本文法論』, 宝文館, 東京.